

曾於郡明町埋蔵文化財発掘調査会報書(2)

農用地総合整備事業(大隅中央区域)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長田遺跡

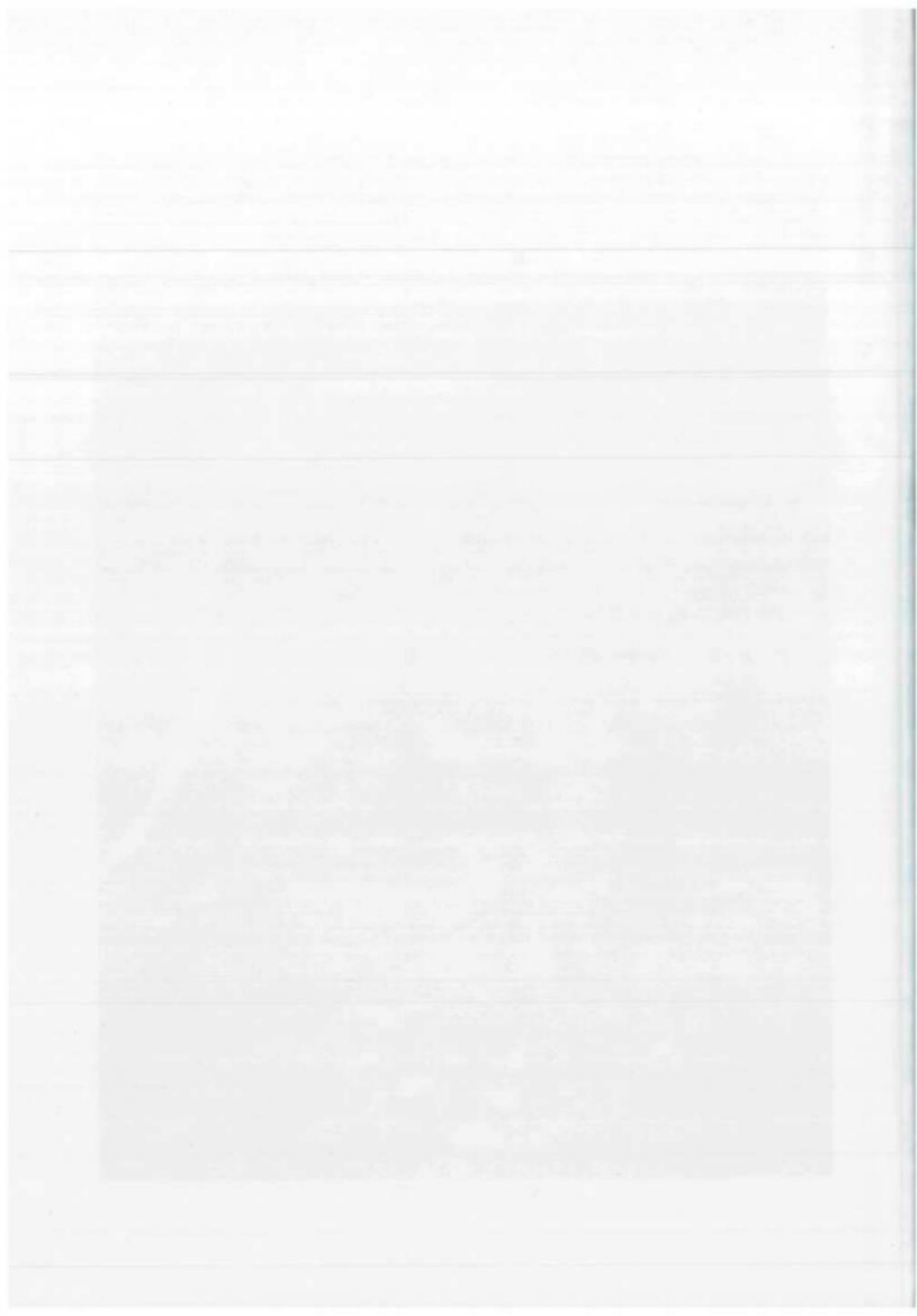


2003年3月

鹿児島県曾於郡明町教育委員会

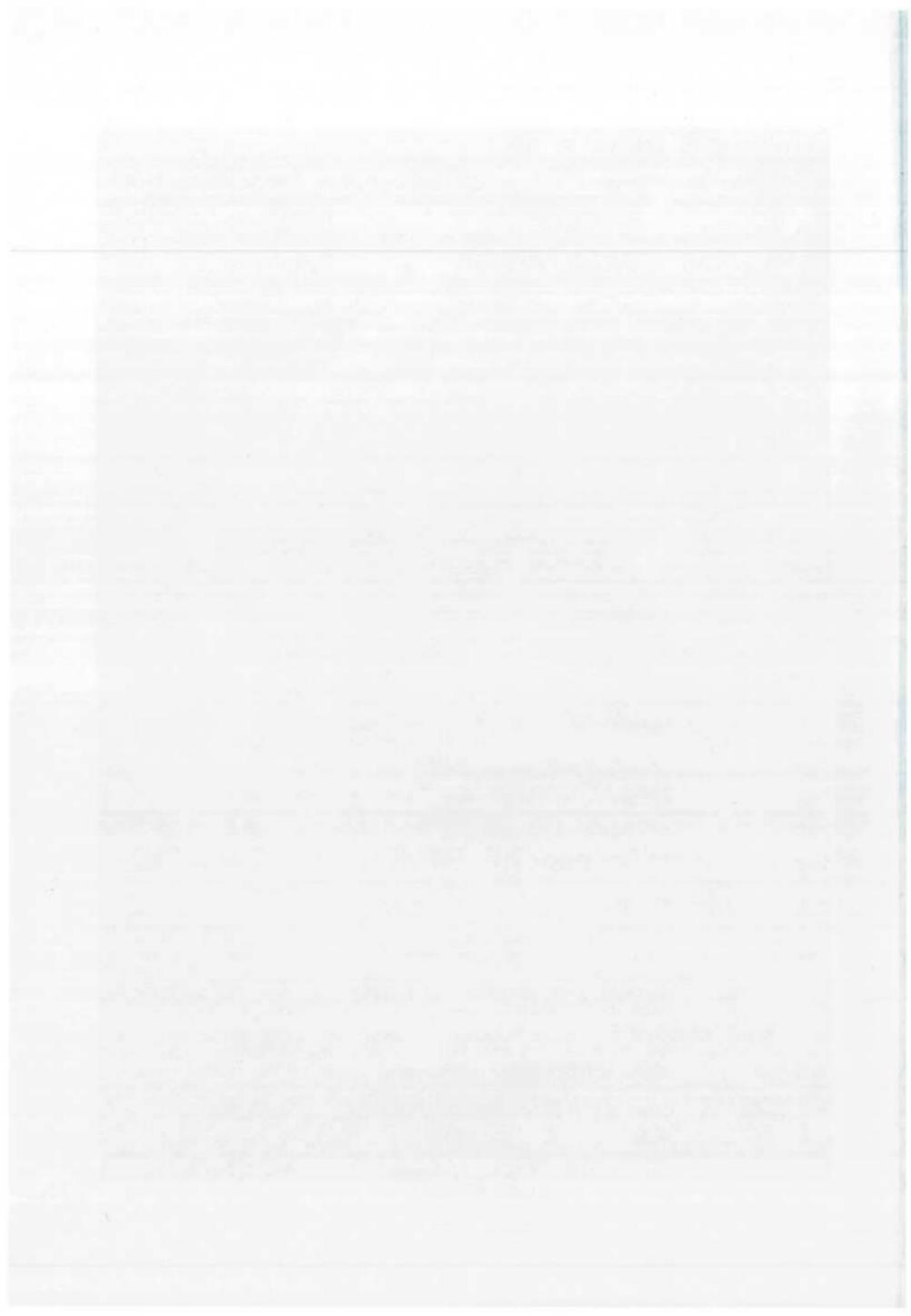


遺跡より志布志湾を望む





長田遺跡遺構完掘状況



序 文

この報告書は農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴い、有明町教育委員会が主体となり、平成10年度から平成11年度にかけて行った埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の成果をまとめたものです。

この長田遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世と様々な時代の遺物・遺構が確認されておりますが、特に2号竪穴住居跡については、古墳時代竪穴住居の上屋構造のわかる資料として貴重なデータを残しています。

この発掘調査の成果が、今後の研究資料として活用されるとともに、広く文化財愛護思想の啓発普及等、地域の文化財として活用し、文化財に対する理解を一層深めることができればと願っております。

最後に発掘調査に従事していただいた町民の方々をはじめ、現場における調査から出土資料の整理・報告書の刊行にいたるまでご指導・ご協力いただきました県教育委員会文化財課をはじめ各関係機関、多くの先生方並びに関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成15年3月吉日

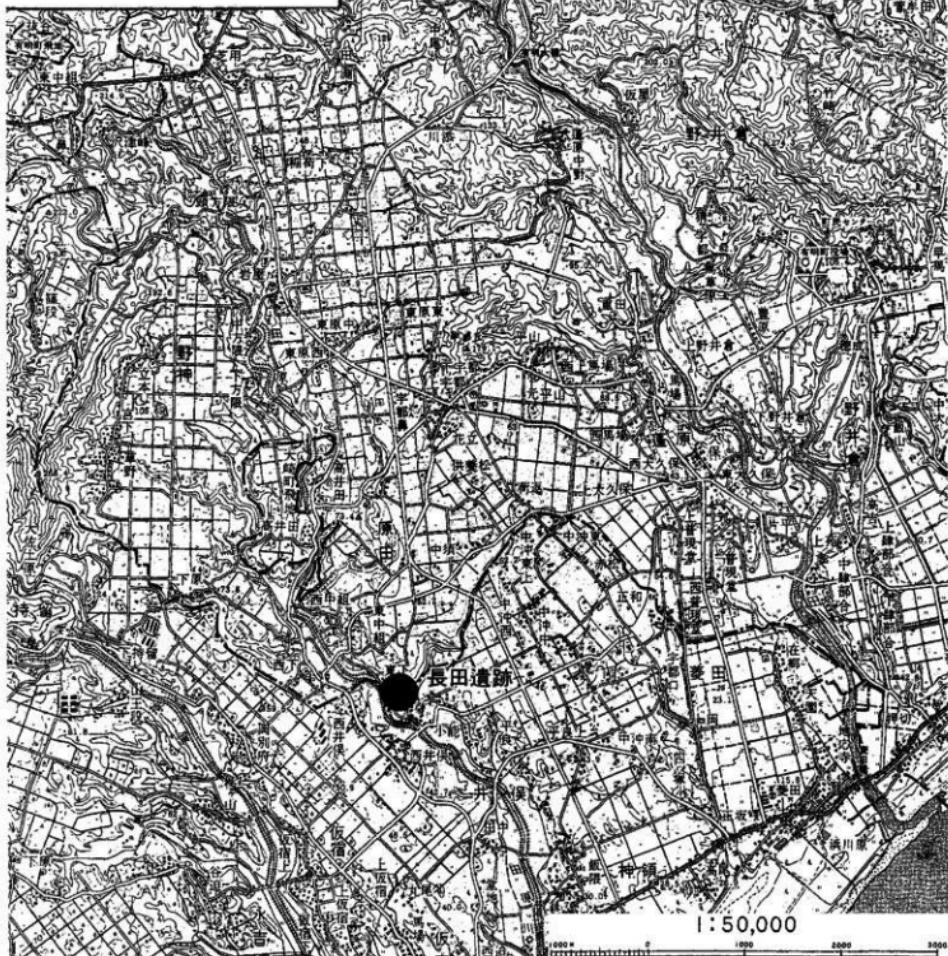
有明町教育委員会

教育長 大迫 亨

報告書抄録

ふりがな	ながたいせき							
書名	長田遺跡							
副書名	公団営農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	2							
編著者名	出口順一朗・堂込秀人							
編集機関	有明町教育委員会							
所在地	〒899-7492 鹿児島県曾於郡明町野井倉1756番地 TEL 0994-74-1111							
発行年月日	2003年3月14日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長田遺跡	鹿児島県曾於郡有明町原田字長田	46467	69-65	31° 27' 9"	131° 00' 12"	確認調査 19980810~0828 本調査 19990802~1117 報告書作成 20020401~1212	確認調査 364.95m ² 本調査 3,120m ²	農道整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
長田遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代	土坑 土坑 掘立柱建物跡 竪穴住居跡 棟持柱建物跡	山ノ口式土器				
		古墳時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡	成川式土器				
		中世	土壙墓 柵列	土鍋 白磁碗				

鹿児島県略図



長田遺跡の位置

例　　言

- 1 本報告書は、平成11年度に有明町教育委員会が緑資源公団九州支社の受託事業として実施した「農用地総合整備事業（大隅中央区域）」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県教育庁文化財課と県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得て、有明町教育委員会が調査主体者となって実施した。なお発掘作業の実施にあたっては、周辺地権者の御理解と地元作業員の御協力により円滑に行うことができた。
- 3 本書の執筆は、第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章第1節及び第3節・第Ⅳ章のうち遺構説明を出口、第Ⅲ章第2節・第Ⅳ章のうち出土遺物説明・第VI章を堂込がそれぞれ分担し、第V章第1節から第3節はパリノサーヴェイ株式会社による科学分析結果レポートであり、第V章第4節は札幌大学文化学部高宮広土助教授による2号竪穴住居跡床面から採取した土壤のウォーターフローーション法による大型植物遺体分析結果について玉稿をいただいたものである。なお纏集は出口・堂込で行った。
- 4 本報告書に使用した写真図版のうち、遺構撮影を出口・堂込が行い、遺物撮影については株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 5 遺物の実測は、野口、安野、若松、加藤及び株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、遺物図面の校正は堂込・出口が行った。遺構実測図トレースは、野口、安野が行った。
- 6 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 7 本書で用いたレベルは海拔絶対高である。
- 8 挿図の縮尺は各図に示してあるとおりである。
- 9 挿図の遺物出土状況図は、一般土器●、揭載土器●、一般石器○、揭載石器○、掲載鐵器□で統一表示してある。
- 10 発掘調査から報告書作成に至るまで、立神次郎氏（同センター調査課長補佐）、池畠耕一氏（同センター第一調査係長）、中村耕治氏（同センター第一調査係主任文化財主事）、鶴田静彦氏（同センター第三調査係文化財主事）、福永修一氏（同センター第二調査係文化財研究員）の御指導・御助言をいただいた。

目 次

序 文	
報告書抄録	
遺跡位置図	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	4
第Ⅱ章 位置の位置及び環境	10
第1節 有明町の概要	10
第2節 地形的環境	10
第3節 気候的環境	12
第4節 周辺の遺跡の概要	12
第Ⅲ章 発掘調査の概要	19
第1節 確認調査の概要	19
第2節 本調査の概要	19
第3節 層序	24
第Ⅳ章 発掘調査の成果	28
第1節 繩文時代	28
1. 土坑	28
(1) 1号土坑	28
2. 挖立柱建物跡	28
(1) 5号挖立柱建物跡	29
(2) 7号挖立柱建物跡	29
3. 竪穴住居跡	31
(1) 1号竪穴住居跡	31
(2) 3号竪穴住居跡	36
(3) 5号・6号竪穴住居跡	38

(4) 7号竪穴住居跡	41
4. 柱持柱建物跡	46
第3節 古墳時代	47
1. 挖立柱建物跡	47
(1) 2号挖立柱建物跡	47
(2) 4号挖立柱建物跡	47
(3) 6号挖立柱建物跡	49
2. 竪穴住居跡	50
(1) 2号竪穴住居跡	50
(2) 4号竪穴住居跡	59
3. 溝跡	59
第4節 中世	61
1. 土塙墓	61
(1) 1号土塙墓	61
(2) 2号土塙墓	61
2. 挖立柱建物跡	63
(1) 1号挖立柱建物跡	63
(2) 3号挖立柱建物跡	65
(3) 8号挖立柱建物跡	67
(4) 9号挖立柱建物跡	68
3. 檻列	69
(1) 1号檻列	69
(2) 2号檻列・3号檻列	69
第5節 包含層出土遺物	72
第V章 長田遺跡の自然科学調査	87
第1節 土器胎土中の植物珪酸体分析	88
(1) 試料	88
(2) 分析方法	88
(3) 結果	89
(4) 考察	90
第2節 古墳時代焼失家屋の炭化材の樹種同定、同炭化材の放射性炭素年代測定	91
(1) 試料	91
(2) 分析方法	91
(3) 結果	91
(4) 考察	91
第3節 47の完形の壺形土器の内部に残存していた土壤の花粉分析	92
(1) 試料	92

(2) 分析方法	92
(3) 結果	92
(4) 考察	92
第4節 2号住居跡の床面土壌のウォーターフローテーションと炭化種子の同定	95
(1) 遺跡調査の概要	95
(2) バックグラウンド	95
(3) 扱った資料	96
(4) 検出された大型植物遺体	96
(5) 考察	97
第VI章 発掘調査のまとめ	101

表 目 次

第1表 長田遺跡周辺遺跡地名表	15
第2表 住居跡他遺構 計測表	27
第3表 5号掘立柱建物跡 計測表	29
第4表 7号掘立柱建物跡 計測表	29
第5表 棟持柱建物跡 計測表	46
第6表 2号掘立柱建物跡 計測表	47
第7表 4号掘立柱建物跡 計測表	47
第8表 6号掘立柱建物跡 計測表	49
第9表 1号掘立柱建物跡 計測表	63
第10表 3号掘立柱建物跡 計測表	65
第11表 8号掘立柱建物跡 計測表	67
第12表 9号掘立柱建物跡 計測表	68
第13表 1号欄列 計測表	69
第14表 2号欄列 計測表	69
第15表 3号欄列 計測表	70
第16表 土器観察表	79
第17表 石器実測表	86

挿 図 目 次

第1図 長田遺跡周辺遺跡位置図	18
第2図 確認調査2トレンチ遺物出土状況	20
第3図 確認調査トレンチ位置図	21
第4図 長田遺跡グリッド配置図	22

第5図	長田遺跡付近工事計画図及び発掘調査区域図	23
第6図	長田遺跡土層断面図	24
第7図	土層柱状図	24
第8図	長田遺跡遺構配置図	25~6
第9図	1号土坑実測図（陥し穴状遺構）	28
第10図	2号土坑実測図（貯藏穴状遺構）	28
第11図	5号・7号掘立柱建物跡実測図	30
第12図	1号竪穴住居跡出土状況図	31
第13図	1号竪穴住居跡完掘状況図	32
第14図	1号竪穴住居跡出土遺物－1（1／3）	33
第15図	1号竪穴住居跡出土遺物－2（1／4）	34
第16図	3号竪穴住居跡出土状況図	35
第17図	3号竪穴住居跡完掘状況図	36
第18図	3号竪穴住居跡出土遺物（1／3）	37
第19図	5号・6号竪穴住居跡出土状況図	39
第20図	5号・6号竪穴住居跡完掘状況図	40
第21図	6号竪穴住居跡出土遺物（1／3）	41
第22図	7号竪穴住居跡出土状況図	42
第23図	7号竪穴住居跡完掘状況図	43
第24図	7号竪穴住居跡出土遺物（1／3）	44
第25図	棟持柱建物跡実測図	45
第26図	棟持柱建物跡柱穴断面図	46
第27図	2号・4号掘立柱建物跡実測図	48
第28図	6号掘立柱建物跡実測図	49
第29図	2号竪穴住居跡埋土内遺物出土状況実測図	50
第30図	2号竪穴住居跡出土状況図	51
第31図	2号竪穴住居跡炭化材出土状況図及び埋土土層断面図	52
第32図	2号竪穴住居跡完掘状況図	53
第33図	2号竪穴住居跡土壤サンプリング図	54
第34図	2号竪穴住居跡出土鉄器・石器（1／3、2／3）	55
第35図	2号竪穴住居跡出土遺物－1（1／4）	56
第36図	2号竪穴住居跡出土遺物－2（1／3、1／4）	57
第37図	2号竪穴住居跡出土遺物－3（1／3）	58
第38図	4号竪穴住居跡完掘状況図	60
第39図	1号土壤墓完掘状況図及び出土白磁	61
第40図	2号土壤墓遺物出土状況図及び出土遺物（1／2、1／3）	62
第41図	1号掘立柱建物跡実測図	64

第42図	3号掘立柱建物跡実測図	66
第43図	8号掘立柱建物跡実測図	67
第44図	9号掘立柱建物跡実測図	68
第45図	1号・2号・3号柵列実測図	71
第46図	包含層出土遺物-1(1/3)	74
第47図	包含層出土遺物-2(1/3)	75
第48図	包含層出土遺物-3(1/2, 1/4)	76
第49図	包含層出土遺物-4(1/2)	77
第50図	包含層出土遺物-5(1/2)	78

図版目次

卷頭図版1	遺跡より志布志湾を望む	
卷頭図版2	長田遺跡遺構完掘状況	
図版1	遺跡遠景 遺跡西側台地遠景 平成11年度本調査重機による表土除去作業(D9区付近)	105
図版2	平成10年度確認調査作業風景 平成10年度確認調査8トレンチ遺構検出状況 平成10年度確認調査2トレンチ遺構検出状況	106
図版3	平成10年度確認調査トレンチ埋め戻し作業 平成11年度本調査精査作業風景 本調査D E F 2・3・4区天地返しによる攪乱状況	107
図版4	本調査1号竪穴住居跡検出状況 本調査1号竪穴状況跡2/4半裁状況 本調査1号竪穴住居跡完掘状況	108
図版5	本調査調査風景 本調査1号竪穴住居跡完掘状況	109
図版6	2号竪穴住居跡検出状況 2号竪穴住居跡遺物出土状況 2号竪穴住居跡炭化材検出状況 炭化材中心部接近写真	110
図版7	2号竪穴住居跡完掘状況	111
図版8	3号竪穴住居跡検出状況 3号竪穴住居跡完掘状況1 3号竪穴住居跡完掘状況2	112
図版9	3号竪穴住居跡完掘状況 4号竪穴住居跡完掘状況	113
図版10	4号竪穴住居跡遺構検出状況1 4号竪穴住居跡遺構検出状況2 5・6号竪穴住居跡遺物出土状況1	114
図版11	5・6号竪穴住居跡遺物出土状況2 5・6号竪穴住居跡遺物出土状況3 5・6号竪穴住居跡完掘状況及び張り床断面	115
図版12	7号竪穴住居跡遺物出土状況 7号竪穴住居跡完掘状況 1号棟持柱建物跡及び1号溝跡検出状況	116
図版13	1号棟持柱建物跡完掘状況 1号棟持柱建物跡及び1号溝跡完掘状況 1号溝跡完掘状況	117
図版14	白磁碗及び土鍋出土状況	118

図版15	1号土壤墓検出状況 1号土壤墓半裁状況 1号土壤墓埋土掘り下げ作業	119
図版16	1号土壤墓遺物出土状況 D・E-6~13区遺構検出状況	120
図版17	B・C・D・E-11~15区遺構検出状況 C・D-14・15区遺構検出状況	121
図版18	B・C・D・E-11~15区遺構完掘状況 B・C・D-13~16区遺構完掘状況	122
図版19	8号掘立柱建物跡完掘状況 D・E-8~12区完掘状況	123
図版20	C・D・E-11~13区完掘状況 B・C・D-13~16区完掘状況	124
図版21	1号土坑完掘状況 土坑完掘状況 4号竪穴住居跡土層断面状況	125
図版22	2号竪穴住居跡遺物出土状況 4号竪穴住居跡内埴形土器出土状況	126
図版23	1号竪穴住居跡出土遺物-1	127
図版24	1号竪穴住居跡出土遺物-2	128
図版25	3号竪穴住居跡出土遺物	129
図版26	6号竪穴住居跡出土遺物	130
図版27	7号竪穴住居跡出土遺物	131
図版28	2号竪穴住居跡出土鉄器・石器	132
図版29	2号竪穴住居跡出土遺物-1	133
図版30	2号竪穴住居跡出土遺物-2	134
図版31	2号竪穴住居跡出土遺物-3	135
図版32	4号竪穴住居跡出土遺物(67) 1号土壤墓白磁(68) 2号土壤墓出土白磁(69) 2号土壤墓出土遺物(70)	136
図版33	包含層出土遺物-1	137
図版34	包含層出土遺物-2	138
図版35	包含層出土遺物-3	139
図版36	包含層出土遺物-4	140
図版37	包含層出土遺物-5	141

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

緑資源公団九州支社（以下「公団」）は、大隅中央区域において農用地総合整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財包蔵地の有無について鹿児島県教育委員会文化財課（以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けた鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）と有明町教育委員会社会教育課（以下「社会教育課」）が平成8年6月に埋蔵文化財分布調査を実施したところ、事業区内に遺物散布地として、長田遺跡が存在することが判明した。

この分布調査の結果をもとに公団、県文化財課、町社会教育課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下「確認調査」）を実施することになった。

確認調査は県立埋文センターの協力で、有明町教育委員会が調査主体となり平成10年8月10日から同月28日にかけて10ヶ所のトレンチを設定して行った。その結果、古墳時代・弥生時代の遺物包含層が確認され、同事業計画区域の大部分に遺物包含層が残存していることが判明した。

この結果を受けて、遺跡の取り扱いについて公団、県文化財課、町社会教育課は、遺跡の現状保存、及び事業の設計変更等について協議を実施した。その結果、事業推進にあたっては遺跡の現状保存は困難であると判断し、道路部分については記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

平成14年度は、県立埋文センターの協力を得て、役場庁舎内及び特設コンテナハウス内で整理作業と報告書作成を実施した。

第2節 調査の組織

[平成10年度確認調査]

調査主体	有明町教育委員会	教 育 長	大脇 茂夫
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	高崎 成行
調査企画担当	有明町教育委員会	社会教育課長補佐	
調査事務担当	有明町教育委員会	兼社会教育係長	濱島 兼雄
		社会教育課主事	黒川 晃
調査担当	有明町教育委員会 県立埋蔵文化財センター	社会教育課主事	中水 忍
		文化財主事	前追 亮一

[平成11年度本調査]

調査主体	有明町教育委員会	教 育 長	大脇 茂夫
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	立山 幸幸
調査企画担当	有明町教育委員会		

調査事務担当	有明町教育委員会	社会教育課長補佐	濱島兼雄
"		社会教育係長	井手佐喜雄
調査担当	有明町教育委員会	派遣社会教育主事	和田義文
"		社会教育課主事	出口順一朗
県立埋蔵文化財センター		社会教育課主事	中水忍
"		調査課文化財主事	堂込秀人
"		"	前迫亮一
"		"	黒川忠広
調査指導	鹿児島大学法文学部	教 授	上村俊雄
	札幌大学文化学部	助 教	高宮広土
	鹿児島大学法文学部	助 手	大西智和
	県立埋蔵文化財センター	調査課長補佐	新東晃一

[平成14年度報告書作成]

調査主体	有明町教育委員会	教育長	大迫亨
調査総括	有明町教育委員会	社会教育課長	立山廣幸
調査企画担当	有明町教育委員会	社会教育課長補佐	畠山昭俊
調査事務担当	有明町教育委員会	社会教育係長兼	
"		派遣社会教育主事	鬼塚仁
調査担当	有明町教育委員会	社会教育課主事	出口順一朗
	県立埋蔵文化財センター	調査課文化財主事	堂込秀人

[平成10年度発掘調査員]

市來原勝男	仮谷静子	小平光子	深谷芳治	鈴木絹枝
瀬口イク	瀬口エミ	田迫チヅ	立迫利治	谷川静枝
立本トシ	富山サチ	留村アヤ子	長竹健次	中野京子
中野ノリ	中村未吉	新保松夫	西平ミスミ	野口實
野口雪子	櫻山貞男	原浦八重子	原口幸藏	原田トミ
前田重良	前田正美	南川哲美	持永ハツ子	持留唯重
山添早苗	吉岡ミチ	若宮庸成		

(以上 社団法人有明町シルバー人材センター)

[平成11年度発掘調査員]

阿久根久子	井ヶ倉トミヨ	市來原勝男	稻付辰夫	宇都サエ
宇都ミキ	岡元初子	勝田ハツミ	仮谷静子	草場テル子
熊谷壽子	藏坪サエ	小平光子	鈴木絹枝	瀬口イク

瀬口エミ	瀬口トミエ	園山キヤク	竹平三郎	田追チヅ
立迫利治	谷川静枝	谷口巧	谷口チエ	谷口モギ
立山キクエ	立山利行	鶴田ヨネ	富迫利満	富山サチ
留村アヤ子	中野京子	中野ノリ	中本雅紹	成山シノブ
新保綾子	新保松夫	西エミ	橋口トシ	榎山貞男
榎山セツ	浜島イソヨ	濱田信雄	原浦八重子	原田トミ
平井静男	平元トミエ	福留美津江	前田重良	牧原正則
丸岡ツヤ	水野孝允	南ヒサ子	宮畠ナリ	持永ハツ子
持留唯重	持留照子	森山敬子	森山ミル	山添早苗
山平アヤ子	山平親行	山平一美	吉岡ミチ	若宮庸成

(以上、社団法人有明町シルバー人材センター)

【平成14年度整理作業員】

加藤英仁 川ノ上真理 野口さとり 安野美子 若松孝雄

なお、発掘調査の事前準備等にいたっては、町教育委員会社会教育課職員及び臨時職員等の支援及び協力をいただいた。

宮田幸一 西 美穂子 風留末子 田之上ともみ 吉井麗子
八久保 薫

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成10年8月10日から同年8月28日(13日間)、平成11年8月2日から同年11月17日(63日間)まで行った。

以下、日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

確認調査

平成10年度(平成10年8月10日～8月28日)

8月10日(月)

1～3トレンチを設定し、重機により表土の除去を行った後、II層からVI層上面まで掘り下げ。1トレンチより遺物、2・3トレンチより遺物及び遺構を確認。

8月11日(火)

1トレンチを南側へ調査範囲を拡張、2トレンチを西側へ調査範囲を拡張。1トレンチは拡張区域より遺物が多数出土した。2トレンチは拡張区域より1間×2間の掘立柱建物跡1棟を検出し、遺物が多数出土した。3トレンチはV層(池田降下軽石層)まで掘り下げた後、下層確認。写真撮影・土層断面図を作成し、埋め戻し。

8月12日(水)

1トレンチは拡張区域の掘り下げ、古道を検出。2トレンチは拡張区域の掘り下げ、V層上面で遺構検出をした結果、豎穴住居跡と思われる遺構(本調査の結果、2号豎穴住居跡)から壺及び高杯等多数の遺物が多数出土した。1トレンチ西側を北側方向に調査範囲を拡張。

8月17日(月)

1トレンチを東側に調査範囲を拡張、その掘り下げを行った。遺物及び柱穴を確認し、遺物の取り上げを行った。2トレンチは2号豎穴住居跡を掘り下げ。遺物が多数出土し、遺物の取り上げを行った。4トレンチを設定し、重機により表土の除去を行った後、II層を掘り下げ。

8月18日(火)

1トレンチはV層上面で遺構検出。2トレンチは2号豎穴住居跡を掘り下げ。遺物が多数出土し、取り上げを行った。4トレンチはII層の掘り下げ、東側へ調査範囲を拡張、遺物の取り上げを行った。5・6・7トレンチを設定し、重機により表土の除去を行った。5トレンチは地表面より1m弱まで天地返しによる擾乱を確認、6・7トレンチはVI層上面まで削平を受けていた。

8月19日(水)

1トレンチはV層上面での遺構精査及び写真撮影。1トレンチ及び2トレンチを繋ぐ形で1'トレンチを設定し、II層の掘り下げ及び遺物の取り上げ。2トレンチはV層上面での遺構精査を行い、写真撮影及び遺構配置図の作成。4トレンチはII層の掘り下げ。5トレンチは擾乱層からVII層まで掘り下げ。8トレンチを設定。

8月20日(木)

2トレンチは2号豎穴住居跡の成川式土器集中出土地点を中心に精査の後、写真撮影。4トレンチはII層を掘り下げ及び遺物の取り上げ。5トレンチはVII層上面での精査及び写真撮影。

6トレンチは埋め戻しを行った。7トレンチはVI層上面での遺構検出により柱穴を確認。8トレンチはII層掘り下げ。9・10トレンチを設定し、重機により表土の除去を行った後、II層掘り下げ。

8月21日（金）

4トレンチはV層上面で遺構検出により柱穴を確認。5トレンチは土層の精査及び写真撮影。7トレンチを南側に拡張し、柱穴を確認。8・9・10トレンチはII層掘り下げ。

8月24日（月）

1・2トレンチはV層上面で精査及び写真撮影。4トレンチはV層上面で精査及び写真撮影、土層断面図を作成した後埋め戻し。5トレンチは埋め戻し。8トレンチはII層からIV層まで掘り下げ、遺構検出を行った結果、柱穴及び竪穴住居跡（本調査の結果、1号竪穴住居跡）を確認。9トレンチはII層からIV層を掘り下げ、遺物の取り上げ。

8月25日（火）

1トレンチは埋め戻し。2トレンチは2号竪穴住居跡の成川式土器集中出土地点の平面図を作成。2'トレンチを設定、重機により表土の除去を行った後、II層を掘り下げ。8・9トレンチはII層からIV層まで掘り下げ。10トレンチはIV層掘り下げ及び遺物の取り上げ。また北側と東側にそれぞれ10Aトレンチ・10Bトレンチを設定、10AトレンチのII層を掘り下げ。

8月26日（水）

2'トレンチ・10AトレンチはII～IV層を掘り下げ。8・9トレンチはIV層の掘り下げ。10トレンチは遺構検出を行い柱穴を確認。10BトレンチはII層掘り下げ。

8月27日（木）

2トレンチは2号竪穴住居跡内遺物の平板実測および取り上げ。2'トレンチはII層掘り下げた後、遺物を取り上げ、遺構検出の結果柱穴を確認。9トレンチは遺構検出を行い、柱穴を確認、遺構配置図の作成。2・2'・9トレンチはその後埋め戻し。7トレンチIV層上面で精査及び写真撮影を行った後、遺構配置図の作成。8トレンチはII層及び1号竪穴住居を掘り下げ、遺物の取り上げ。10Aトレンチは遺構検出をし、柱穴を確認。10BトレンチはII～IV層を掘り下げ、遺物の取り上げ。

8月28日（金）

8トレンチは精査及び写真撮影の後、遺構配置図の作成。10トレンチはII～IV層を掘り下げ、精査及び写真撮影の後、遺構配置図の作成。7・8・10・10A・10Bトレンチの埋め戻し。

遺跡周辺の清掃及び発掘調査用品の運搬。長田遺跡確認調査の終了。

本調査

平成11年度（平成11年8月2日～11月17日）

8月2日（月）～5日（木）

D・E・F-2・3・4・5区から調査員立会いの下で重機により表土の除去した後、作業員による掘り下げ。D・E・F-2・3・4・5区まで天地返し（重機による深耕）により

VII層上面まで削平が見られた。

D・E・F-2・3区をVII層上面で遺構検出、精査及び遺構検出状況写真撮影を行った。

遺跡周辺の環境整備(立入禁止区域の設定等)。台風接近に伴い発掘調査地内の台風養生を施す。

8月6日(金) 降雨により発掘作業中止

8月9日(月)～13日(金)はお盆休み。

8月16日(月)～18日(水) 降雨により発掘作業中止。

8月19日(木)

D・E・F-2・3・4・5区に流れ込んだ泥の除去及び、D・E・F-4・5区の掘り下げ。E-6・7・8・9区を調査員立会いの下で重機により表土の除去。

曾於地区派遣社会教育主事研修会に伴い派遣社会教育主事10名来跡。

8月20日(金) 降雨により発掘作業中止

8月23日(月)～25日(水)

D・E・F-2・3・4・5区に流れ込んだ泥の除去。

D・E・F-4・5区の掘り下げ及び遺構検出、精査及び遺構検出状況写真撮影。E-6・7・8・9区のII層を掘り下げ。

D-6・7・8・9区を調査員立会いの下で重機により表土の除去。D-6・7・8・9区のII層の掘り下げ。

23日(月) 学校教職員初任者研修に伴い教職員3名(大重・今村・東條教諭)来跡、発掘研修を行った。農用地整備公団(現緑資源公団)佐藤氏来跡。
25日(水) 表土除去中にD-6区II層より白磁碗及び土鍋が出土。
白磁碗及び土鍋出土地点の遺構検出を行うが土坑は確認できなかった。

8月26日(木) 降雨により発掘作業中止。

8月27日(金)

D-6・7・8・9区に流れ込んだ泥の除去及びII層を掘り下げ。白磁碗及び土鍋出土地点(D-6区)のその後精査及び遺物出土状況写真撮影。

8月30日(月)～31(火)

D-6・7・8・9区のII層を掘り下げ。

調査対象区域にグリッド杭を設置。

白磁碗及び土鍋出土地点(D-6区)の実測図作成。

(30日(月) 農用地整備公団(現緑資源公団)佐藤氏・前野氏来跡。)

9月1日(水) 降雨により発掘作業中止。

9月2日(木)～3日(金)

D-6・7・8・9区に流れ込んだ泥の除去及びII層を掘り下げ。D-10・11区を調査員立会いの下で重機により表土の除去の後、D-10・11区のII層を掘り下げ。

9月6日(月)～10日(金)

D-8・9・10・11区のII層を掘り下げ。表土除去により動いたグリッド杭の再設置。

E-10・11区を調査員立会いの下で重機により表土の除去の後、D・E-10・11区のII層を掘り下げ。

D・E-6・7区をV層上面で遺構検出。

C・D・E-12区を調査員立会いの下で重機により表土の除去の後、C・D・E-11・12区のII層を掘り下げ。

D-7・8・9区土層の精査。

D・E-7・8・9・10・11区をV層上面で遺構検出及び遺構配置図を作成。

(9日(木) 農用地整備公団(現緑資源公団)有明事業所長、大沢氏、佐藤氏、前野氏来
遺跡。)

9月13日(月)～9月14日(火)

C・D・E-10・11・12区のII層を掘り下げ。

D・E-8・9区をV層上面で再び遺構検出。

9月16日(木) 降雨により発掘作業中止。

9月17日(金) D・E-10・11・12区のII層を掘り下げ。

9月21日(火) 台風接近に伴い発掘調査地内の台風養生を施す。

9月22日(水)～24日(金) 降雨により発掘作業中止

9月27日(月)～10月1日(金)

D・E-4・5・6・7・8・9・10・11区に流れ込んだ泥の除去及びV層上面で再び遺構検出し、1号竪穴住居跡の全体プラン検出。(D-9・10区)

D・E-12区のII層を掘り下げ、2号竪穴住居跡を検出。(D-11・12区)

A・B・C・D-13・14・15・16区を調査員立会いの下で重機により表土の除去の後、A・B・C-15・16区のII層を掘り下げ。

10月4日(月)～8日(金)

D-12・13・14・15区、B・C-14・15区のII層を掘り下げ、3号竪穴住居跡検出。(D・E-12区) 遺構検出。

C・D-12・13区を調査員立会いの下で重機により表土の除去。

2号竪穴住居跡(D-11・12区)を遺構検出した後、精査及び遺構検出状況写真撮影。

(6日(水) 高齢者教室生遺跡見学により来跡。社会教育課 井手佐喜雄社会教育係長、
橋口康彦社会教育指導員、鴻宇国際交流員も同行により来跡。)

10月12日(火)～15日(金)

B・C-14区、C・D-13・14区のII層を掘り下げ。4号竪穴住居跡(D-13・14区)、5号・6号竪穴住居跡(E-14区)検出した後、精査及び遺構検出状況写真撮影。

D・E-6・7・8・9・10区をV層上面で精査及び写真撮影を行った後、各遺構プランにチョークを入れ、再び精査及び遺構検出状況写真撮影。

1号竪穴住居跡(D-9・10区)、2号竪穴住居跡(D-11・12区)を十字に水糸を張り、埋土部分の2／4を掘り下げした後、精査及び遺物出土状況写真撮影。

10月18日（月）～22日（金）

A・B・C-14・15・16区のII層を掘り下げした後遺構検出した結果、棟持柱建物跡を確認。

D・E-7・8・9・10・11区、C・D・E-12・13区、B・C・D-14・15区、A・B-16区の精査及び遺構検出状況写真撮影。

1号竪穴住居跡（D-9・10区）は埋土部分の残り2／4を掘り下げ。

2号竪穴住居跡（D-11・12区）は、遺構内の遺物が多いため、平板実測及び取り上げを繰り返し行った。

3号竪穴住居跡（D・E-12区）は、埋土部分1／2を掘り下げした後、精査及び半裁状況写真撮影。

4号竪穴住居跡（D-13・14区）は、埋土部分の掘り下げ、遺構内の精査及び遺物出土状況写真撮影。その後、遺物平板実測及び取り上げ。

5号・6号竪穴住居跡（E-14区）は検出面（V層）より上に出土した遺物出土状況平板実測及び取り上げした後、V層上面まで掘り下げ遺構検出を行い、精査及び遺構検出状況写真撮影。

D・E-7・8・9・10・11区、C・D・E-12・13区、B・C・D-14・15区、A・B-16区の1／50の遺構配置図の作成を行い、掘立柱建物・柵列等の配列の検証。

発掘調査区域内の土坑を半裁、その遺構の性格を検証。その結果、落とし穴状遺構（D-13区）を確認。半裁の状態で精査及び遺構半裁状況写真撮影。

D・E・F-2・3区に検出された柱穴を完掘し、精査及び完掘写真撮影。

（18日（月）緑資源公團前田氏来跡。）

10月25日（月）～28日（木）

D・E-7・8・9・10・11区、C・D・E-12・13区、B・C・D-14・15区、A・B-16区の柱穴内埋土を掘り下げ。

4号竪穴住居跡（D-13・14区）南側土層断面図の精査及び写真撮影した後、土層断面図の作成。

1号竪穴住居跡（D-9・10区）は、精査及び遺物出土状況写真撮影、遺物の取り上げした後、精査及び遺構内柱穴等の検出状況撮影。柱穴内埋土の掘り下げをした後、精査及び完掘状況写真撮影。

2号竪穴住居跡（D-11・12区）は、平板実測及び取り上げ。大型の遺物が集中している地点は平面・断面実測図を作成、遺物の取り上げ。竪穴部埋土層（水糸を張り四つ切りにした際のベルト部）南壁・東壁の土層断面図を作成した後、ベルト部の掘り下げ。

5号・6号竪穴住居跡（E-14区）は、埋土部分の掘り下げ。

陥し穴状遺構（D-13区）は、半裁の残りの部分を掘り下げ、精査及び完掘状況写真撮影

10月29日（金）降雨により発掘作業中止

11月1日（月）～2日（火）

先週の雨の影響で発掘調査地内に流れ込んだ泥の除去。

D・E・F-1区を調査員立会いの下で重機により表土の除去。D・E・F-1区のほとんどはVI層上面まで削平を受けていたため、VI層上面で遺構検出を行った結果、F-1区で土壌墓を確認。精査及び遺構検出状況写真撮影した後、土壌墓の半裁及び柱穴の埋土部分掘り下げ。

1号竪穴住居跡（D-9・10区）は、1/20縮尺の実測図作成。

2号竪穴住居跡（D-11・12区）は、遺物平板実測及び取り上げの後掘り下げ。床面近くで炭化材が集中して検出。

3号竪穴住居跡（D・E-12区）は、残りの埋土部分1/2を掘り下げした後、遺構内の精査及び遺構内柱穴等の検出状況撮影。柱穴内埋土の掘り下げをした後、精査及び完掘状況写真撮影。

4号竪穴住居跡（D-13・14区）は、遺構内柱穴等の埋土部分の掘り下げ、精査及び完掘状況写真撮影。

5号・6号竪穴住居跡（E-14区）は、埋土部分の掘り下げ、精査及び遺物出土状況写真撮影。その後遺構内の精査及び遺構内柱穴等の検出状況撮影。柱穴内埋土の掘り下げをした後、精査及び完掘状況写真撮影。

11月3日（水）祝日のため現場作業中止

11月4日（木）～5日（金）

F-1区の土壌墓の半裁部分を掘り下げ、半裁の状態で精査及び遺構半裁状況写真撮影。
その後残りの埋土部分の掘り下げ、精査及び完掘状況写真撮影。

（5日（金）土壌墓の北隅より完形の白磁碗出土。）

11月8日（月）～12日（金）

航空写真撮影のため、発掘調査地内の各遺構プランにチョークを入れ精査及び発掘調査地周辺の清掃。9日（火）航空写真撮影。

D・E・F-1区、D・E-7・8・9・10・11区、C・D・E-12・13区、B・C・D-14・15区、A・B-16区に1mグリッドの水糸をはり、1/20縮尺の遺構実測図の作成。

（11日（水）富山達次町長・立山課長来跡。）

11月15日（月）～17日（水）

1/20縮尺の遺構実測図作成。

2号竪穴住居跡炭化材の取り上げをした後床面に検出された炉跡実測。床面を9ヶ所剝離しウォーターフローテーション用試料採取。

（15日（月）鹿児島大学法文学部教授上村俊雄氏、同大学法文学部助手大西智和氏を招き
　　出土した古墳時代遺物及び2号竪穴住居跡の検証。同日新聞発表を実施。）

第II章 遺跡の位置及び環境

第1節 有明町の概要

有明町は大隅半島の東南部に位置し、北東部に松山町、北西部で大隅町、東部で志布志町、南西部で大崎町に隣接し、町の東南部では約1.7kmが志布志湾に面している。総面積は98.05平方キロメートルあり、そのうち県内でも珍しい「飛地」1.02平方キロメートルが隣接する大崎町内にある。地形は、全体として志布志湾に向かって緩い勾配になっており、町の中央を菱田川が流れる。その両岸にシラス台地が拡がり、また河川の侵食による河岸段丘や沖積平野が形成され、その一帯は明治から昭和にかけて先人たちの開拓による野井倉開田・蓬原開田が拓がっている。

第2節 地形的環境

西南日本は「中央裂線」で内外帶に区分されるが、この地域は佐賀之関・八代線の東南部外帶に属し、鹿児島湾地溝によって薩摩半島と相対し、「高隈傾動地塊」の東部低地の一部をなし、安楽川・菱田川・田原川・肝属川などの諸川によって開析される火山噴出物の台地である。町の中央を流れる菱田川は、高隈山地に源を発し、祝井谷北方で南流に転じ、松山で支流を併せ南西に市榮を経由し、久保崎付近において大鳥川と合流し、それよりほぼ南流して菱田・押切において志布志湾に入る。

地域全体の起伏は、ほぼ100mの等高線をもって北部の山岳地帯と南部の火山噴出物の台地に二分することができるが、菱田川下流は河岸段丘の発達が明瞭である。便宜上次のように地形区を設定して述べることとする。

【菱田川沿岸低地】

1. 志布志湾沿岸及び砂丘

有明町の区域で直接志布志湾に面する汀線の延長は1,750mぐらいであり、志布志から肝属川河口に延びて発達する沿岸砂丘の一部を成している。菱田川などの河口付近では河道の変遷が著しく、沿岸流の方向は北東へ流れるものと南西へ流れる場合とあり、南西流が卓越している。なお横瀬古墳・神領古墳群や神社などが存在していることから、古墳時代以後あまり海岸線の変化はなかったものと考えられる。

2. 菱田川沿岸の河岸段丘地域

第一段丘面右岸に出水地区、左岸に小蓬原・下野井倉、更に下って田尾以南になると両岸に沖積層である水田化した段丘面が展開する。第二段丘面の末端よりの自然湧水を利用する他、左岸においては上水流堰より、右岸においては大久保井手により、藩政時代の頃から灌漑がなされ、台地面の野井倉開田・蓬原開田以前においては最も重要な生産地域であった。

第二段丘面は、菱田原に続く普現堂・大久保馬場が右岸に、野井倉下段から肆部合集落が左岸に対称的に並んでいる。20mの等高線は、野井倉上村付近において川を渡り片平東端に崖をつくり、末端には片平城の跡がある。

第三段丘面は、広い台地面をなして、野井倉では戦時中おかれた海軍飛行場の面から北方へ

延長して岳ノ山麓まで及び、西岸は宇都山麓の宇都ノ鼻集落を頂点として南に展開する台地面であって、いずれも高度30~60mの火山噴出物台地面である。

3. 上流の幼年谷の地域

旧野方村の瀬戸間伏川のあたりから熔結凝灰岩を侵蝕して奇岩の多い甌穴群等をつくり、いわゆる谷中谷の様相を呈しながら、菱田川の支流である大鳥川が倉ヶ崎付近から大きく湾曲して北流し、高牧城跡のある高牧台地を迂回して南下する。この間は、谷幅の狭い嵌入蛇行をなし、久保崎付近において本流と合流し、仮屋・中野の間を経て上水流ダムに至る。100mの等高線は綱瀬北方で川を渡って南下する。

【中央部火山灰台地】

南部低平地を流れる菱田川と安楽川に挟まれた台地は「野井倉原」と呼ばれ、北部は上段と下段の段丘面に分れる。菱田川と田原川の間は北部より「野神原」「蓬原原」「菱田原」と称され、田原川西方草野丘との間は「立本」「草野原」と呼ばれ南方大崎町の「仮宿原」に統く。いずれも高度20mから100m程度の火山灰（シラス）台地である。

【北部山岳・丘陵地域】

安楽川支流二つによって開析された伊崎田台地と、標高400mに及ぶ霧岳(408.3m)、岳ノ山(278m)、宇都山(179m)、草野丘(268m)及び伊崎田鋪・川添・山重から沢津ヶ峯を含む100mから170mの山岳地帯を含む地域である。これらは時代未詳とされた中生層を基盤として、準平原化の後周囲の台地が形成されたものといわれ、山地の開析は相当に進んでいるので火山灰台地面を除いてほとんど平坦面を残していない。東都安楽川よりの開析は二つの不渴流によって進められ、一つは本村から末広、宮塩に及ぶ谷と、一つは風八重より菅牟田、高下谷に至るものとがあり、西方菱田川よりの開析は市栄東方より南東に進んで著ヶ谷に及び、飯野・宝永・字尾の台地が両川の分水界となっている。開析が進んで地形が複雑になっていることは、この地域の交通に及ぼす影響が大きく、集落は谷間に点在している。

安楽川の一支流本村川は、典型的な樹枝状の谷を以て、台地を開析して霧岳の南麓にせまっている。霧岳は、川路・宮塩北方の台地の畠地域より北部は壯年期の開析が進み、頂上付近はほとんど平坦面を残していない。南北方向に谷を隔てて山ノ口台地の北方に孤立する字尾丘は標高255.2mを示し、土江との間を通ずる志布志～都城間県道が時を利用する所は眺望優れて西方はるかに大隅の平原を一望におさめる景勝地として『曾於八景』の一つに選ばれている。

もう一つの安楽川支流は旧国鉄志布志線安楽駅の付近より北方に開析を進め、風八重より西北に伸び高下谷に至る間、南西または北方に開く侵蝕を進めて、町の中央に位置する岳ノ山を開析して山麓線を鋸歯状に複雑にしている。岳ノ山北方において菱田川よりの浸食との分水界は、久木追南東方と高下谷西方との間ににおいて、100mの等高線の水平距離は240m程度となっているため岳ノ山を孤立させている觀がある。

菱田川西方地域においては、北方大鳥川嵌入蛇行の谷で大隅町と境し、野神原台地の北端にある山重平野、芝用を経て沢津ヶ峯より田原川の谷を隔てて西辺の草野丘に及ぶ一連の丘陵及

び高地がある。100mの等高線を追跡すると、蓬原中野西方より西方に走り、野神稻荷下丸岡より南下して、台地上に孤立した時代未詳中生層が残丘状に残ったものである宇都山の麓を一周して北上し、稻荷下南方より西走し田原川の左岸頭方限を経て西方仮屋谷において川を渡って南下しており、野神原を南北に二分している。

第3節 気候的環境

本町は緯度から見て北緯30度と32度の間に位置し、『表日本南海式気候区』の南端に位置しているので、亜熱帯に近い暖帶性の特色を示している。地域内の気候区を細かく区分することは困難であるが、志布志湾岸の低地と、野井倉・蓬原の台地面と、北方の高地帯とは、高度の垂直差異よりも隔海度の差異によって気温の地区的な変化が若干現われ、初・晩霜野地期も遅速がみられる。しかし降水量について地域差は著しくないが、夏の驟雨性の雨においては北方高地帯に多くなっている。年平均気温は17℃内外、最高気温は8月の28℃、最低は2月の9℃内外で年格差は19℃内外である。また年間降水量は2,000mm内外であるが、多い年は3,000mmを超えている。

第4節 周辺遺跡の概要

有明町は、中央に菱田川が貫流しており、東に安楽川、西に田原川がいずれも志布志湾に流れている。従ってその河川の流域は自然の湧水も豊富で、人間が住みつき生活するには格好の土地である。

町内の遺跡は、昭和49年、53年、55年、58年に大隅地区埋蔵文化財分布調査の一環として鹿児島県教育局文化課により分布調査が実施され、また近年の開発事業の増加に伴う分布調査が行われ、各時代の遺跡が町内全域にわたって確認された。現在（平成14年4月）までに確認されている遺跡数は、旧石器時代2ヶ所、縄文時代65ヶ所、弥生時代75ヶ所、古墳時代81ヶ所、古代19ヶ所、中世10ヶ所、その他（時代不詳等）10ヶ所が報告されているが、各時代が重複している遺跡もあり、遺跡の数としては203ヶ所が挙げられる。

【旧石器時代】

有明町内では旧石器時代の遺跡は、近年の開発に伴う埋蔵文化財発掘調査により、蓬原の仕明遺跡、屋部当遺跡〔11〕の2遺跡が確認されている。仕明遺跡からはマイクロコアやチップが数点、屋部当遺跡からは剥片尖頭器が1点出土している。

これらの遺跡は、湧水が近くに存在する台地に分布している。

【縄文時代】

有明町内では縄文時代の遺跡は65遺跡存在し、本格的な調査で縄文時代の遺物・遺構が近年多数確認されている。昭和53年度の立山遺跡（旧遺跡名室太郎遺跡）は晩期の遺物が、昭和59年度確認調査の山原遺跡・札元遺跡〔12〕『有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』からは、山原遺跡より入佐式等の晩期の土器や局部磨製の有肩打製石斧が、札元遺跡からは御領式と思われる後期の土器や有肩の扁平局部磨製石斧が出土している。昭和52年度分布調査の山ノ口遺跡から

は押型文、吉田式、塞ノ神式、春日式、指宿式、市来式等の早期、前期、中期、後期の土器や石鐵や石皿等の石器が多数出土している。平成6年度確認調査の高牧A遺跡からは塞ノ神式の早期の土器や磨石等の石器が出土している。平成7年度確認調査の北別府遺跡からは晩期土器片、平成8年度全面調査の楠原遺跡〔9〕からは後期の土器片、平成9年度全面調査の丸岡A遺跡からは前平式の早期の土器が出土している。平成11年度確認調査の下堀遺跡〔23〕・浜場遺跡〔22〕からはいずれの遺跡からも早期の土器片、平成12年度確認調査の穴倉B遺跡〔15〕からは石坂式等の早期の土器、牧原遺跡からは晩期の土器片、本調査の牧原A遺跡からは晩期の土器片や前平式の早期の土器、横堀遺跡からは塞ノ神式、石坂式、前平式の早期の土器や石鐵、磨石、敲石等の石器が出土し、集石群と連穴土坑1基が検出された。平成13年度本調査の仕明遺跡2次調査からは早期の土器片や多数の石鐵やスクレーバー等の石器、上苑遺跡からは早期の土器片、屋部当遺跡〔11〕からは早期の土器片や石皿、破碎した焼石が出土している。また飯野A遺跡、大迫遺跡、本村遺跡、黒葛遺跡からも前期、晩期、早期相当の土器及び遺構が確認されている。

これら縄文時代の遺跡旧石器時代の遺跡同様、低地よりも湧水が近くに存在する台地に多く分布している。

【弥生時代】

有明町内では弥生時代の遺跡は75遺跡存在し、本格的な調査で弥生時代の遺物・遺構が近年確認されているのは、前述した昭和52年度分布調査の山ノ口遺跡で、その遺跡からは山ノ口式土器が出土し、平成11年度確認調査の上苑A遺跡・下堀遺跡〔23〕からは弥生時代のものと思われる土器片が出土、前述した平成13年度全面調査の本村遺跡からは弥生時代のものと思われる土器片の他、花弁形住居1基が見つかっている。

また、土橋遺跡から明治40年に鹿児島県下でも1本しか出土例のない、長さ81.7cmの中広銅矛が発見されている。これについては現在東京国立博物館に所蔵されており、この複製品を平成15年3月に開館する有明町農業歴史資料館に展示する予定である。

これまでの分布調査等の結果から、現在集落の存在する近辺で遺跡が広く分布している。

【古墳時代】

有明町内では古墳時代の遺跡は81遺跡存在し、本格的な調査で縄文時代の遺物・遺構が近年多数確認されている。前述した平成8年度本調査の楠原遺跡〔9〕、平成9年度本調査の丸岡A遺跡、平成11年度確認調査の下堀遺跡〔23〕・浜場遺跡〔22〕、平成12年度確認調査の穴倉B遺跡〔15〕からはいずれも成川式土器片が出土している。平成12年度から平成13年度まで本調査を行った仕明遺跡からは多数の成川式土器も出土しているが、13基の竪穴住居跡や溝跡等の遺構が見つかっている。また平成13年度全面調査の屋部当遺跡〔11〕からは、成川式土器のほか、竪穴住居跡1基、土器溜まり2基の他溝跡の遺構が見つかっている。

また、田原川左岸の標高57.5mの台地にある大塚古墳群に属する原田古墳〔36〕は、廻り125m、直径40m、高さ8mの円墳であり、口碑によるとコノハナサクヤヒメの墓であるとされて

いるが、定かではない。その原田古墳の、南西に22mの畠地より昭和54年に地下式横穴が発見されている。玄室が長方形のプランで切妻の家形を呈し、玄室内には軽石製組合せ石棺が置かれていた。石棺内には保存状態はよくないが伸展葬の脛骨、腓骨、大腿骨、骨盤、肋骨、前腕骨、脊髄が残存し、鉄製の刀子1本が副葬されていた。

蓬原川右岸の標高45mの台地に位置する馬場地下式横穴群では、現在まで地下式横穴が6基確認されている。昭和37年の県道拡張工事により台地を掘り下げた結果、一部は削平されたが、玄室から埋葬人骨と副葬された鉄剣2本、三角錐1本が発見されている。この他にも、菱田川、田原川の流域に円墳や地下式横穴の分布がしられているが、ほとんど調査は行われていない。

【古代】

有明町内では古代の遺跡は19遺跡存在し、いずれも分布調査により確認された遺跡であり、本格的な調査での確認はされていない。

【中世】

有明町内では中世の遺跡は10遺跡存在し、内4遺跡は城跡である。中世において諸郡郡教仁郷三百五十町の中心であり教仁郷氏の居城であった蓬原城跡をはじめ、金丸城跡、片平城跡、高牧城跡があるが現在まで本格的な調査はなされていない。

その他、本格的な調査で中世の遺物・遺構が確認されているものは、平成12年度から平成13年度まで本調査を行った仕明遺跡であり、青白磁合子や鉄製の刀子、陶磁器片が出土し、堀跡や古道、土壙墓が検出されている。

【参考文献】

有明町教育委員会 札元遺跡・山原遺跡 『有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』 1985年

有明町郷土史編纂委員会 『有明町誌』 1980年

河口貞徳 『日本の古代遺跡38 鹿児島』 1988年

第1表 長田遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構等	備考
1	古池	野神古池・高尾	台地	弥(中)	石斧(磨製・打製)	
2	牧原A	野神牧原・高尾・中牧	台地	繩(後)	石斧(磨製・打製)	
3	牧原B	野神牧原	台地	古墳		
4	岩屋古墳群	野神河内・井手元	台地	古墳	円墳3基	
5	廣迫	野神廣迫・中國	台地	古代	土師器	H10農政分布
6	丸岡A	野神丸岡・中ノ丸	台地	古墳		H10農政分布
7	丸岡B	野神丸岡 蓬原袖原・山ノ後	台地	古墳		H10農政分布
8	楠原B	蓬原楠原・山ノ後・屋部当	台地	古墳		H10農政分布
9	楠原	蓬原楠原・大追	台地	弥・古墳	土坑2基・成川式	H6確認調査 H9全面調査
10	楠原古墳	蓬原大追・金丸	台地	古墳	円墳	
11	屋部当	蓬原字屋部当・大追・楠原	台地	旧 繩(早) 古 墳	刺片尖頭器 集石1基 成川式	H11確認調査 H13全面調査
12	長塚古墳	野神岩道・立下	台地	古墳	円墳	
13	渡迫	野神渡迫・岩道・蘭田	台地	古代	土師器	H11農政分布
14	渡迫古墳群	野神岩道	台地	古墳	円墳	
15	穴倉	野神穴倉	台地	繩(早) 弥 古 墳	石坂式 山ノ口式 成川式	H9全面調査
16	中方隈古墳群	野神中方隈	台地	古墳	円墳	
17	大堀	野神字大堀・水喰	台地	古 墳 古 代		H10農政分布
18	水喰	野神水喰・蓬原山ノ後	台地	古 代		H10農政分布
19	山ノ前	蓬原山ノ前	台地	古 墳		H10農政分布
20	捨り	蓬原捨り・日鑑・山ノ前	台地	弥(中)	土器・石器	
21	日鑑	蓬原日鑑・捨り・山ノ前	台地	古 墳		H10農政分布

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構等	備考
22	浜場	野神字浜場	台地	縄・古墳	成川式	H11確認調査 H14全面調査
23	下堀	野神下堀・立山	台地	縄(早) 弥・古墳	成川式	H11確認調査 H14全面調査
24	上原	原田上原	台地	古墳	土師器	H11農政分布
25	立山	原田立山	台地	古墳		H10農政分布
26	塚堀	原田塚堀・下原	台地	縄・歷	土師器	
27	高井田古墳群	原田下原	台地	古墳	円墳1基・方墳1基	
28	下原	原田下原	台地	古墳		H10農政分布
29	風穴	野神風穴・五色	台地	古墳		H10農政分布
30	五色	野神五色・風穴	台地	古墳		H10農政分布
31	上五敷	原田上五敷・五色	台地	古墳		H10農政分布
32	西ノ堀	原田西ノ堀・上五敷	台地	古墳		H10農政分布
33	清水	原田清水	台地	弥(中)	石斧(打製・磨製)	H遺跡名 元宮の下・水田
34	東中原	原田東中原・大塚	台地	古墳		H10農政分布
35	坂ノ上	原田坂ノ上・前田・西原	台地	弥・古墳		H11農政分布
36	原田古墳	原田大塚・出口・牧	台地	古墳	円墳5基・方墳1基	S44.4.1町指定
37	大塚	原田大塚・出口	台地	古墳		H10農政分布
38	長田	原田長田	台地	弥・古墳 中世	山ノ口式・成川式 棟持柱建物跡・白磁碗	H10確認調査 H11全面調査
39	大久保	大崎町持留大久保	台地	縄(後)	市来式・指宿式 打製石斧	
40	赤野原	大崎町持留赤野原	台地	弥・古墳		H11農政分布
41	五鳴	大崎町岡別府五鳴	台地	弥・古墳		H11農政分布
42	坂本原	大崎町岡別府坂本原	台地	弥・古墳		H11農政分布
43	早馬	大崎町岡別府早馬	台地	弥・古墳		H11農政分布
44	干浅	大崎町井俣干浅	台地	弥・古墳		H11農政分布
45	金丸城	大崎町井俣	台地	鎌倉 (推定)	青磁・白磁・古伊万里・炉跡16基	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構等	備考
46	井俣牧	大崎町井俣牧	台地	弥・古墳		H11農政分布
47	中沖B	大崎町中沖	台地	弥・古墳		H11農政分布
48	中沖A	大崎町中沖	台地	弥・古墳		H11農政分布
49	久木野堀	大崎町菱田久木野堀	台地	弥・古墳		H11農政分布
50	平良上B	大崎町中沖平良上	台地	古 墳		H 9 農政分布
51	平良上C	大崎町中沖平良上	台地	弥・古墳	成川式	H 9 農政分布
52	平良上A	大崎町中沖平良上・大崎町菱田清水ノ上	台地	繩・古墳		H 9 農政分布
53	宮 豊	大崎町井俣宮豊	台地	古 墓 古 墳 代	土師器	H11農政分布
54	坂 上	大崎町井俣坂上	台地	弥・古墳		H11農政分布
55	堂 園 堀	大崎町井俣堂園堀	台地	弥・古墳		H11農政分布
56	荒 園	大崎町仮宿荒園	台地	弥・古墳		H11農政分布
57	下 堀	大崎町持留・岡別府	台地	古 墳		H 8 農政分布
58	永吉天神段	大崎町永吉天神段	台地	古 墓 古 墳 代	土師器	H11農政分布
59	永 迫	大崎町永吉永迫	台地	繩・弥 古 墓 古 墓		H11農政分布
60	船 迫	大崎町永吉船迫	台地	弥・古墳		H11農政分布
61	柿 木	大崎町井俣柿木	台地	弥・古墳		H11農政分布



第1図 長田遺跡周辺遺跡位置図

第III章 発掘調査の概要

第1節 確認調査の概要

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するために $2\text{m} \times 6\text{m}$ のトレンチを基本にして実施した。(第3図)長田遺跡のほぼ中央にあたる無作付け地に1~3トレンチを設定、その後、西側へ4~8T、東側へ9から10Tを随時設定し、各トレンチにおいて遺物、遺構の広がりを確認しながら拡張していく。I a・I b層を重機により除去したのち人力による掘り下げ作業を実施し、遺構等の広がりが想定されたトレンチにおいては、事業範囲内で随時拡張した。包含層の残存状況は、全体的に良好であったが一部茶の作付け地で耕土改良いわゆる「天地返し」がされており、その部分については遺物採集のみとなった。

1 T…II層上面で古道と思われる遺構を検出し、さらにII層中からは弥生時代・古墳時代の土器が出土した。また、II層を埋土とする柱穴4個をV層上面で検出した。

2 T…弥生時代の高床建物跡(1間×2間)を1基、古墳時代の竪穴住居跡を1基それぞれ検出した。竪穴住居跡の埋土からは、壺・甕・高杯などの大片が集中して出土した。

3 T…包含層は残存していたが、遺物・遺構ともに見られず、重機で一部を掘り下げ、アカホヤの直下に乳白色の砂質層が深部に厚く堆積していることを確認した。

4 T…II層から多数の遺物が出土し、V層上面で柱穴も1個検出した。

5 T…包含層が攪乱されており、遺物の採集のみ行った。

6 T…遺物、遺構ともに見られなかった。

7 T…VI層上面で1列に並んだ柱穴3個を検出した。

8 T…II層から遺物が多数出土、V層上面で柱穴5個、弥生時代の竪穴住居跡の一部を検出した。

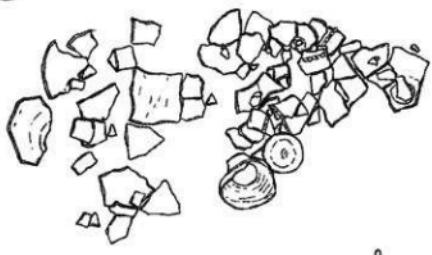
9 T…II層から遺物が多数出土、V層上面で柱穴4個を検出した。

10 T…II層から遺物が出土、V層上面で柱穴数個を検出した。

確認調査の結果、1 T~4 T、6 T~10 Tの範囲に渡って弥生時代・古墳時代の遺物包含層が確認された。5 Tの天地返しはシラス層まで影響をうけており、天地返しの影響を受けている部分の面積は5 Tの西側に茶樹が作付けされていて、トレンチを設定することができず特定できなかった。その結果から道路にかかる遺跡面積は $3,120\text{m}^2$ という判断に至った。また2 Tや8 Tに竪穴住居跡プランが検出され、遺物量も多いことから、弥生時代・古墳時代の集落が存在する可能性が極めて高くなつたと考えられる。

第2節 本調査の概要(第4図・第5図)

確認調査の結果を受けて、III層の古墳時代包含層を目安として、北西から表土剥ぎを行った。1区には杉の木が残っていたため、2区の途中から表土剥ぎを行った。3区から5区にかけては、茶畠の土壤改良のためシラス層まで攪乱されており、重機の爪痕が生々しかった(図版3)。6区から8区にかけては、旧表土と思われる黒褐色土層と灰褐色土層が互層状態で堆積しており、本来のII層の把握に手間取った。D-6区で2号土壙墓に伴う白磁碗と土鍋が出土し、中世包含層および中世の遺構面が把握できた。もともと1区側に緩やかに傾斜しており、北西側では土層の残存が良好



第2図 確認調査2トレンチ遺物出土状況

0

50cm

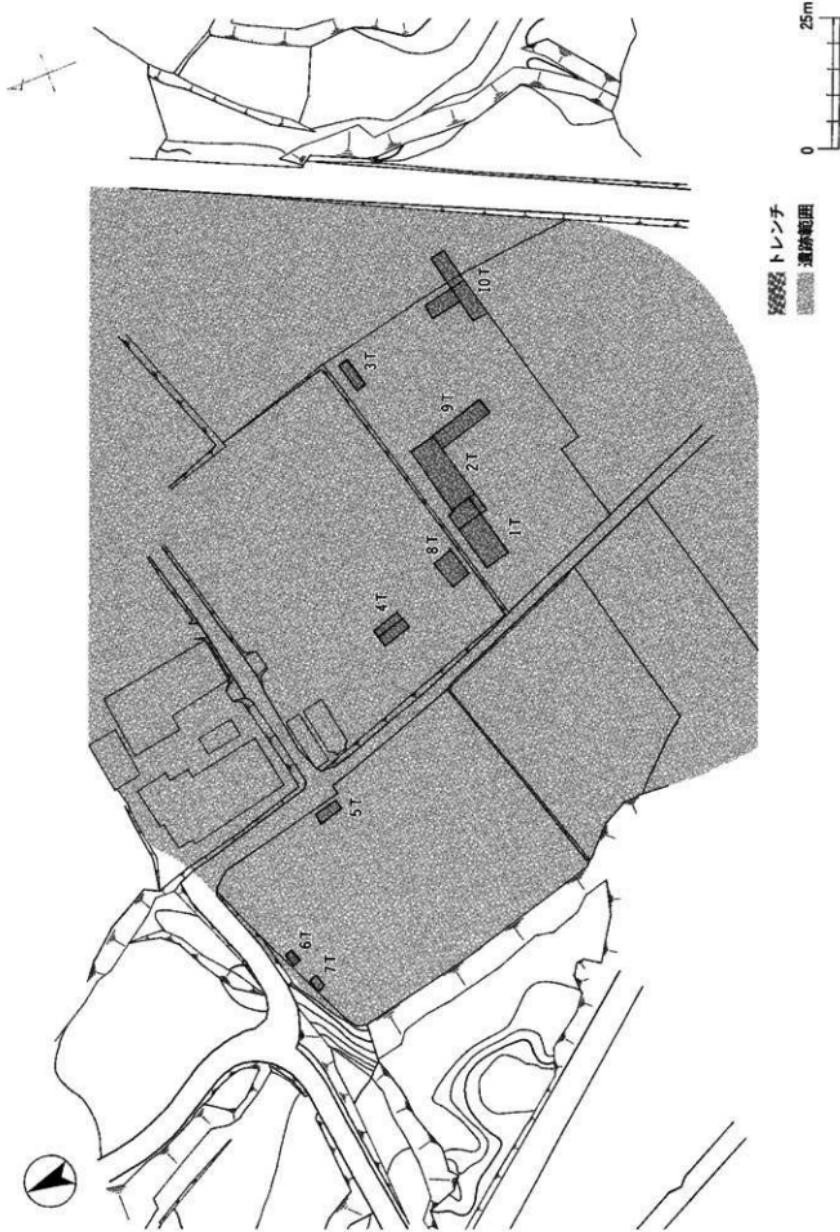
であるが、南東側はV層から上位が薄い堆積となっている。II層の途中までを表土剥ぎすることとして、中世の遺物包含層から、包含層掘り下げを行った。表土剥ぎを追いかけるように5~6区から発掘調査を行っていき、順次16区側に広げていった(図版5)。中世の遺物は6区から10区で出土したが、量的には多くなかった。弥生時代の遺物は9・10区と13~15区からおもに出土し、古墳時代の遺物は11~13区を中心に出土した。中世の掘立柱建物跡の検出が最も早く、1区が杉の木の伐採後に遺構検出を行ったため、1号土壙墓の検出が最後であった。出土遺物は平板測量により記番してとりあげた。遺物の集中は遺構部分以外ではなく、まんべんなく出土する。確認調査で1号住居跡のプランと2号住居跡の埋土の上位にあった土器集積(第2図)は確認されていたので、集落遺跡として検出作業をおこなった。

遺構の検出は、10区まではIII層から順次行ったが、11区からはIV層途中からの検出作業となった。遺構は各時代遺物を伴うことで時期の決定を行ったが、遺構検出層・遺構内の埋土からも行った。中世の遺構はII層土を埋土とする。VI層上面ないしはV層上面で検出されIII層土を埋土とするものが古墳時代、V層上面で検出されVI層土を埋土としているものを弥生時代ととらえた。V層上面を遺構の最終検出面とした。

この結果、中世では土壙墓2基、1×2間の掘立柱建物跡2棟、1×1間の掘立柱建物跡2棟、櫛列3条を検出した。古墳時代では、竪穴住居跡3基、1×1間の掘立柱建物跡4棟を検出した。弥生時代では竪穴住居跡4基、1×1間の掘立柱建物跡2棟と棟持柱をもつ掘立柱建物跡1棟と袋状土坑1基を検出した。また縄文時代では、陥し穴と考えられる土坑を1基検出した。遺構番号については、発掘調査時の遺構番号をそのまま使用している。

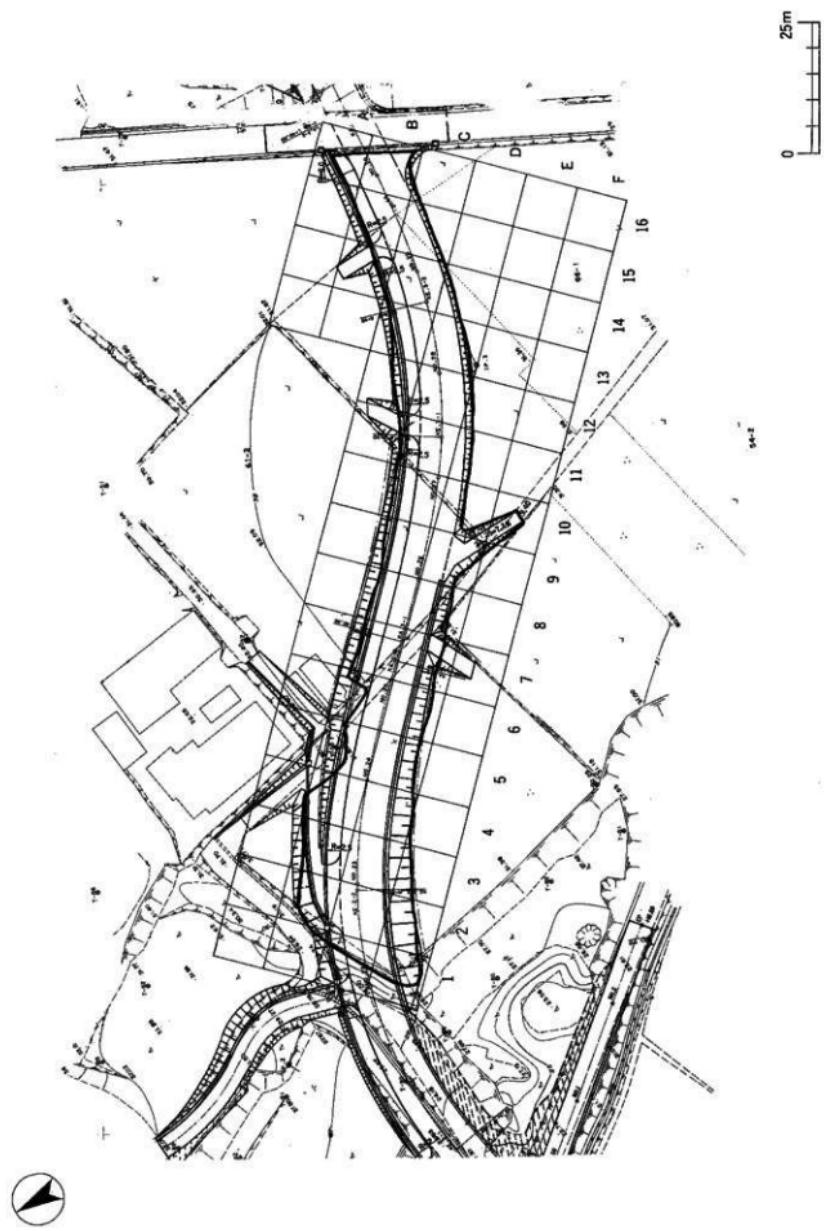
掘立柱建物跡の柱穴とおもわれるビットについては、大まかに平板測量後に埋土を記録し掘り下げる。住居跡は4分割ないし2分割して掘り下げ、埋土の遺物平板測量で取り上げ、床着遺物は1/10の実測を行うこととした。古墳時代の2号住居跡は炭化材が検出され、住居の部材と考えられた。弥生時代も古墳時代も竪穴住居跡はVI層のアカホヤ火山灰層を掘り込んでいる。VI層の下位は水成堆積層があり、さらにその下位は、シラス起源のローム層とシラス層となっており、旧石器時代から縄文時代早期の遺物包含層は確認されていない。本調査終了後に側道への取り付け部分について、追加調査を行い、弥生時代の竪穴住居跡の7号住居跡を検出した。遺構は全体配置図を1/20の平面実測をおこなった。

2号住居跡の埋土出土の完形土器の中の土壤については花粉分析を試み、床面付近の土壤のウォーターフローーションを行った。また炭化材についての樹種同定と年代測定も行った。出土した土器について、型式のわかる破片を使用して植物珪酸体の有無を調べ、併せて県内の他の遺跡の試料も比較試料とした。この結果は第V章に述べられている。

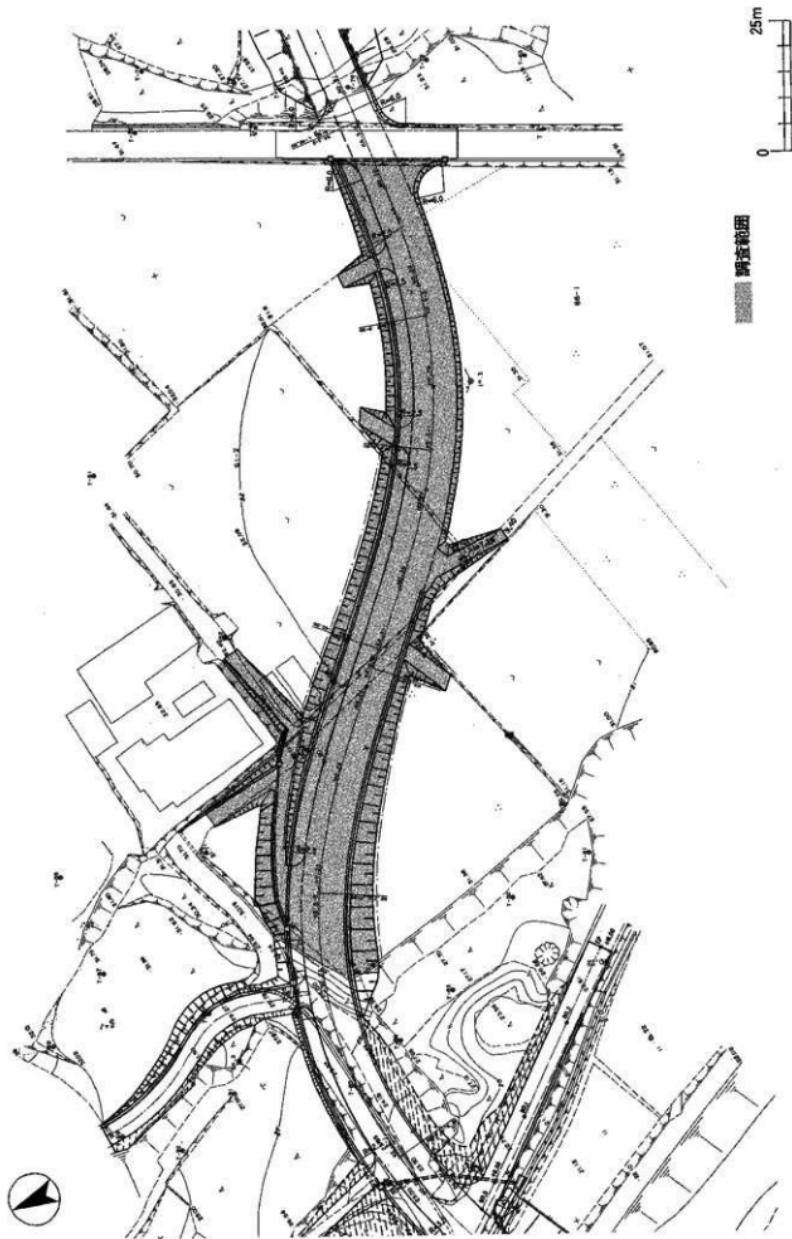


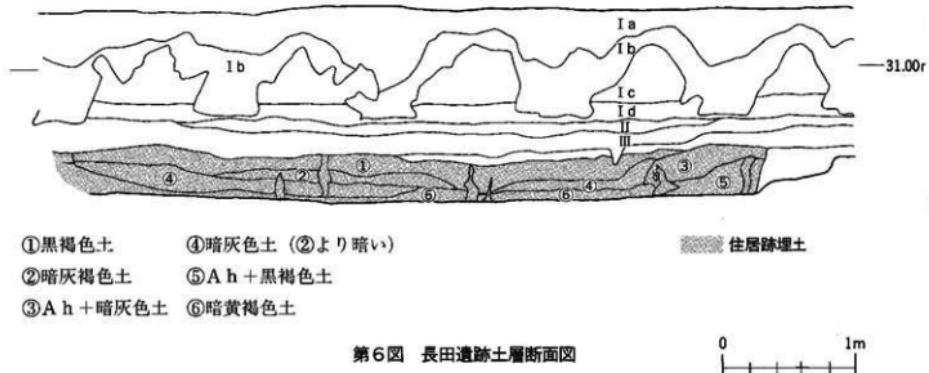
第3図 確認調査トレンチ位置図

第4図 長田遺跡グリッド配置図



第5図 長田道路付近工事計画図及び発掘調査区域図





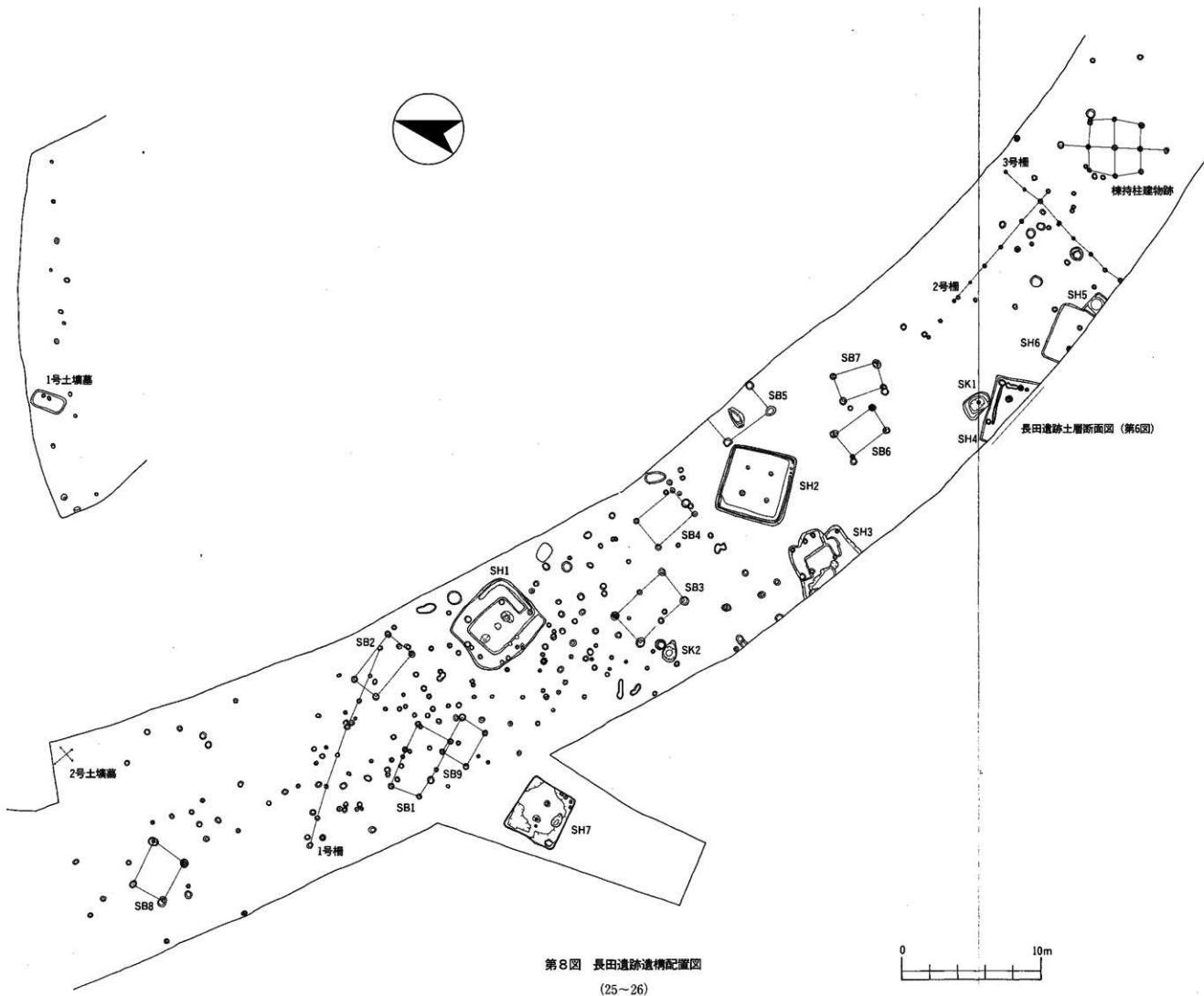
第3節 層序

標準土層は下記のとおりである。

I a	
I b	
I c	
I d	
II	
III	
IV	
V	
VI	
VII	

層	色調	説明
I a 層	暗オリーブ灰色土層	表土。現在の耕作土。
I b 層	褐灰色土層	深耕による擾乱層。
I c 層	暗緑灰色土層	旧耕作土。桜島噴出物と思われる白灰色の軽石(軽石径 2 ~ 5 mm)が層全体に含む。
I d 層	暗青灰色土層	旧耕作土。I c 層よりも若干締まっており、層中に桜島噴出物と思われる白灰色の軽石(軽石径 5 mm程度)をわずかに含む。
II 層	黒色土層	真黒の腐食土で、ふかふかした軟質土層である。古代・中世に相当すると思われる遺物包含層。
III 層	黒褐色土層	黄白色パミス粒(パミス粒直径 2 mm程度)が層全体に浮遊する。ふかふかした軟質土層である。古墳時代の遺物包含層に相当すると思われる遺物包含層。
IV 層	黒色土層	やや硬質で光沢をもつ黒色土層。下層においては若干の渦りが見られる。弥生時代の相当すると思われる遺物包含層。
V 層	暗赤灰色土層	5,500年前の池田カルデラ噴出物(池田降下軽石)と思われる黄白色の軽石(軽石直径 3 ~ 10mm)を層上面に含む。
VI 層	明黄褐色火山灰層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出したオレンジ色のアカホヤ火山灰層である。
VII 層	灰白色砂質層	シラス状にサラサラした層。粘性は殆ど見られない。遺跡の西を流れる田原川から流れ込んだシラスの水成堆積層と思われる。

第7図 土層柱状図

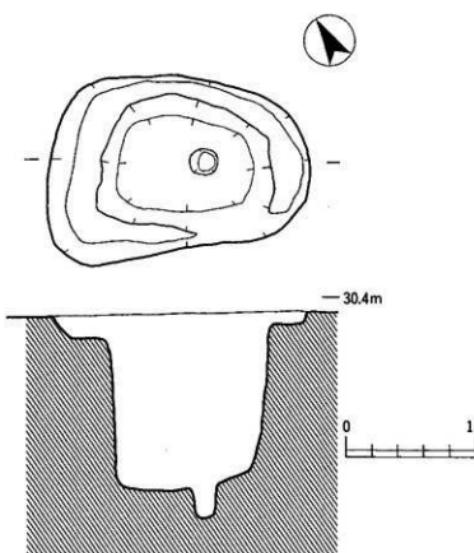


第8図 長田遺跡遺構配置図
 (25~26)

第2表 住居跡他遺構 計測表

探査番号	遺構名	検出区	検出面	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	共伴遺物	備考
9図	1号土坑	D13区	V層上面	縄文時代 前期～後期	2.06	1.33	1.62		陥し穴状遺構 中心部に小ピット
10図	2号土坑	E11区	V層上面	弥生時代	1.02	1.52	0.96		貯藏穴状遺構
13図	1号 竪穴住居跡	D9・10区	V層上面	弥生時代	5.14	5.72	0.31	山ノ口式土器 砾石	隅丸方形プラン ベッド状遺構有 床面中央に炉跡
32図	2号 竪穴住居跡	D11・12区	IV層上面	古墳時代	5.07	4.90	0.55	成川式土器 床面中央に一辺 50cmに方形に出 土した炭化材	隅丸方形プラン竪 穴床面を巡る壁立 溝 床面中央に炉跡
17図	3号 竪穴住居跡	D E12区	V層上面	弥生時代	3.7	4.66	0.30	山ノ口式土器	ベッド状遺構有
38図	4号 竪穴住居跡	D13・14区	V層上面	古墳時代	2.86	4.76	0.28	成川式土器 ミニチュア土器	
20図	5号 竪穴住居跡	C D14区	V層上面	弥生時代	1.08	1.68	0.22		
20図	6号 竪穴住居跡	C D14区	V層上面	古墳時代	2.2	3.6	0.33	成川式土器	
23図	7号 竪穴住居跡	E 9区	V層上面	弥生時代	3.72	3.94	0.10	成川式土器	
図版13	1号溝跡	A B16区	V層上面	古墳時代	15.05	0.50	0.24	成川式土器	北東から南西に 向ってレベルが下 る
39図	1号土壤墓	F 1区	V層上面	中世	2.6	1.3	0.1	白磁碗	
40図	2号土壤墓	D 6区	II層中	中世	—	(0.5)	—	白磁碗 土鍋	

第IV章 発掘調査の成果



第9図 1号土坑実測図（陥し穴状遺構）

第1節 縄文時代

1. 土坑

(1) 1号土坑

D134mのV層上面で遺構検出を行った際、長径206cm短径133cmの楕円形のプランを検出した。検出面でのプラン内部の埋土の色は、他のプランに比べ茶褐色が混ざるものであり、池田降下軽石も含まれていた。長径部に水糸を張り埋土層を半裁したところ、最も深いところで137cmあり、その断面を観察すると埋土層中に遺物はなかったが、下層に行くに従い池田降下軽石を含む暗黒褐色の層になっていた。残りの半裁部分を掘り下げ底を精査したところ、底部のほぼ中央に直径20cmの円形プランが見つかり、掘り下げたところ深さ26cmの柱穴状の掘り込みであった。この結果からこの土坑は陥穴状遺構であると思われる。

第2節 弥生時代

1. 土坑

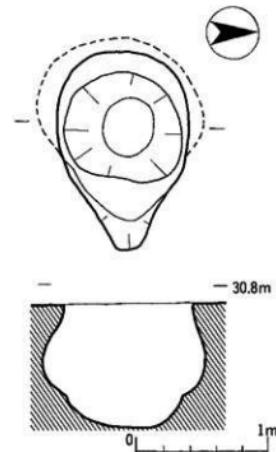
(1) 2号土坑

E114mのV層上面で遺構検出を行った際、長径部の一部が突出した楕円状のプランを検出した。長径部152cm短径部102cmであり、検出面でのプラン内部の埋土の色は、光沢のある黒色土である。長径部に水糸を張り埋土層を半裁したところ、遺構西側が最も深く検出面から底まで96cmであった。残りの半裁部分を掘り下げたところ、最も深い遺構西側を中心にして土坑の断面は袋状を呈していることがわかった。この結果からこの袋状土坑は貯蔵穴の可能性が考えられる。

2. 捩立柱建物跡

長田遺跡における弥生時代柱穴内埋土の特徴は光沢のある黒色土であり、その特徴をもとに柱穴の判別を行った。

(1) 5号擗立柱建物跡



第10図 2号土坑実測図（貯蔵穴状遺構）

C12区のV層上面で遺構検出を行った際、P 1～P 3のピットが検出され、全体のプランは北側が調査対象区域外に延びているため確認はできなかったが、1間×1間の長方形を呈す形で配列するものと考えられる。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたのを考えられる。

この長方形プランの中心に長径156cm、短径86cmの楕円形プランが検出され、埋土は3基のピットと同様に光沢のある黒色土であった。この楕円形プランを掘り下げる結果、最も深いところで cm であり、埋土中からは遺物は見られなかった。この楕円形の土坑の性格ははっきりしないが、5号掘立柱建物跡の付属遺構の可能性がある。

第3表 5号掘立柱建物跡 計測表

探査番号	11区	検出区	C 12 区		検出面	V層上面		時 期		弥 生 時 代		
			梁間1間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行1間	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
P 1-P 2	243	243	P 2-P 3	388	388	P 1	68	58	52	円形	N30°E	(9.306)
P 3-(P 4)	(240)	(240)	(P 4)-P 1	(382)	(382)	P 2	62	72	58	楕円形		
						P 3	44	55	47	隅丸方形		
						(P 4)	—	—	—	—		
平 均	(241.5)	(241.5)	平 均	(385)	(385)		58	61.6	52.3			

注) P 4は推定位置によるため、()で表示されている数値については推定数値である。

(2) 7号掘立柱建物跡

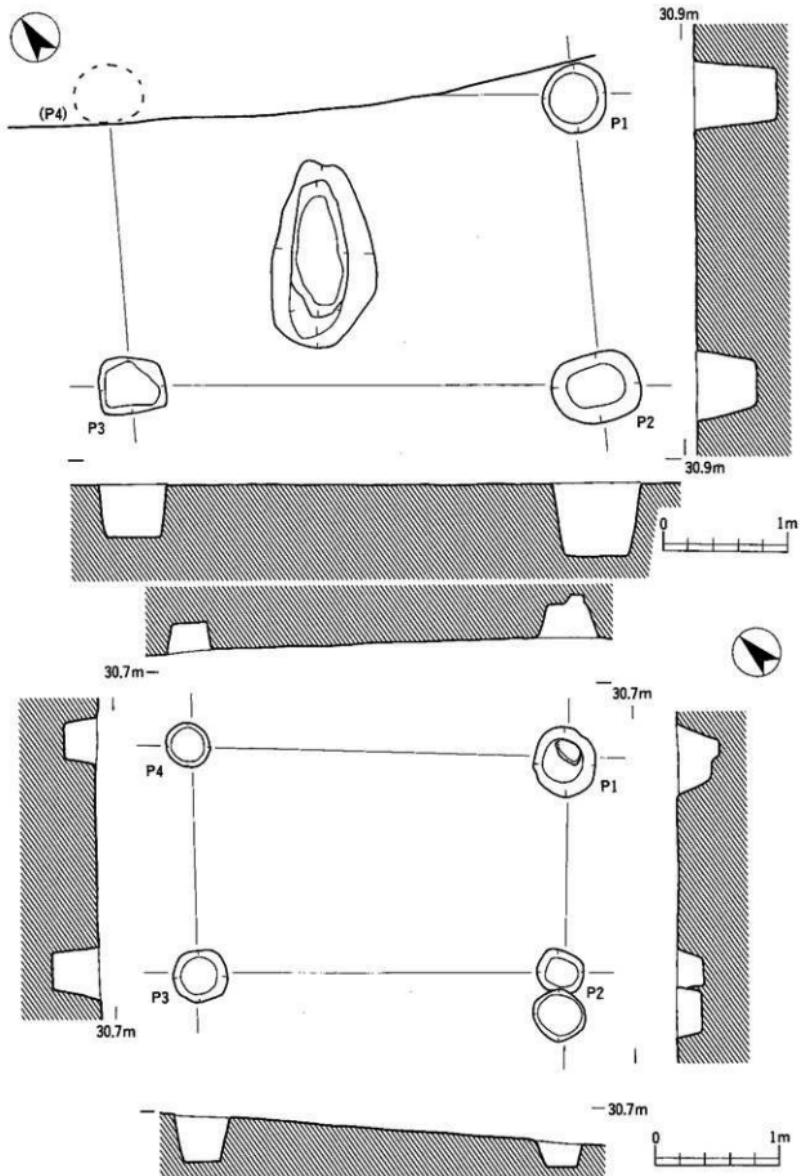
C11・12区のV層上面で遺構検出を行った際、P 1～P 4のピットが1間×1間の長方形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたのを考えられる。

P 2は2つのピットが切り合う形で検出され、埋土の色もそれぞれが光沢のある黒色土であることから、7号掘立柱建物跡は1度建て替えをした可能性が考えられる。

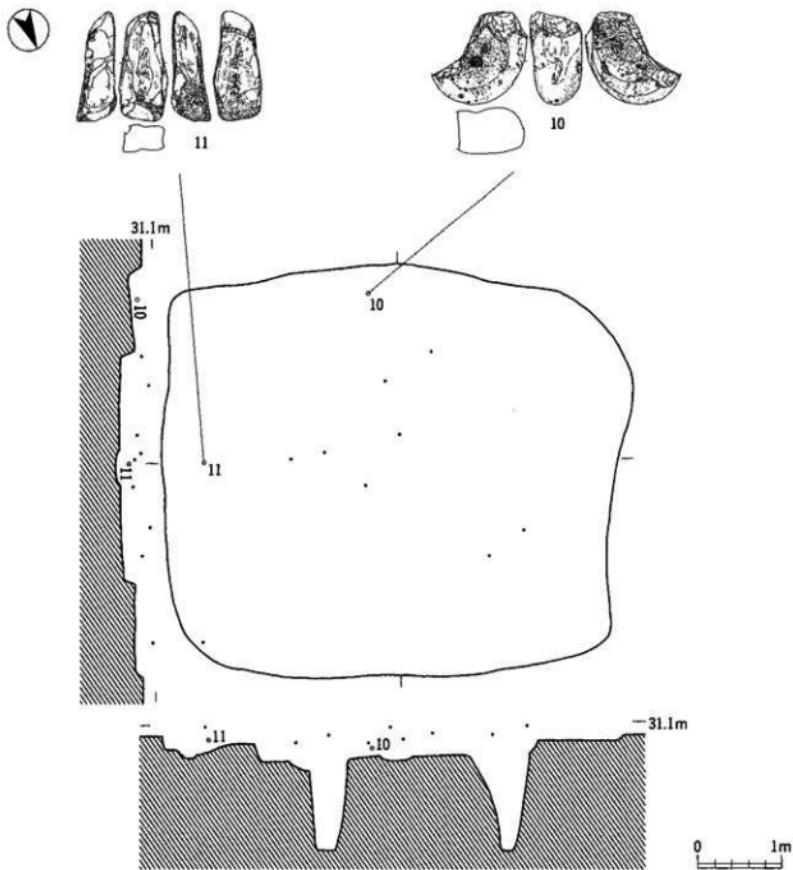
第4表 7号掘立柱建物跡 計測表

探査番号	11区	検出区	C11・C12区		検出面	V層上面		時 期		弥 生 時 代		
			梁間1間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行1間	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱 穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
P 1-P 2	180	180	P 2-P 3	303	303	P 1	36	58	50	楕円形	N43°E	5.74
P 3-P 4	190	190	P 4-P 1	310	310	P 2	22	39	34	楕円形		
						P 3	39	44	44	円形		
						P 4	38	37	36	円形		
平 均	185	185	平 均	306.5	306.5		33.8	44.5	41			

注) P 2は切られたピットを計測したものである。



第11図 5号・7号掘立柱建物跡実測図（上図5号・下図7号）



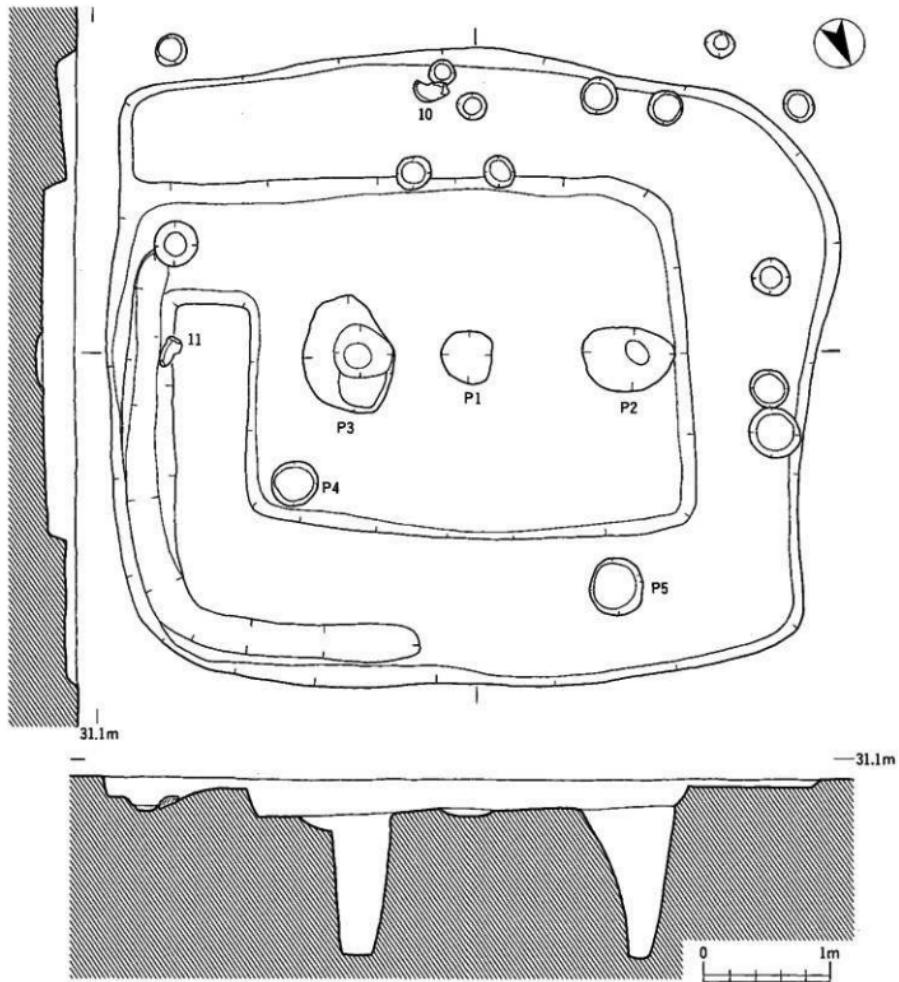
第12図 1号竪穴住居跡遺物出土状況図

3. 竪穴住居跡

(1) 1号竪穴住居跡

V層上面で遺構検出を行い、隅丸方形プランの竪穴部が確認された。埋土の状況は検出面から観察すると、中心部に床部分の黒色の埋土層部分（④埋土層と呼称）と、その周辺にベッド状遺構部分の下層（アカホヤ層）の影響を受けたと思われる黒色の埋土層（⑤埋土層と呼称）に分かれて検出された。またプラン内部に別時代の柱穴痕と思われるビットが10基確認できた。

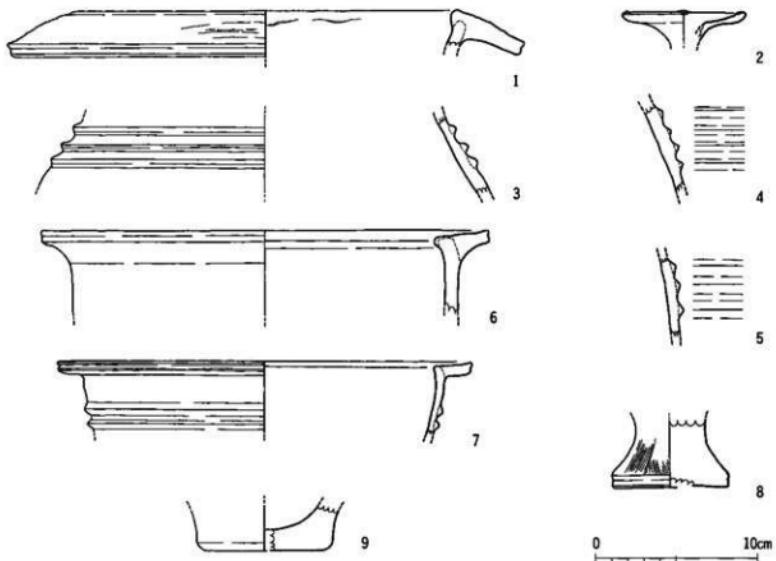
隅丸方形プランを四つ切りし、最初に北東側ブロックと南西側ブロックの④埋土層の掘り下げを行った。埋土層内に数点の遺物が出土し、床面と思われる部分はVII層であり硬化が見られた。掘り下げた埋土層断面の観察、写真撮影を行い、次に残りの北西側ブロックと南東側ブロックの④埋土層の掘り下げを行った結果、埋土層内に数点の遺物が出土した。



第13図 1号竪穴住居跡発掘状況図

次に北東側ブロックと南西側ブロックの⑩埋土層の掘り下げを行い、その結果⑨埋土層を廻る⑪埋土層部分はベッド状造構であることがわかった。また北東側のベッド状造構部分には竪穴壁に近い床面の一部をL字状に、幅30cm程度、深さ5cmほどの溝が長さ400cmほどに渡り検出され、北東側⑩埋土層東側のベッド状造構から床着の遺物（遺物No.11）が出土した。

次に残りの北西側と南東側の⑩埋土層の掘り下げを同様に行い、ベッド状造構が確認でき南東側のベッド状造構南側から床着の遺物（遺物No.10）が出土した。



第14図 1号竪穴住居跡出土遺物-1 (1/3)

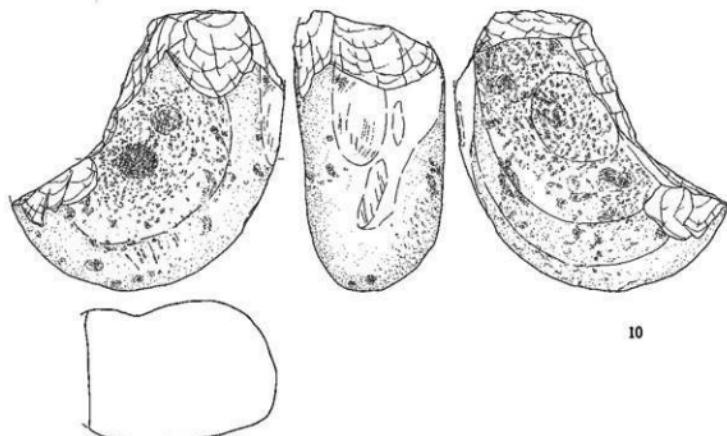
床面までの掘り下げが完了し精査を行ったところ、⑤埋土層部分中央に、直径40cmのP 1、そのP 1を挟むように、東側に長径94cm短径72cmのP 2、西側に長径74cm短径52cmのP 3が東西軸上に並んで検出され、他にも床面に2基の柱穴痕と思われるビット（P 4・P 5）が確認された。またベッド状遺構面の南側に長径158cm短径85cmの楕円形プランが検出された。この楕円形プランはV層上面での検出ではそのプランは見つかっておらず、その楕円形プランの埋土層が⑥埋土層と様子が違うことから、竪穴住居跡の付属遺構ではなく、時期的にさかのばる土坑であると考えられる。

それぞれの遺構の掘り下げを行った結果、P 1は深さ5cmの浅くほんだ土坑であり、その両側のP 2・P 3は、東側は床面から深さ110cm、西側は床面から120cmの深さの主柱跡と考えられる。P 4・P 5からは遺物は見当たらず、P 4は深さ13.5cm、P 5は深さ27.5cmのそれぞれが柱穴と考えられる。

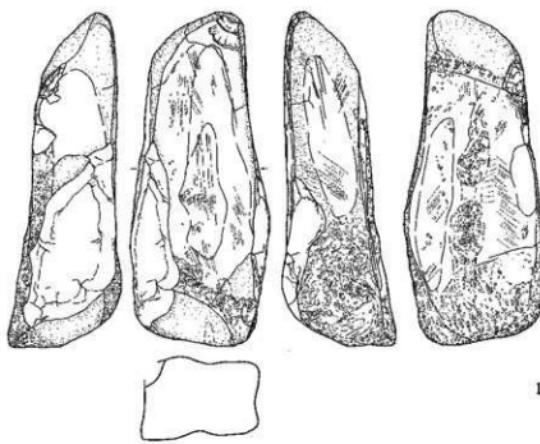
ベッド状遺構面の南側楕円形プランのビットは埋土内に遺物ではなく、その他特徴的な掘り込み等は確認できなかったため、遺構の性格ははっきりしなかった。

この結果から、竪穴住居の構造を推測すると、東西軸上に並ぶP 2とP 3が1号竪穴住居の主柱であり、その中心にあるP 1は、焼土部分は確認できなかったものの炉跡の可能性がある。

また竪穴住居内から遺物は出土したが、床着の遺物は2点のみで、他の遺物は埋土内から出土していることから、何らかの理由で退去したあとに自然に埋まっていったことが推測される。



10



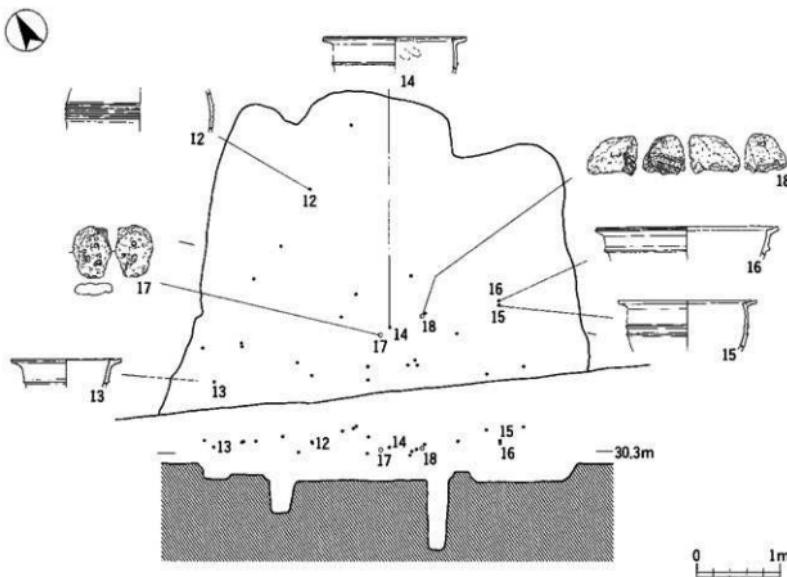
11



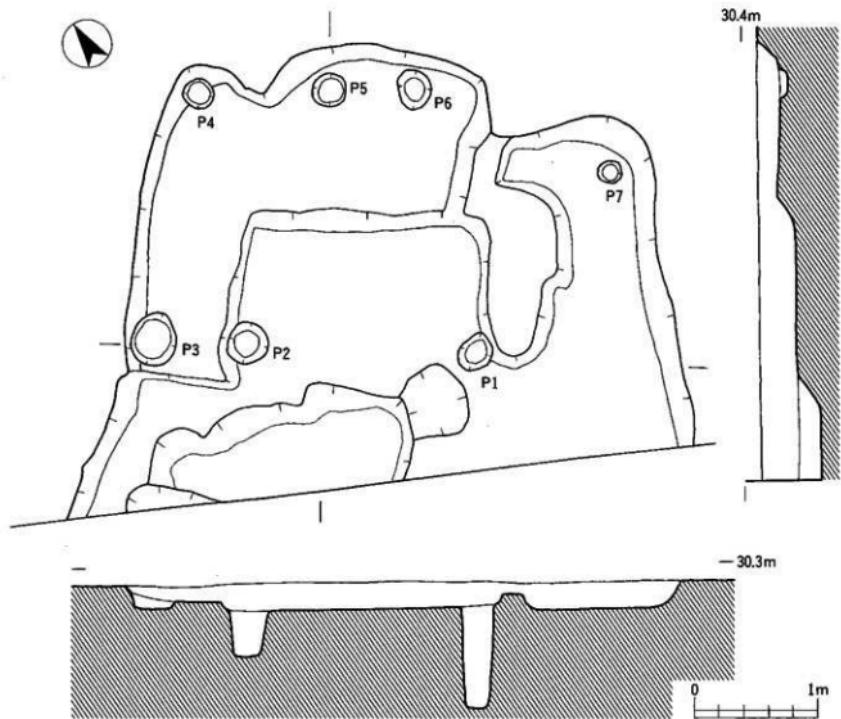
第15図 1号竪穴住居跡出土遺物-2 (1/4)

出土遺物

1～5は弥生時代中期の山ノ口式の壺形土器である。1の口縁部はいわゆる「へ」の字状を呈し、斜め下方を向く。内面には、粘土接合痕が一部見られる。2は西瀬戸内系の小型壺形土器で、口縁端部に一ヶ所が貼付け円盤を貼りつけている。3は肩部の突帯部である。突帯は三角突帯で3条有する。4は肩部の突帯部である。突帯は三角突帯で、(残存)4条有する。5は胴部の突帯部である。突帯は三角突帯で、3条が残る。6～9は弥生時代中期の山ノ口式の甕形土器である。6は口縁部内面が張り出し明瞭な棱をもち、口縁端部は凹線状に窪む。また、内外面に一部黒斑がある。7の口縁部形態は、6と同様だが内面はあまり張り出さない。厚みは比較的薄い。胴部上位に三角突帯を2条(残存)有する。8は中実の脚台状を呈し、やや上げ底である。9は平底の底部である。10は大型の水磨円礫を素材とする凹石である。図正面中央には2箇所の大きな窪みが見られる。裏面側は中央部にかけて緩やかに窪んでおり、打痕が観察される。部分的に変色していることから火熱により破損したものと思われるが、破断面からの剥離も認められ、再加工を意図している可能性が考えられる。石材は細粒砂岩と思われる。11は細粒砂岩製の砥石である。火熱を受けているため変色(赤変・黒変)しており、クラックおよび熱による破断(ハジケ)が見られる。砥石としての作業面は正面・裏面・右側面・左側面の4面に見られ、正面中央には幅広溝状の窪みが、裏面中央には長楕円形の窪みが縦位に連続して残されている。



第16図 3号竪穴住居跡出土遺物出土状況図



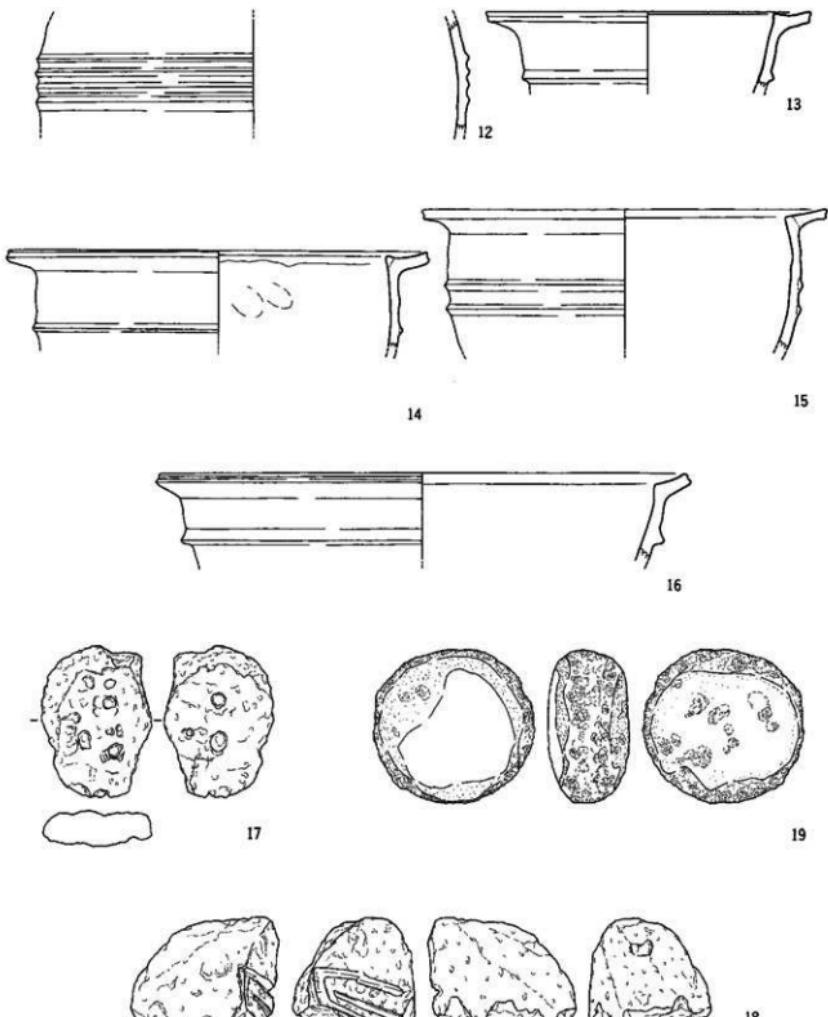
第17図 第3号竪穴住居跡完掘状況図

(2) 3号竪穴住居跡

遺物が集中したE12区を中心に、遺物を取り上げた後V層上面で遺構検出を行い、全体のプランは南側が調査対象区域外に延びているため確認はできなかったが、プランは北側が凸状に突出した変形の方形プランがうかがえ、プラン内部には別時代と思われる遺構の切りあいは見られなかった。埋土の状況は検出面から観察すると、1号竪穴住居跡と同様に床面部と思われる黒色の埋土層部分と、その周辺にベッド状遺構部分の下層(アカホヤ層)の影響を受けたと思われる黒色の埋土層(⑧埋土層と呼称)に分かれて検出された。

南北に水糸を張り東側埋土層から掘り下げ、東側埋土層部分北側から中央部に向ってベッド状遺構と見られる部分が見られた。遺物は埋土層内から出土はなく、床面はVI層まで掘り込んであり、若干の硬化が見られた。

次に残りの西側の埋土層を掘り下げ、東側埋土層部分から続くベッド状遺構が西側に向って延びているのが確認できた。遺物は埋土層内から出土はなかった。また床面には、端部が調査対象区域



0 10cm

第18図 3号竖穴住居跡出土遺物 (1/3)

外に延びる梢円形プランがあり、土層断面を観察したところ竪穴住居の掘り込み面からの土層の切り合いは見られず、このプランは竪穴住居の付属遺構、若しくはそれ以前の遺構であることが推測できる。しかし掘り下げをした結果遺物の出土等なく、遺構の性格は特定できなかった。

その他、P 1は床面からの深さが82.5cm、P 2が床面からの深さが34.5cmと深く主柱穴であり、P 3は床面からの深さが14cm、P 4が床面からの深さが5cm、P 5が床面からの深さが4.5cm、P 6が床面からの深さが8cm、P 7が床面からの深さが7cmと浅いことから、P 3～P 7がまわりの柱穴と考えられる。

なお、検出面から床面まで出土が見られず、床着の遺物もなかったことから、第16図のように掘り込み面よりも高いところで遺物の分布が見られこれが最終床面の可能性がある。掘り込み面も検出面より高かったと考えられる。1号竪穴住居跡と同様、何らかの理由で退去したあとに自然に埋まり、その過程で遺物が埋土内に入ったものと推測される。

出土遺物

12は弥生時代中期の壺形土器で、三角突帯を4条有する胸部である。13～16は弥生時代中期の山ノ口式土器の壺形土器である。13は口縁端部が凹線状に窪み、口縁上面は真ん中が窪んで湾曲している。厚みは比較的薄い。胸部上位に三角突帯が1条残存する（実際は多条と思われる）。14は口縁部内面が張り出し明瞭な稜をもち、口縁端部が凹線状に窪み、口縁上面は真ん中が窪んで湾曲している。胸部上位に三角突帯が1条残存する。15の口縁部の形態は、14と同様であるが、口縁上面はくぼまない。胸部に三角突帯を2条有する。16はやや大型の壺形土器と考えられ、口縁端部が凹線状に窪み、厚みは比較的厚い。胸部に三角突帯を1条有する。

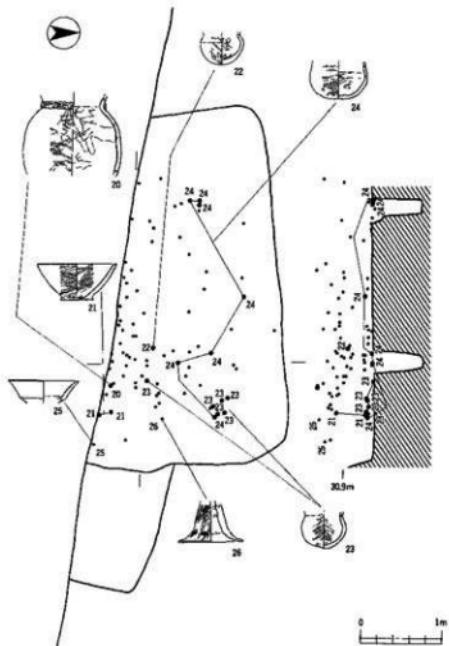
17はきわめて多孔質の軽石製品である。図正面に4箇所、裏面に3箇所の人の形と思われる穿孔（盲孔＝非貫通孔）が見られる。18は本来の素材形状は円碟状とおもわれるが、4分割した後、断面の一つ（図正面）に直線的な溝を彫りこんでいる。また図正面の上位および左側面、裏面の下端は淡赤色を呈することから、火熱を受けているものと思われる。19は本来は水磨碟と思われる円碟を素材とする叩石である。平面概形は正円形に近い。全面に使用によるダメージ（打痕）が認められる。また磨石としても使用されており、図正面側にのみ擦痕が観察される。

（3）5号・6号竪穴住居跡

遺物が集中したD14区を中心に、遺物を取り上げた後、V層上面で遺構検出を行い、全体のプランは南側が調査対象区域外に延びているため確認はできなかった。当初同一の住居跡として掘り下げ、上位で弥生時代の遺物が、下位より古墳時代の遺物が出土した。壁面の土層観察の結果（図版11）2つの住居が切りあう形になっていることが確認できた。切られている方を5号竪穴住居跡、切っているほうを6号竪穴住居跡とした。

古墳時代の6号竪穴住居跡が深く掘り込んである。床面は5号・6号竪穴住居跡はいずれもVI層まで掘り込んでおり多少硬化しているが、6号竪穴住居跡にはアカホヤと黒色土が混ざった張り床が施されていた。

5号竪穴住居跡の残っている床面からは直径110cm程の円形のプランが検出され、掘り下げした結果深さ91cmの土坑状の遺構であった。V層上面での検出面からはそのプランが確認できなったこと



第19図 5号・6号竪穴住居跡遺物出土状況図

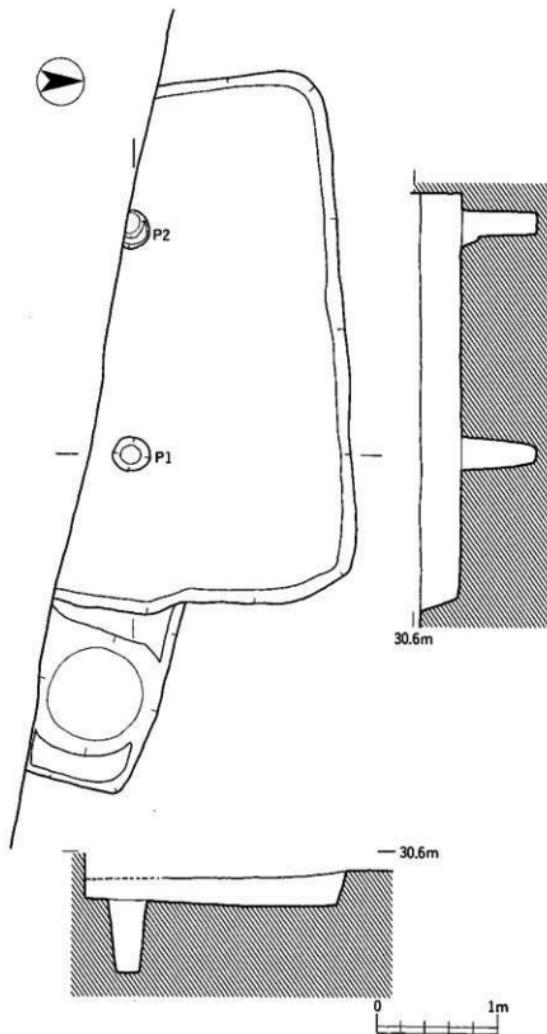
から、この土坑は竪穴住居の付属遺構、若しくはそれ以前の遺構であることが推測できる。

6号竪穴住居跡の床面からは、調査対象区域外に近い土層の断面の近くにP1とP2が6号竪穴住居跡プランの一辺と平行に並ぶ状態で検出された。掘り下げた結果、P1とP2は柱穴と思われ、床面からの深さはいずれも62cmであり、主柱片と考えられる。

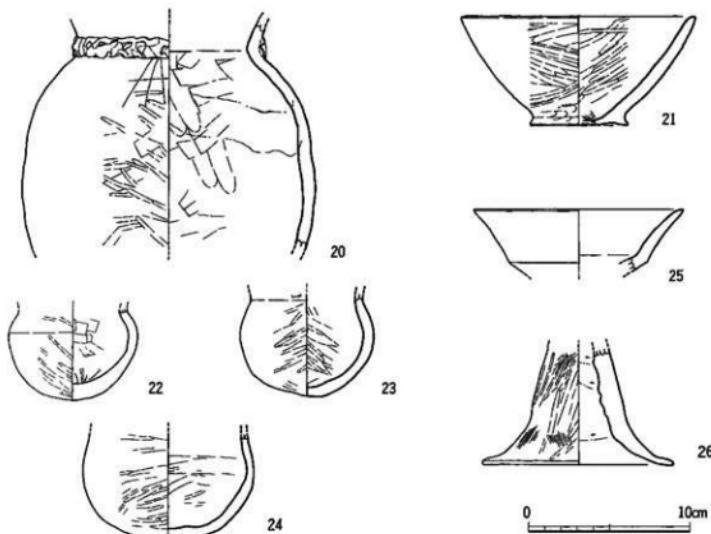
出土遺物

6号住居跡の遺物は古墳時代の成川式土器である。20は壺形土器で、頸部に刻目突帯を一条有し、胴部はあまり張らない。刻目は不均一に施されているが、布目が観察できる。調整は、頸部は内外面ともヨコナデ、胴部内面は工具ナデ、胴部外面は工具ナデの後ヘラミガキが施される。また、肩部外面に沈線のヘラ記号がみられる。内面には、粘土接合痕がみられる。21は鉢形土器で、杯部は直線的に開き、底部は低い脚台をもつ。22は培形土器で、球洞状の胴部で、やや肩が張り、丸底である。調整は、内面は工具ナ

デで、外面は、ナデの後ヘラミガキである。23も培形土器で、球洞状の胴部で、丸底である。調整は、内外面ともにヘラミガキである。24も培形土器で、球洞状の胴部と考えられるが、頸部はあまりしまらない。調整は、胴部内面は工具ナデで、底部内面は指頭痕、外面はヘラミガキを施す。25は高杯形土器で、口縁部は外反ぎみに開き、碗部は浅く、比較的小型のものと思われる。26は高杯形土器で、スカート状に湾曲して開く脚部である。調整は、脚部内面上位がケズリ、下位がナデ、外面がハケ目（原体幅0.6cm前後）の後ヘラミガキが施されている。



第20図 5号・6号豊穴住居跡完掘状況図



第21図 6号竖穴住居跡出土遺物 (1/3)

(4) 7号竖穴住居跡

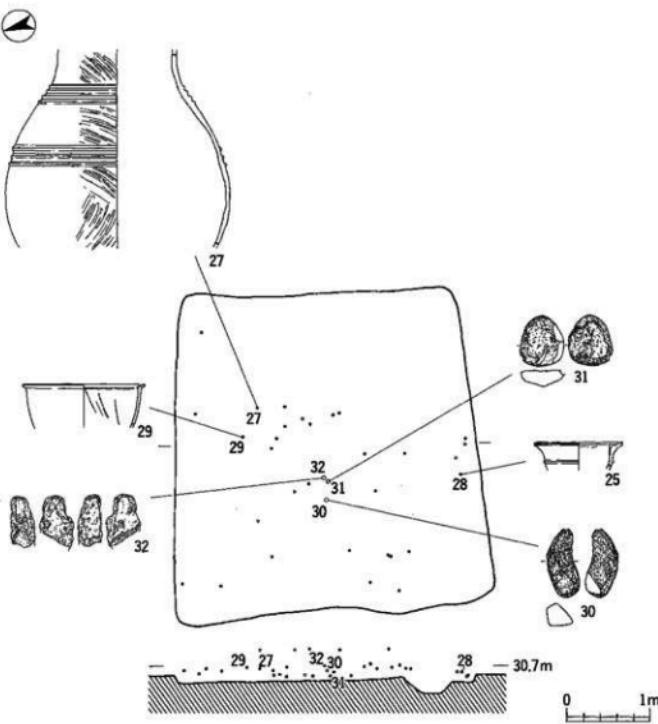
E 9～10・F 9～10区は取り付け道路部分であり、当初矩面部分を残す形で掘り下げを行ったところ、竪穴住居跡と思われるプランと遺物が見られたことにより、矩面部分を掘り下げし、V層上面で遺構検出を行い、隅丸方形プランが確認された。検出面からはプラン内部には別時代と思われる遺構の切り合は見られなかった。

隅丸方形プランを四つ切りし、ベルトを残した状態で全体的な掘り下げを行った。床面はV層中までの掘り込みがあり、埋土層中から遺物が出土した。床面は一部硬化している面が見られた。ベルトを除去した後、床面の精査をしたところプランの東西軸にP 1とP 2のピットが配列し、この南側に長径105cm短径60cmの楕円形のプランが検出でき、さらに南東隅に10cm前後の円形プランがそれぞれ検出された。また、床面から掘り込みラインに向ってベッド状遺構と思われる緩やかな立ち上がりが確認できた。

検出したそれぞれの遺構を掘り下げた結果、東西軸に配列されたP 1とP 2は底部に向って先細りの柱穴と思われる遺構であり、P 3は深さ21cmの土坑状遺構であり、第23図にある土層断面図を見てもわかるように、竪穴住居の付属遺構であることがわかった。その周辺に焼土等の使用痕は見られず、この土坑状遺構の具体的な使用目的については判断出来ない。また南東隅のP 4は柱穴状の掘り込みが見られたが、床面からの掘り込みが浅い。

出土遺物

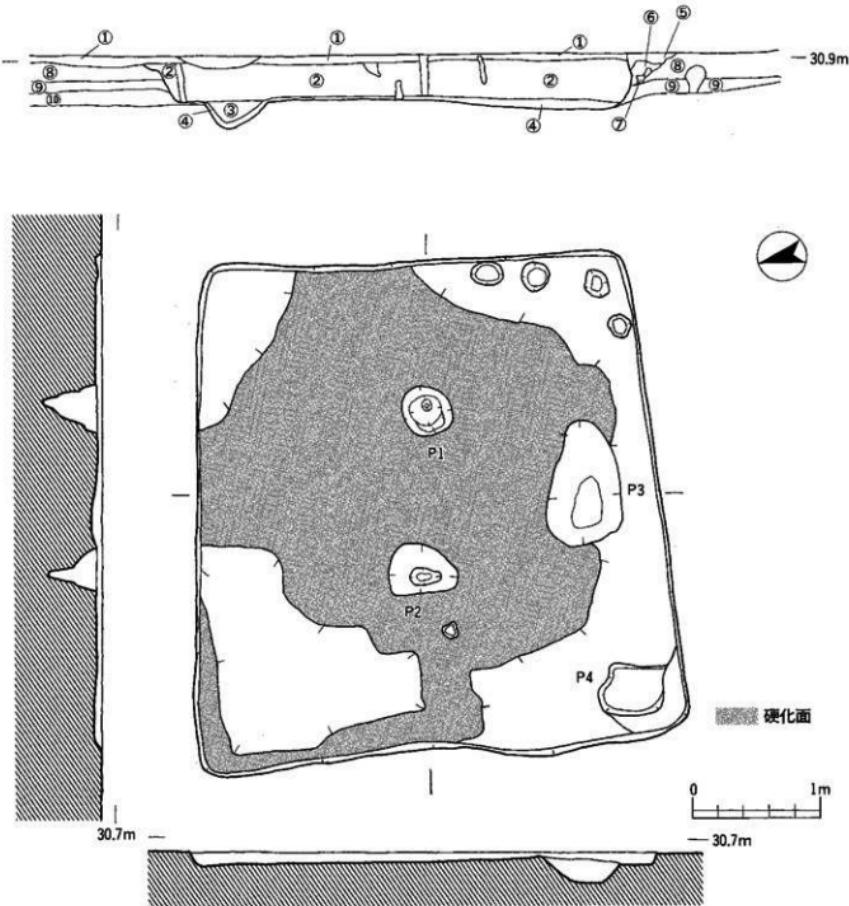
27は弥生時代中期の大型の壺形土器である。頸部から肩部の間に4条、胴部に3条の三角突帯を



第22図 7号竖穴住居跡遺物出土状況図

有する。また、外面の広範間に黒斑がある。調整は、外面はヘラミガキで、突帯部分はヨコナデである。内面は磨耗により胎土が剥離している為、調整は不明である。28、29は山ノ口式土器の変形土器である。28は口縁部端部が凹線状に窪み、上面は真ん中が窪んで湾曲する。胴部に三角突帯が一条残存する(多条と思われる)。口縁部内面の付け根には粘土接合痕が残る。29は口縁部内面が張り出して明瞭な稜をもつ。胴部の残存状況から考えて、三角突帯はもたないものと考えられる。内面にはヘラを横方向に回したと思われる工具痕が残る。また、口縁部内面の付け根には粘土接合痕が残る。

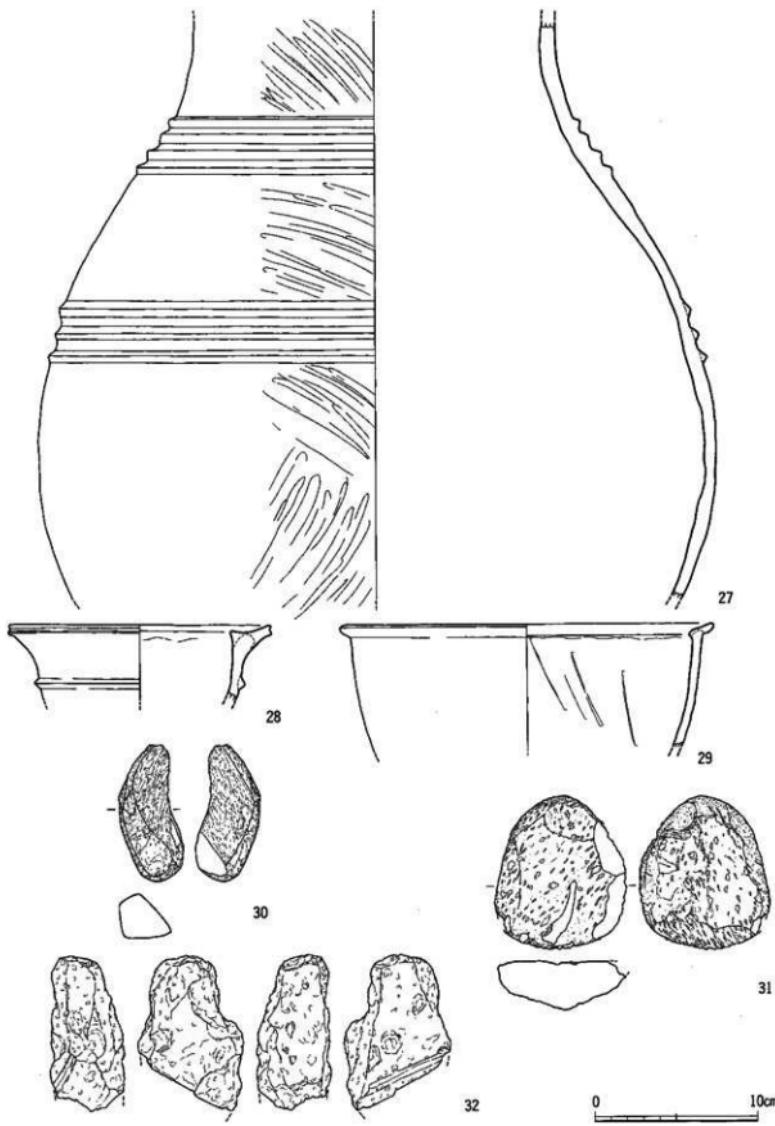
30はほぼ全面に研磨加工を施した軽石製品。研磨面の多くは湾曲度の強い曲面(凸面および凹面)で、一部を欠損しているものの、全体形状は烏帽子形に近い。31は平面概形が略三角形(おにぎり形)を呈する軽石製品。図の正面側は全面的な研磨が認められ、中央部から上部にかけてわずかに湾曲している。32は不定形の軽石製品である。下半部は欠損している。図正面の上半部は暗黒褐色に変色しており、火熱を受けているものと思われる。図裏面下端の斜めに伸びる直線状の段差は、線刻の可能性がある。



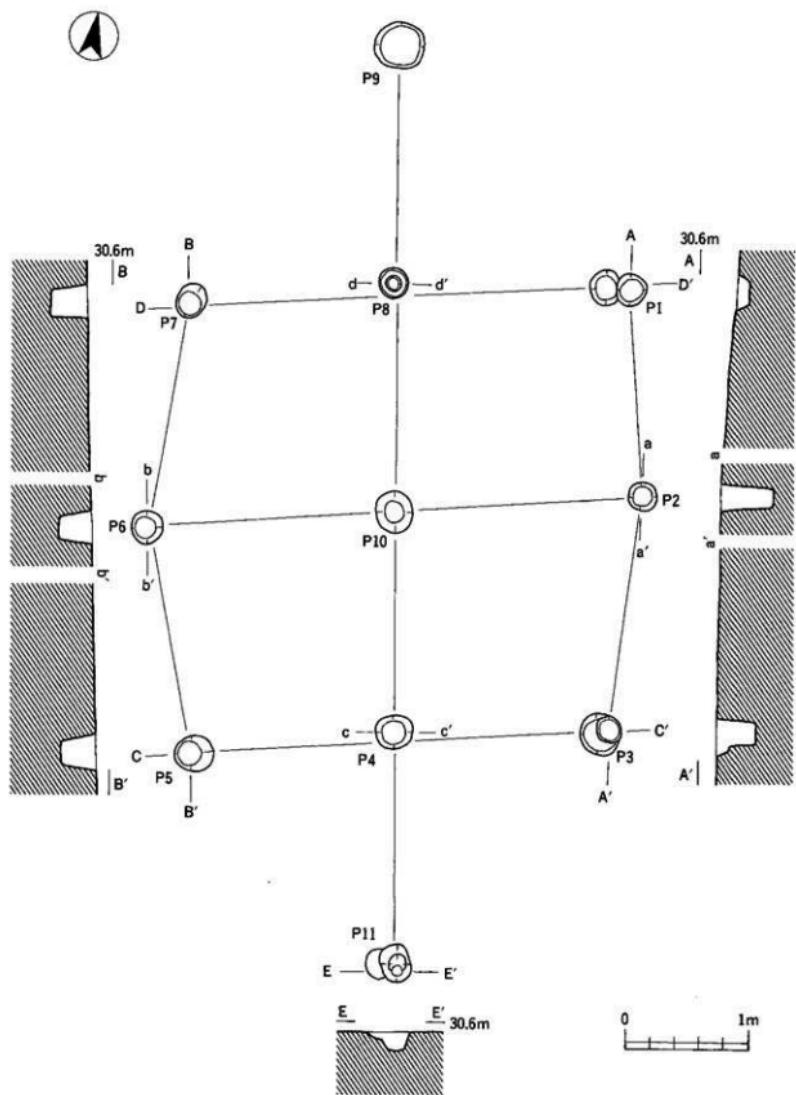
第23図 7号竪穴住居跡完掘状況図

7号竪穴住居跡西壁分層状況

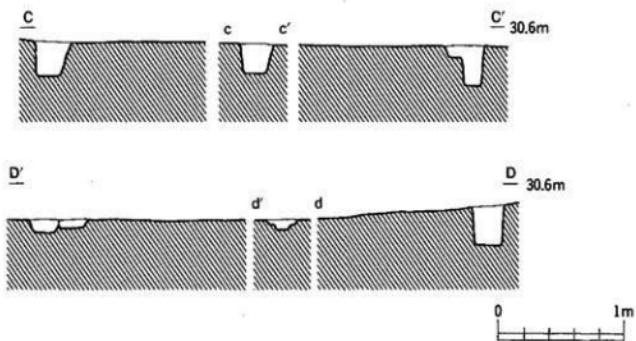
- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| ① I b 層 | ⑥ III層 + II層 |
| ② 池田バミス（少量）+ 黒色土 | ⑦ II層 + III層 + V層 |
| ③ 池田バミス（少量）+ 黒色土（②より池田バミスが多い） | ⑧ III層 |
| ④ 渦A h | ⑨ IV層 |
| ⑤ I b層 + II層 | ⑩ V層 |



第24図 7号竪穴住居跡出土遺物 (1/3)



第25図 棟持柱建物跡実測図



第26図 棟持柱建物跡柱穴断面図

4. 棟持柱建物跡

BC-15区のV層上面で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたと考えられる。2間×2間の建物規模で、主軸をN10°Eの略南北方向に配列される。棟持柱穴はP 9とP 11でありほぼ梁間間の中央の線上に位置し、P 11には柱穴痕と考えられる落ち込みが、桁行軸と平行に並ぶように確認され、建て替えの可能性が考えられる。

第5表 棟持柱建物跡 計測表

探査番号	主軸方向	梁間間 (cm)		桁行間 (cm)		棟持柱間 (cm)		床面積 (m ²)	検出区	時期
		W-2間-380	N-2間-367	E-2間-376	S-2間-348	P 9-P 11 764	14.12			
25区	N10°E								BC-15区	弥生時代
梁行2間	梁間柱間 (cm)	梁間柱間 (cm)	桁行2間	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	柱穴 プラン
P 7-P 6	188	P 7-P 5 380	P 1-P 8	194	P 1-P 7 367	P 1 P 2 P 3 P 4 P 5 P 6 P 7 P 8 P 9 P 10 P 11	10 44 32 25 30 28 30 8 14 24 16	26 24 34 32 33 28 30 24 42 36 30	22 24 34 26 30 26 22 24 32 30 25	楕円形 円形 円形 楕円形 楕円形 円形 楕円形 円形 楕円形 楕円形 楕円形
P 6-P 5	192		P 8-P 7	173		P 3 P 4 P 5 P 6 P 7 P 8 P 9 P 10 P 11	32 34 30 33 30 28 42 36 30	34 34 30 30 28 26 32 30 25		
P 1-P 2	176	P 3-P 1 376	P 3-P 4	178	P 3-P 5 348	P 5 P 6 P 7 P 8 P 9 P 10 P 11	30 33 30 28 14 24 16	30 33 30 28 42 36 30	30 30 22 24 32 30 25	
P 2-P 3	200		P 4-P 5	170						
平均	189	378	平均	178.75	357.5	平均	23.7	30.8	26.8	

注) 床面積はP 1～P 8に囲まれる部分である。

第3節 古墳時代

1. 堀立柱建物跡

長田遺跡における古墳時代柱穴内埋土の特徴は光沢のない淡黒色土であり、その特徴をもとに柱穴の判別を行った。

(1) 2号堀立柱建物跡

D8・9区のV層上面で遺構検出を行った際、P1～P4のピットが1間×1間の長方形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられる。

第6表 2号堀立柱建物跡 計測表

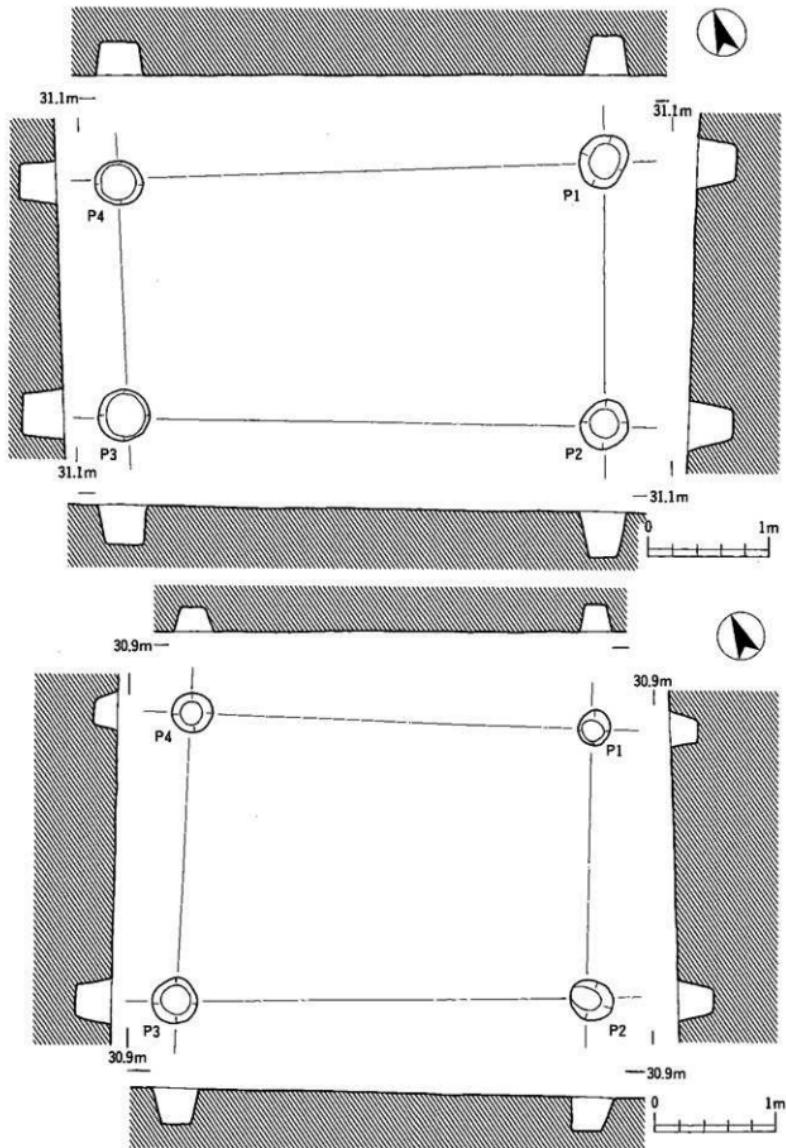
辨図番号	27区	検出区	D8・9区		検出面	V層上面		時 期		古 墓 時 代			
			梁間1間	梁間間隔(cm)		桁行1間	桁行柱間(cm)	柱穴	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	柱穴プラン	方 向
P1-P2	224	224	P2-P3	406	406	P1	34	48	38	精円形			
P3-P4	202	202	P4-P1	410	410	P2	38	44	32	精円形			
						P3	36	44	44	円形			
						P4	32	41	36	精円形	N17E	8.69	
平 均	213	213	平 均	408	408		35	44.3	37.5				

(2) 4号堀立柱建物跡

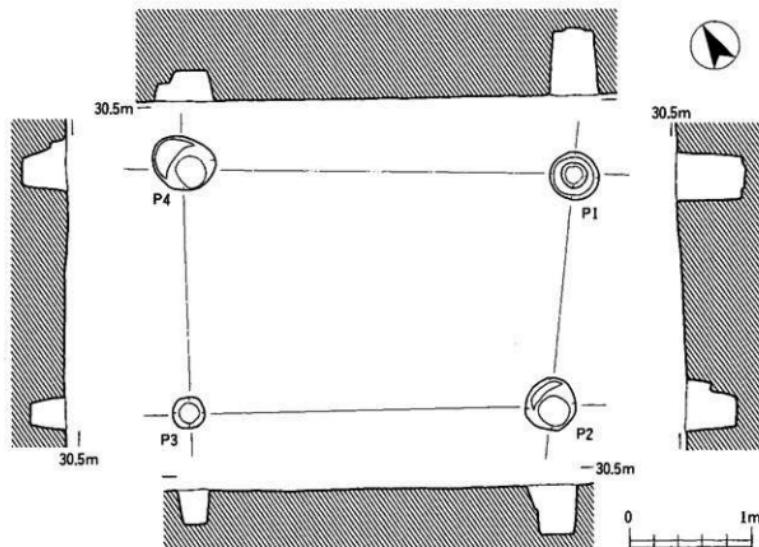
D11区のV層上面で遺構検出を行った際、P1～P4のピットが1間×1間の長方形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられる。

第7表 4号堀立柱建物跡 計測表

辨図番号	27区	検出区	D 11 区		検出面	V層上面		時 期		古 墓 時 代			
			梁間1間	梁間間隔(cm)		桁行1間	桁行柱間(cm)	柱穴	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	柱穴プラン	方 向
P1-P2	228	228	P2-P3	343	343	P1	23	30	26	精円形			
P3-P4	245	245	P4-P1	340	340	P2	30	38	35	精円形			
						P3	31	38	37	円形			
						P4	22	34	33	円形	N24'E	8.06	
平 均	236.5	236.5	平 均	341.5	341.5		26.5	35	32.8				



第27図 2号・4号掘立柱建物跡実測図（上図2号・下図4号）



第28図 6号掘立柱建物跡実測図

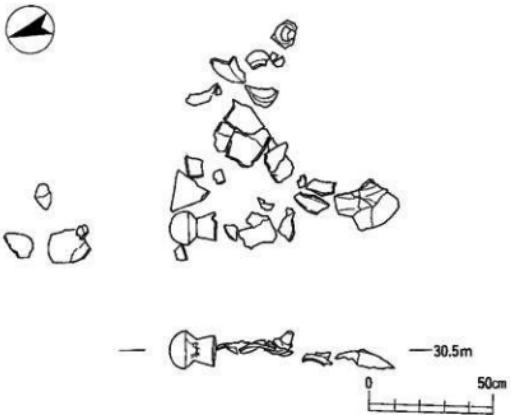
(3) 6号掘立柱建物跡

D12・13区のV層上面で遺構検出を行った際、P1～P4のピットが1間×1間の長方形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられる。

P2とP4は掘り込みの一部が欠けたような断面が確認でき、この6号堀立柱建物跡は不要になった時に撤去されたことが考えられる。

第8表 6号掘立柱建物跡 計測表

探査番号	28図	検出区	D12・13区		検出面	V層上面		時 期		古 墓 時 代			
			梁間中間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行1間	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	柱 穴 プラン
梁行1間													
P1-P2	193	193	P2-P3	314	314	P1	58	40	40	円形			
P3-P4	204	204	P4-P1	325	325	P2	42	43	42	円形	N27°E	6.32	円形
P3						P3	30	27	26	円形			
P4						P4	36	54	45	橢円形			
平 均	198.5	198.5	平 均	319.5	319.5		41.5	41	38.3				



第29図 2号竖穴住居跡埋土内遺物出土状況実測図

2. 竖穴住居跡

(1) 2号竖穴住居跡

V層上面で遺構検出を行い、隅丸方形プランが確認された。検出面からはプラン内部には別時代と思われる遺構の切り合は見られなかった。

隅丸方形プランを四つ切りし、最初に北西側ブロックと南東側ブロックの埋土層の掘り下げを行った。埋土層中からはかなり多量の遺物が出土したが、北西側ブロックの中央からは、ほぼ完形の成川式の埴土器(遺物No.47)等大型の遺物が多数出土した。隨時遺物の取り上げ

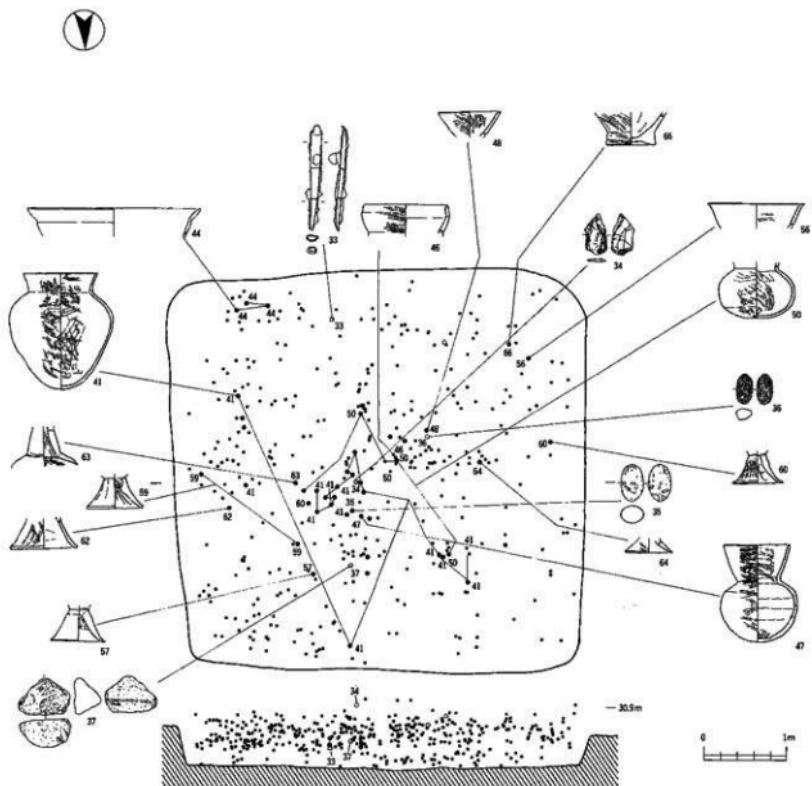
を行ったところ、検出面から30cm前後のあたりで、北西側ブロック南東側を中心炭化物が出土するようになった。

次に北東側ブロックと南西側ブロックの埋土層の掘り下げを行った。北西側ブロック・南東側ブロックと同様埋土中より多量の遺物が出土したため、隨時遺物の取り上げを行い、北西側ブロックでも見られた炭化物が検出面から30cm前後のあたりで見られるようになった。

なお遺物は埋土層上層で多く出土し、床面に近づくに従い少くなり、床着の遺物は南東側ブロックの中央付近の床面より鉄器(遺物No.33)が出土した他は成川式土器片が少数出土した。

床面は検出面から最大55cmで、VII層まで掘り込んで、若干の硬化が見られた。ベルトを除去したところ、床面に近いところの隅丸方形プランほぼ中央付近に炭化材が出土した。径5cm程度の小型の炭化材は床面に散在しているが、径10cm程度の大型の炭化材は、隅丸方形プランのはば中央に一辺50cmの方形をなし、また径5cm程度であるが棒状に残存する炭化材がそこから放射状に延びている。検出された状況から、一辺50cmの方形の炭化材は竖穴式住居の上屋部分を支える棟木の頭頂部であり、放射状に延びている棒状の炭化材は屋根を支える棟木の一部であることが考えられる。炭化材は完全に炭化した状態ではあったが、触れるなどの行為により簡単に崩れるような炭化ではなく、一部が材木としての形状がうかがえるものもあること、また床着の遺物が少ないことから、この住居の焼失原因が自然災害等に起因する火事ではなく、住居が不要となった等の理由により人為的に火をつけた可能性がある。

次に炭化材を取り上げず、そのまま床面を精査したところ、P1からP4の柱穴と考えられる遺構と、また縦穴掘込面に近い床面に、壁面を沿うような状態で幅10cmの溝が廻っていた。一部南側の隅に溝が途切れている部分もあり、途切れた溝の線上に直径10cm程度の小ビットが3基検出された。

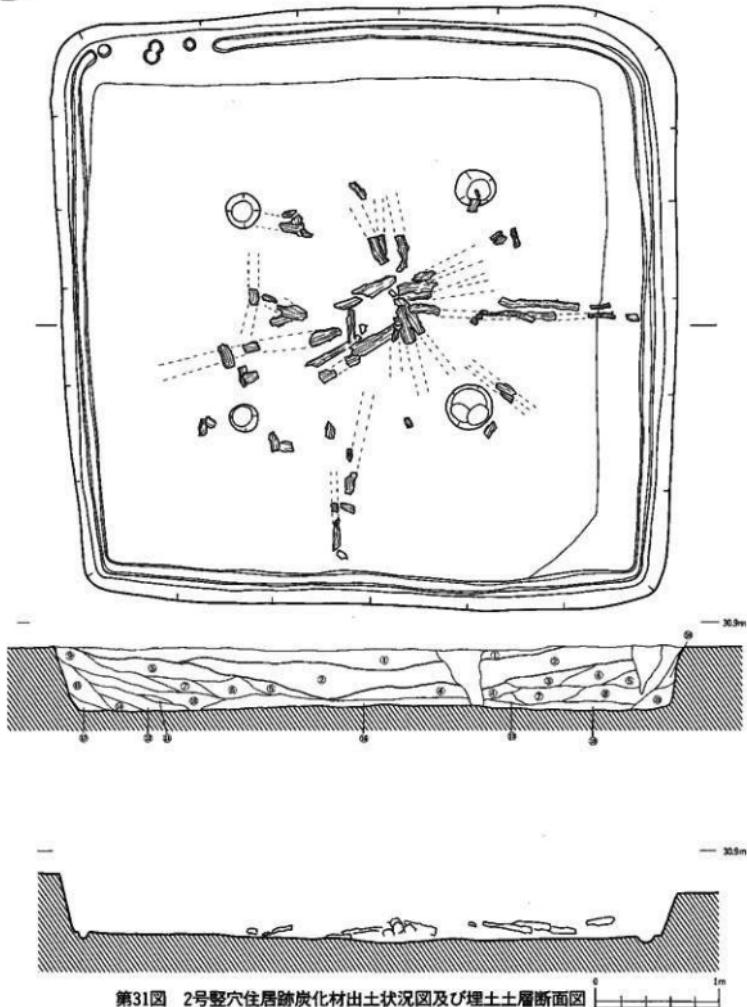


第30図 2号竪穴住居跡遺物出土状況図

P 1からP 4を掘り下げるところ、直径40~24cmの形でいずれも柱穴状に掘り込まれ、床面からの深さ約40cmであり、幅10cmの溝は深さ5cmで丸底状であった。また直径10cm程度の小ピットは深さ5cmの凹状の掘り込みが見られた。上記の遺構はいずれも別時代の埋土の影響は見られず、また前述したとおり検出面からは隅丸方形プラン内部には別時代と思われる遺構の切り合いは見られなかった。このことからこれらの遺構はこの竪穴住居に伴うものである。

このことにより床面に検出された状況及び掘り下げる結果から、P 1~P 4はこの住居の柱穴であり4本柱の建物であることが推測される。また幅10cmの帯状のプランはこの住居の壁立溝と思われ、その溝の途切れた部分にある小ピットはこの竪穴式住居の入口の用に供していたものに伴う遺構と思われる。

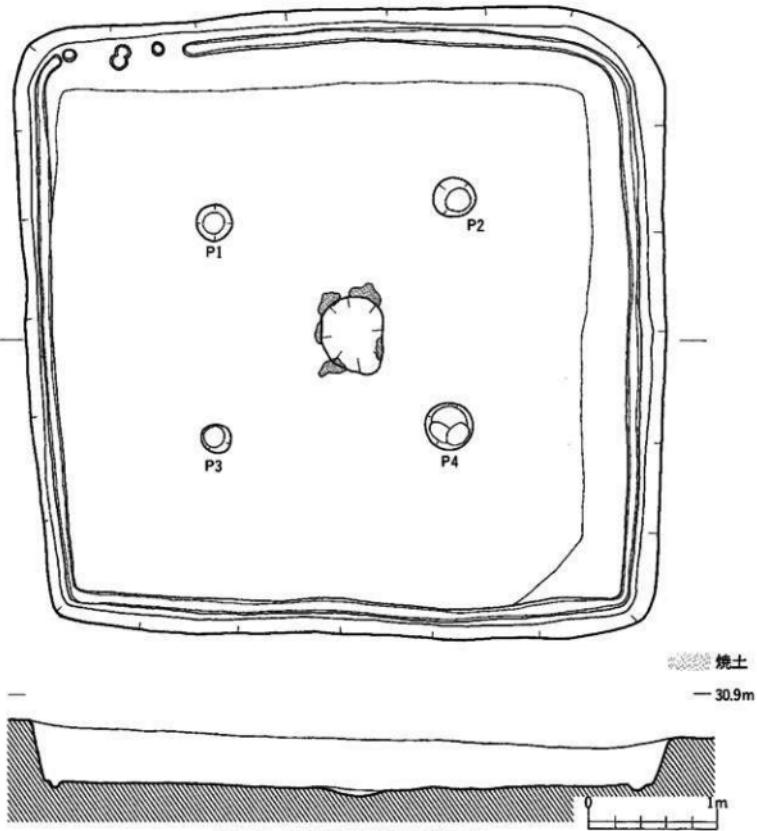
なお、出土した炭化材と床面の間には焼けて変色した土壤が残っており、竪穴式住居を使用していた時期の土壤が埋土の影響を受けずにバッキングする形で残っていた。そこで炭化材を除去し第33図が示す9箇所(I~IXブロック)の床面を深さ5cm程度採取し、札幌大学高官広士助教授の指導のもと、ウォーターフローテーション法により土壤内の遺物・雑穀等の抽出を行った。この分析



第31図 2号竪穴住居跡炭化材出土状況図及び埋土層断面図

2号竪穴住居跡南壁分層状況

- | | | |
|---------------|------------------------|--------------------|
| ①暗灰色土 | ⑧暗灰色 (⑦より淡い) | ⑯A h (流れ込み) |
| ②黒褐色土 | ⑨黒色土 (⑤より暗い) | ⑰A h + シラス土 |
| ③黒褐色土 (②より暗い) | ⑩A h + 暗黄褐色 | ⑱濁A h土 |
| ④暗灰色土 (①より暗い) | ⑪A h ブロック | ⑲A h + シラス + 暗黄褐色土 |
| ⑤黒色土 | ⑫A h + 黑色土 | ⑳濁シラス土 |
| ⑥暗灰色土 (④より暗い) | ⑬A h + 暗灰色土 (A h 多量含む) | |
| ⑦A h + 暗灰色土 | ⑭暗黄褐色土 | |



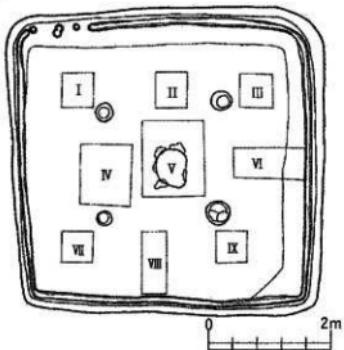
第32図 2号竪穴住居跡完掘状況図

結果については後述する。また第33図のDブロックは、竪穴式住居の上屋部分を支える棟木の頭頂部と思われる一辺50cmの方形の炭化材が出土した場所であり、その下からは長径65cm短径54cmの楕円形プランが検出され、そのプランの縁に焼土部分が確認できた。その遺構を掘り下げた結果、深さ4cmの窪み状の土坑であり、検出された状況から炉跡であると思われ、方形の炭化材は煙出しの可能性が高い。

出土遺物

33は鉄製品で、鎧兜あるいは刀子の可能性がある。茎（なかご）が一部欠損しているものと思われる。数ヶ所に別個体の付着がみられる。全長（最大長）9.65cm、最大幅1.0cm、厚み0.45cm、重量15.8gである。34は磨製石器の未製品と考えられる資料である。石材は粘板岩である。

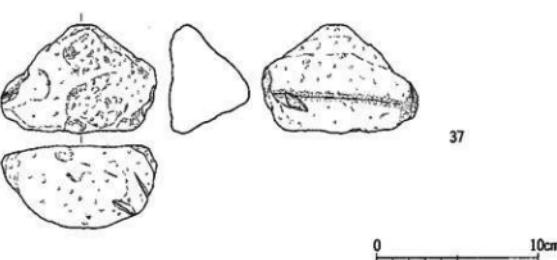
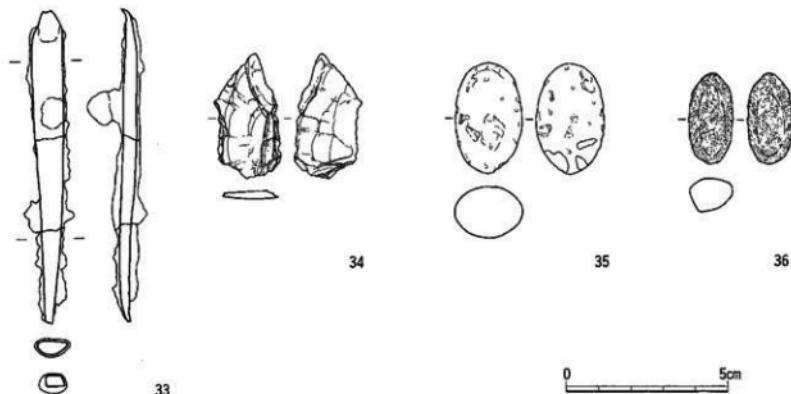
▼



第33図 2号竪穴住居跡土壤サンプリング図

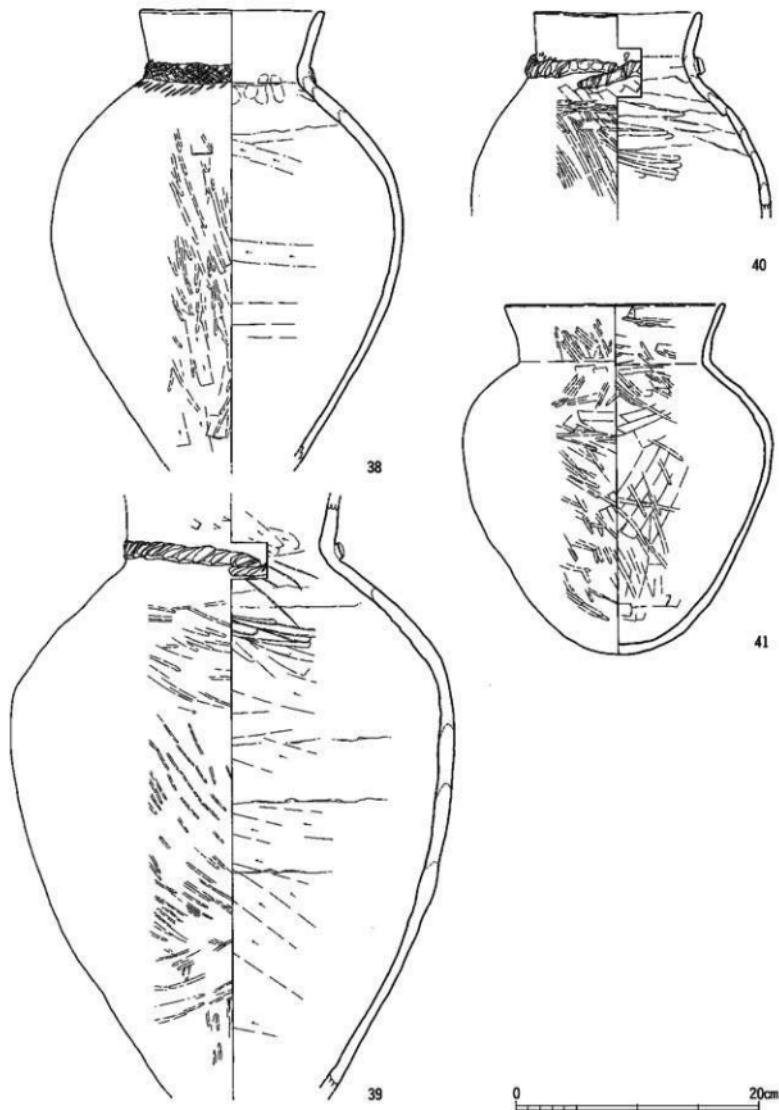
35は蘿（まゆ）形を呈する小型の軽石製品である。全体に丁寧な研磨加工が施されている。36は木の実状を呈する小型の軽石製品。端部付近には淡緑色のガラス状光沢をもつ釉薬状の部分が認められるが、火熱による変化なのか、それとも後世の付着物かは判然としない。37は断面が略三角形を呈する軽石製品。ほかの軽石製品とは異なり、色調は淡黄褐色で磨耗が著しい。加工痕・研磨痕については判然としない。土器は古墳時代の成川式土器である。38～42は壺形土器である。38は、口縁部が短く直線的に外傾し、頸部には格子状の刻目の突帯を一条めぐらす。刻みの新旧関係は、左下がり→左上がりである。突帯の下方には刻目を施した時の工具痕が残る。胴部で張った後、底部にむかってゆるやかに窄む。胎土には、金雲母が多量に含まれる。39は口縁部が直立ぎみに外反する。頸部には、並行斜線の刻目突帯を一条めぐらすが、突帯は完結せず、それちがって終わる。肩部が張り、底部にむかってゆるやかに窄む。40は口縁部が直線的にわざかに外傾し、頸部に並行斜線の刻目突帯を一条めぐらすが、突帯は完結せず、それちがって終わる。41の口縁部は「く」の字状に外反し、肩部が張り、底部は丸底である。調整は、全面ヘラミガキが施され、底部外面はナデである。42は胴部下半部で底部は尖り気味の丸底である。

43は壺形土器で、口縁部は広口でわざかに内湾し、その下位に指頭圧痕を施した一条の突帯をめぐらす。胴部は筒型で、底部は欠損しているが、低い脚台をもつものと推定される。44は成川式土器の鉢形土器で、屈曲した後、外反する口縁部である。45は壺形土器で、胸部屈曲部に指頭圧痕を施した一条の突帯を有する。調整は、内外面ともにナデで工具痕が残り、胴部外面は後、一部縱方向の粗いミガキが施されている。46は壺形土器で、袋状口縁である。47～50は壺形土器である。47は、口縁部は長く、直線的に開き、胴部は球胴状を呈し、丸底である。調整は、口縁部外面がヨコナデ、胴部内面は工具ナデで、その他は、工具ナデの後ヘラミガキである。胴部内面には、粘土接合痕が残る。48は直線的に開く口縁部で、調整は口縁部がヨコナデで、その他は粗いヘラミガキが施される。49は扁平な球胴状を呈し、調整は内面がナデで、上位に指頭痕が、下位にヘラ状工具の圧痕が残り、外面は上位がハケ目、下位がナデで一部粗いヘラミガキである。50は扁平な球胴状を呈し、調整は内面が上位に工具ナデ、下位から底部がヘラミガキで、外面は工具ナデの後ヘラミガキを施している。51は球胴状で丸底で、調整は内面と外面および底部はナデで、外面胴部にはタタキのような痕跡が残る。52～64は高環形土器である。52は杯部で、口縁部は直線的に開き、屈曲部が杯部の中程の高さで、比較的浅めの杯部である。53は、口縁部は湾曲しながら開く口縁部である。54は、直線的に開く口縁部である。55は、外反気味に開く口縁部である。56は、直線的に開き端部の反りが大きい口縁部である。57は、スカート状にやや湾曲して開き、脚台の高さは比較的低

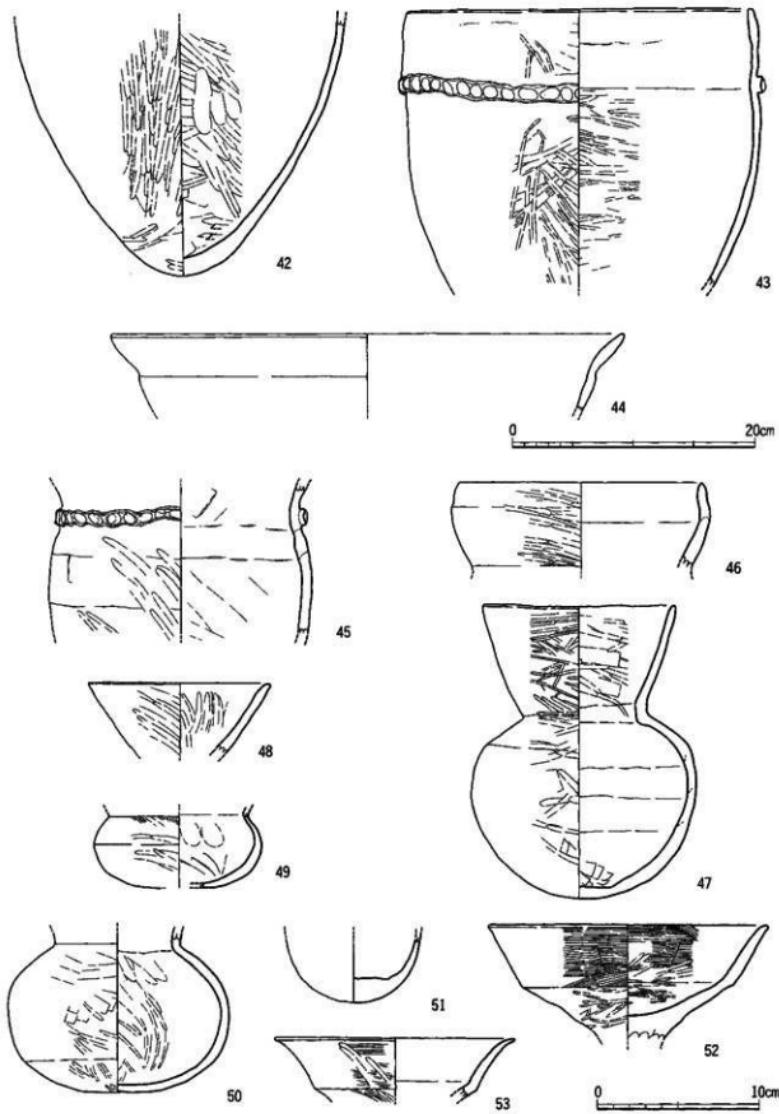


第34図 2号竪穴住居跡出土鉄器・石器 (1/3, 2/3)

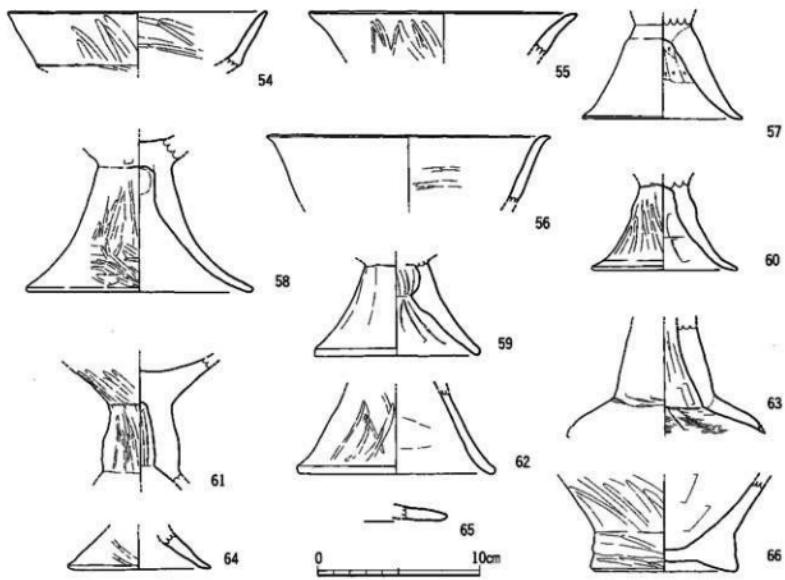
い。58はスカート状に湾曲して開く脚部である。59はスカート状に湾曲して開き、比較的低い脚部である。60は、スカート状に開き、低い脚部である。61は脚部下位が欠損しているが、撥状に屈曲して開くものと思われる。62はスカート状に湾曲して開く脚部である。63は撥状に屈曲して開く脚部である。64は小型で低い脚部と思われる。65は蓋の口縁部で古墳時代のものと考えられる。66は弥生土器の壺形土器の底部で、上げ底である。



第35図 2号堅穴住居跡出土遺物-1 (1/4)



第36図 2号堅穴住居跡出土遺物-2 (1/3, 1/4)



第37図 2号堅穴住居跡出土遺物-3 (1/3)

(2) 4号竪穴住居跡

V層上面で遺構検出を行い、全体のプランは南側が調査対象区域外に延びているため確認はできなかったが、隅丸方形と考えられる。検出面からはプラン内部には別時代と思われる遺構の切り合ひは見られなかった。

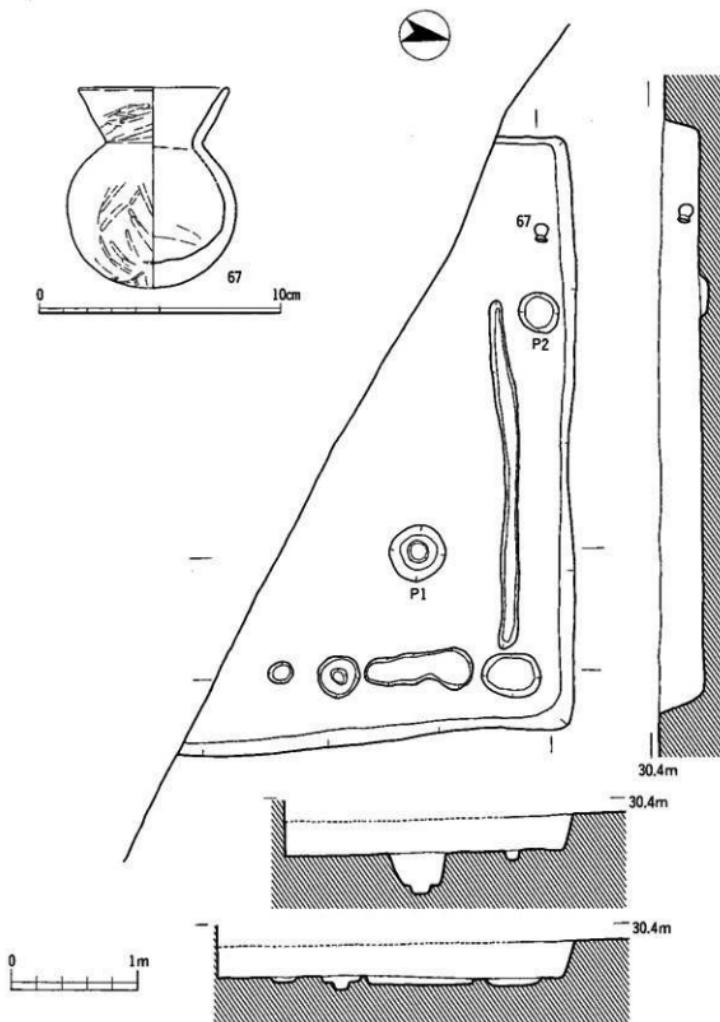
調査区の壁面が近く、埋土の土層観察はそこで可能なため、断ち割りせずにそのまま掘り下げを行ったところ、埋土層中から成川式土器片が数点、また遺構西側の竪穴掘り込み面に近い床面から埴形土器（遺物No67）が1点完形で出土した。床面は硬化し、VI層まで掘り込まれ検出面からの深さは37cmであり、床面はアカホヤと黒色土が混ざった貼床の可能性がある。この床面を精査したところ、プラン東側隅丸部の近くに楕円形のピット1基、それを起点にして壁面の一辺に沿うように西側に280cmと南側84cmに延びる帯状の落ち込みが検出でき、そして南側に延びる帯状土坑の延長上に大小円形の落ち込みが、その4本柱の主柱穴の1つと考えられるP1と、西側にP2を検出した。それぞれの遺構を掘り下げたが遺物は見あたらず、2条の帯状土坑については床面からの深さが8cm、P1をのぞく、楕円形ピットや、円形ピットは床面からの深さ5~10cmと浅い。P1は床面からの深さが21cmと他と比べて深く、この住居の主柱穴であると思われる。その他の遺構については、住居の上屋を支える遺構の可能性が考えられる。

出土遺物

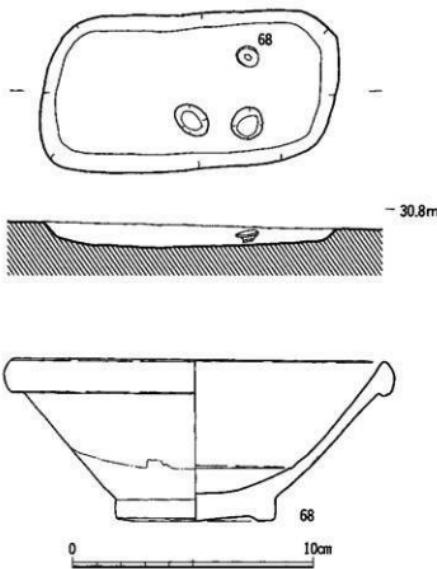
67は埴形土器の完形である。口縁部は短く、直線的に外に開き、底部は丸底である。

3. 溝跡

A・B16区のVI層上面で遺構検出を行った際、幅約30cmの北東から南西へ弧を描くように検出された。埋土は光沢のない淡黒色土であり、掘り下げたところ埋土中から成川式土器片が数点出土した。検出面からの深さは最浅部で11cm、最深部で24cmの台形状の溝である。北東から南西方向に向かってレベルが下がっており排水用の使用したものであると考えられる。



第38図 4号堅穴住居跡完掘状況図



第39図 1号土壙墓完掘状況図及び出土白磁

高台は幅広で、高台内面のケズリは浅い。釉色は青味をおび、体部外面下半から底部は施釉していない。また全体に貫入が入るが、貫入の細かい部分と、そうでない部分がある。胎土には小さな空洞が残る。口径 15.25cm、器高 6.75cm、底径 6.5cm。

(2) 2号土壙墓

D 6 区のII層を重機で慎重に削平していたときに、白磁碗（遺物No69）と土鍋片（遺物No70）の一部が出土した。出土した遺物を精査していたところ北へ60cmのところに同一固体と見られる土鍋片が出土した。これらの白磁碗と土鍋片が出土した地点を中心にして精査し、遺構検出を行ったがプランは確認できなかった。時間をおいて再度プランの検出を試みたが確認できず、遺物出土状況を実測した後、撮影を行ったところ、その写真に楕円形プランを確認することができた。確認できた時点では出土地点は掘り下げが終わっており、楕円形プランの掘り下げはできなかった。第40図のプランは写真観察の結果合成したものである。白磁碗と土鍋片の出土状況と楕円形プランの位置関係から土壙墓である可能性が考えられる。

出土遺物

69は玉縁口縁の白磁碗である。11世紀後半から12世紀の時期のものである。ほぼ完形である。扁

第4節 中世

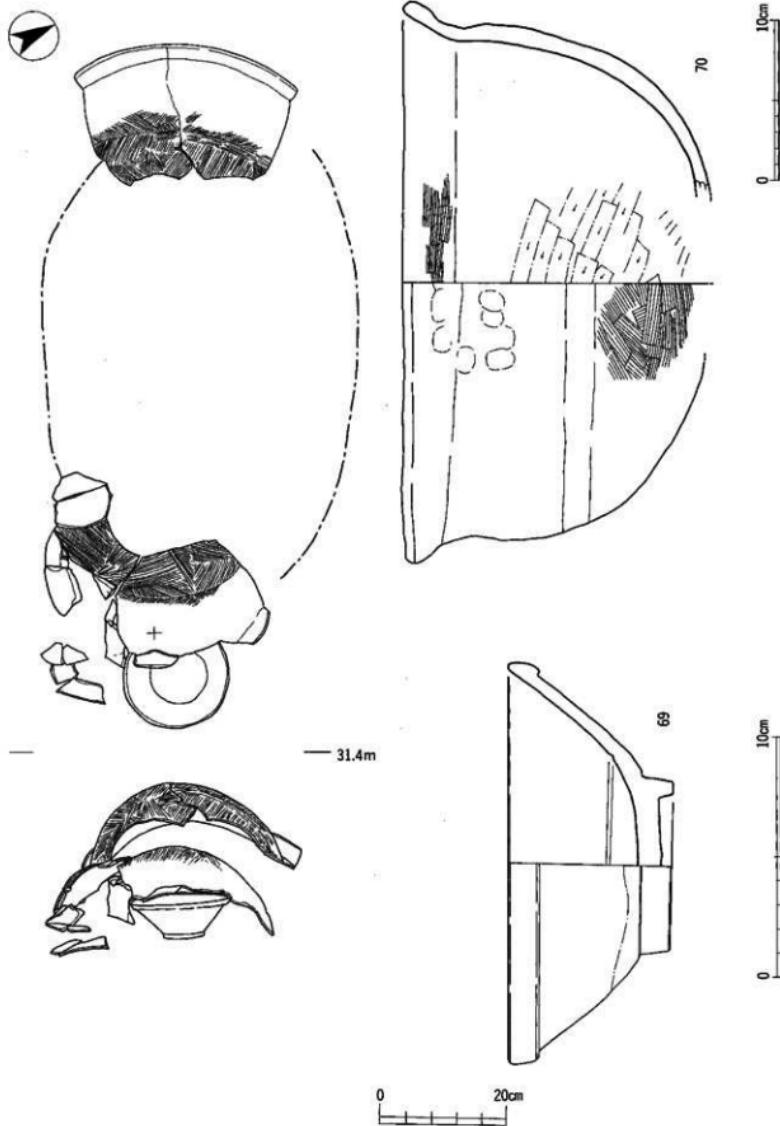
1. 土壙墓

(1) 1号土壙墓

F 1 区のVI層上面で遺構検出を行った際、長径260cm短径130cmの楕円形プランを検出した。掘り下げたところ、検出面から床面まで約10cmであった。長径部が南北に延びておりその北隅より完形の白磁碗（遺物No68）が1点、その他白磁碗片1点が出土した。検出された遺構の状況から土壙墓の可能性が考えられ、完形の白磁碗は埋納されたものと考えられる。

出土遺物

68は玉縁口縁の白磁碗である。11世紀後半から12世紀の時期のものである。厚い玉縁口縁で、底部内面に沈線がめぐる。口縁直下から底部外面向かって回転ヘラケズリ痕が残る。



第40図 2号土壤墓遺物出土状況図及び出土遺物 (1/2, 1/3)

平な玉縁口縁で、底部内面に沈線がめぐる。高台は幅狭で、高台内面のケズリは深い。釉色は淡いクリーム色を呈し、高台まで達しておらず、また全体に貫入が入る。胎土には小さな空洞が多い。口径16.6cm、器高7.05cm、底径7.0cm。70は土鍋である。底部は欠損しており、出土時点では、円形を呈していたことから穿孔の可能性が高い。色調は、内面が赤褐色、外面が黄褐色で、内外面全体に黒斑・煤の付着がみられる。調整は、口縁部内外面はヨコナデ、内面口縁直下から頸部にかけてと、外面胴部下位はハケ目調整、胴部内面は工具ナデ、頸部外面から胴部上位にかけて指頭によるナデである。口縁部内面と胴部外面のハケ目の原体幅は、それぞれ約7cm、約14cmで、2つのハケ目は異なるものと思われる。胎土は、長石・石英・赤褐色粒と金雲母を含む。口径34.3cm、残存器高19.0cm。

2. 堀立柱建物跡

長田遺跡における中世柱穴内埋土の特徴はV層及びVI層が多く混じる黒色土であり、その特徴とともに柱穴の判別を行った。

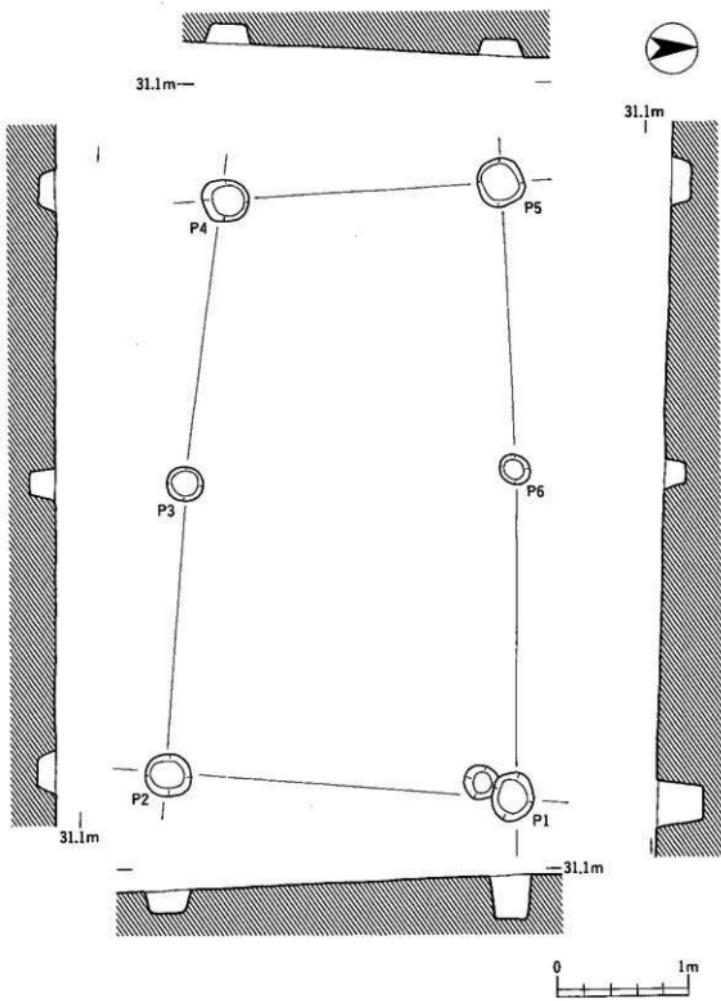
(1) 1号掘立柱建物跡

E 9区のV層上面で遺構検出を行った際、P 1-P 6のピットが1間×2間の合形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたと考えられる。

P 1-P 2軸からP 3-P 4軸にかけて少しずつ梁間が狭まり、P 5-P 1軸とP 2-P 4軸はほぼ直線状に並ぶ。またP 1は2つのピットが切り合う形で検出され、埋土の色もそれぞれがV層及びVI層が多く混じる黒色土であることから、1号掘立柱建物跡は1度建て替えをした可能性が考えられる。

第9表 1号掘立柱建物跡 計測表

押抜番号	41区	検出区	E 9 区		検出面	V層上面		時 期		中 世	
			梁間中間 (cm)	梁間開 (cm)		桁行2間 (cm)	桁行柱間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
P 1-P 2	274	274	P 2-P 3	230	230	P 1	36	38	34	精円形	
P 6-P 3	258	258	P 3-P 4	224	224	P 2	18	36	33	精円形	
P 5-P 4	220	220	P 5-P 6	234	234	P 3	20	29	27	円形	
			P 6-P 1	248	248	P 4	16	37	36	円形	
						P 5	15	40	38	円形	
						P 6	16	26	22	精円形	
平均	250.7	250.7	平均	234	234		20.2	34.3	31.7		
										N 4°W	11.79



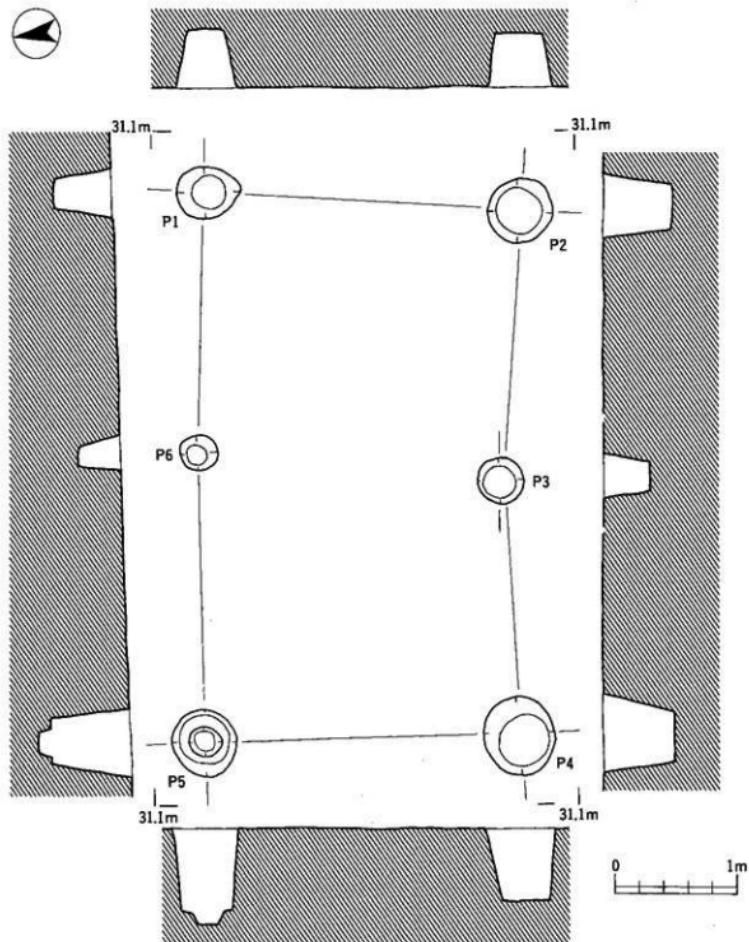
第41図 1号掘立柱建物跡実測図

(2) 3号掘立柱建物跡

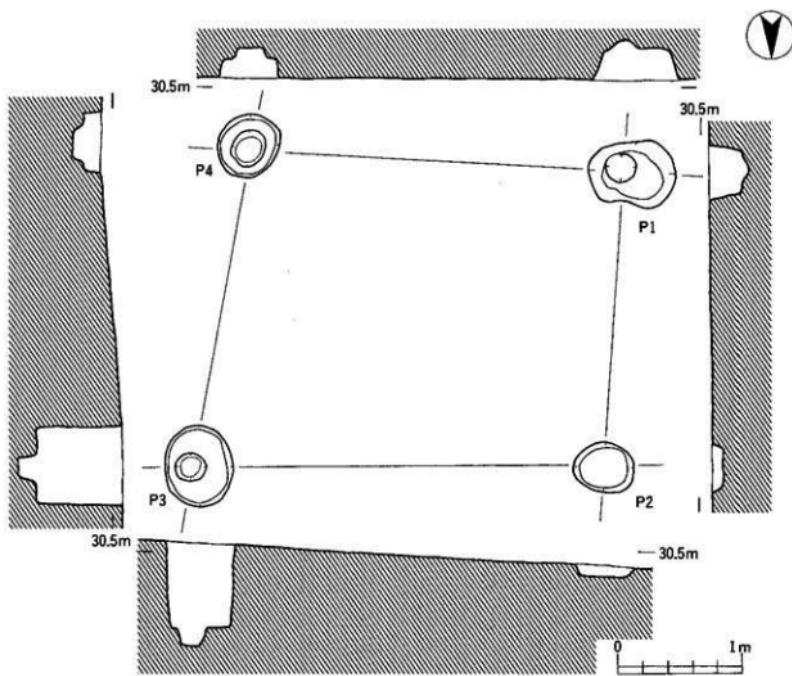
D10・11区のV層上面で遺構検出を行った際、P1～P6のピットが1間×2間のP5-P1軸上のP6が若干北側に入り込んだ変形の台形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられる。

第10表 3号掘立柱建物跡 計測表

探査番号	42区	検出区	D10・11区		検出面	V層上面		時 期		中 世		
			梁間中間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行2間	桁柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
P1-P2	268	268	P2-P3	226	226	P1	50	54	44	楕円形	N 5°E	11.87
P6-P3	258	258	P3-P4	216	216	P2	58	54	54	円形		
P5-P4	266	266	P5-P6	244	244	P3	39	39	39	円形		
			P6-P1	222	222	P4	62	67	60	楕円形		
						P5	80	56	55	円形		
						P6	35	30	30	円形		
平均	264	264	平均	227	227		54	50	47			



第42図 3号掘立柱建物跡測図



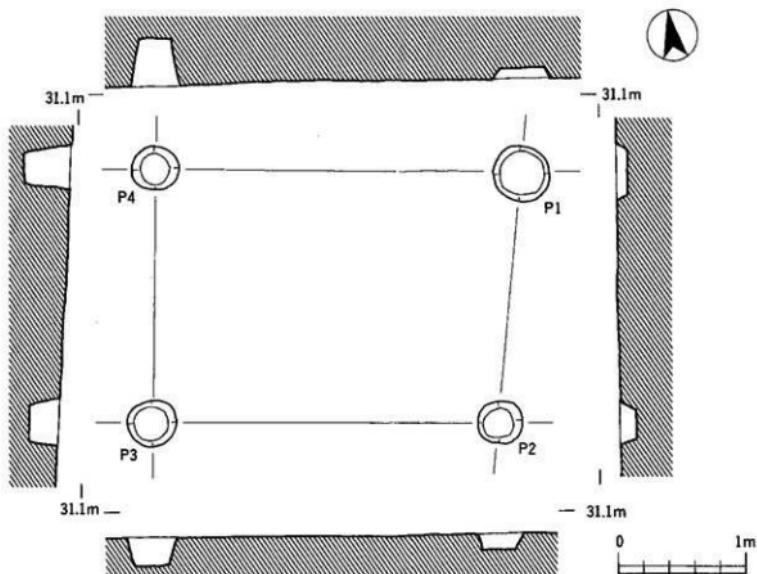
第43図 8号掘立柱建物跡実測図

(3) 8号掘立柱建物跡

E 7区のV層上面で遺構検出を行った際、P 1～P 4のピットが1間×1間のP 3が北東側に突出する変形の方形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられる。

第11表 8号掘立柱建物跡 計測表

挿図番号	43図	検出区	E 7区		検出面	V層上面		時 期		中 世		
			梁間中間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行1間	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
P 1—P 2	270	270	P 2—P 3	310	P 1	86	68	57	椭円形			
P 3—P 4	264	264	P 4—P 1	344	P 2	25	56	49	椭円形			
					P 3	34	72	53	椭円形			
					P 4	10	50	42	椭円形			
平均	267	267	平均	327	327		38.8	61.5	50.3			
										N2.5°E		8.63



第44図 9号掘立柱建物跡実測図

(4) 9号掘立柱建物跡

E 9区のV層上面で遺構検出を行った際、P 1～P 4のピットが1間×1間の方形を呈す形で検出された。本建物跡はV層上面で検出であったが埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられる。

第12表 9号掘立柱建物跡 計測表

探査番号	44図	検出区	E 9 区		検出面	V層上面		時 期		中 世		
			梁間中間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行1間 (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	柱穴	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
梁行1間												
P 1—P 2	210	210	P 2—P 3	292	292	P 1	9	46	44	円形		
P 3—P 4	200	200	P 4—P 1	294	294	P 2	13	36	36	円形	N9°E	5.86
						P 3	24	39	36	円形		
						P 4	40	36	34	円形		
平均	205	205	平均	293	293		21.5	39.3	37.5			

3. 棚列

(1) 1号棚列

D E 8・9区のV層上面で遺構検出を行った際検出され、P 1～P 8のピットが略東西方向にはほぼ直線状に配列され全長は14.85mである。埋土の状況からII層中から掘り込まれたの考えられることと、検出されたV層上面のレベルが北から南方向に下がることから、E 8区の棚列は西方向に延びていた可能性も考えられる。

また南側に40m先には1号掘立柱建物跡、70m先には9号掘立柱建物跡が、北西に100m先には8号掘立柱建物跡があり、それぞれの掘立柱建物跡の東西軸と1号棚列の配列がほぼ平行に並ぶ。このことから1号棚列と1号・8号・9号掘立柱建物跡の歴史的な関連性があると考えられる。

第13表 1号棚列 計測表

探査番号	45区	検出区	DE 8・9区				検出面	V層上面		時期			中世	
			柱間(cm)	杭間(cm)	柱穴	深さ(cm)		柱穴	柱穴	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	柱穴	柱穴プラン
P 1-P 2	200	P 5-P 6	170	P 1	35	40	37	楕円形	P 5	25	45	40	楕円形	
P 2-P 3	235	P 6-P 7	195	P 2	40	35	30	楕円形	P 6	40	35	30	楕円形	
P 3-P 4	235	P 7-P 8	210	P 3	35	30	25	円形	P 7	5	25	25	円形	
P 4-P 5	240			P 4	25	30	30	円形	P 8	25	35	30	楕円形	
		平均	212						平均	28.8	34.4	30.8		

(2) 2号棚列・3号棚列

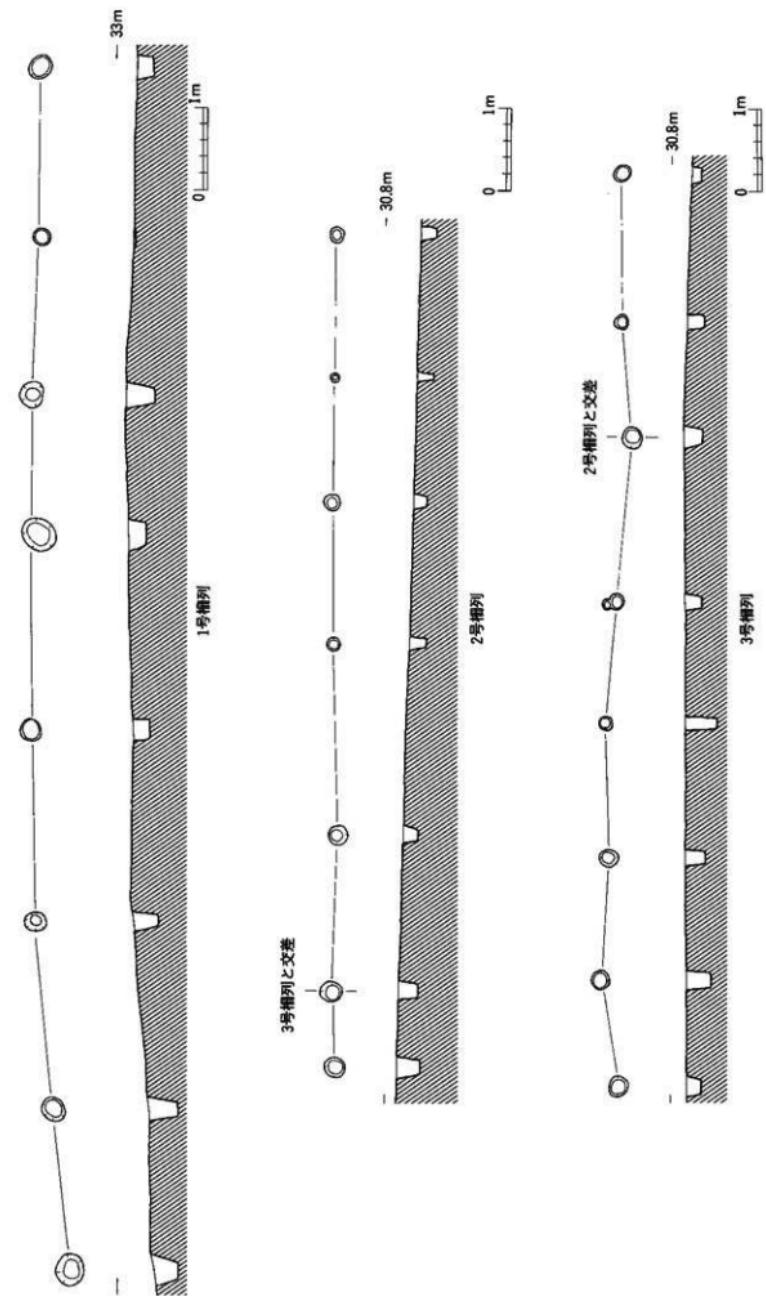
2号棚列はC 13・14区、3号棚列はB C 14区の遺構検出を行った際検出され、2号棚列のP 2と3号棚列のP 6はお互いの棚列で共有するピットであり、2号棚列と3号棚列はほぼ直行している。また、3号棚列の南端は事業対象区域外に延びるようにも見え、広範囲に延びている可能性がある。2号棚列は東西方向に、3号棚列は南北方向に延び、それぞれのピット幅は20cm前後と狭いことから棒状のものを差し込んでいたと考えられる。

第14表 2号棚列 計測表

探査番号	45区	検出区	DE 8・9区				検出面	V層上面		時期			中世	
			柱間(cm)	杭間(cm)	柱穴	深さ(cm)		柱穴	柱穴	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	柱穴	柱穴プラン
P 1-P 2	95	P 5-P 6	102	P 1	30	28	28	円形	P 5	18	25	22	楕円形	
P 2-P 3	195	P 6-P 7	125	P 2	25	30	25	楕円形	P 6	23	12	12	円形	
P 3-P 4	235			P 3	20	25	25	円形	P 7	22	20	19	楕円形	
P 4-P 5	175			P 4	22	20	20	円形						
		平均	154.5						平均	23.3	23.1	21.8		

第15表 3号橋列 計測表

鉢図番号	45区	検出区	BC 8・9区			検出面	V層上面	時期		中世		
			杭間 (cm)	柱間 (cm)	柱穴			柱穴 (cm)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	柱穴 プラン
P 1—P 2	135	P 5—P 6	205	P 1	20	28	25	楕円形	P 5	23	22	20
P 2—P 3	95	P 6—P 7	145	P 2	31	25	25	円形	P 6	25	30	25
P 3—P 4	115	P 7—P 8	180	P 3	26	25	23	楕円形	P 7	23	20	20
P 4—P 5	145			P 4	40	20	18	楕円形	P 8	15	25	20
		平均	145.7					平均	25.4	24	22	



第45図 1, 2, 3号桿列実測図

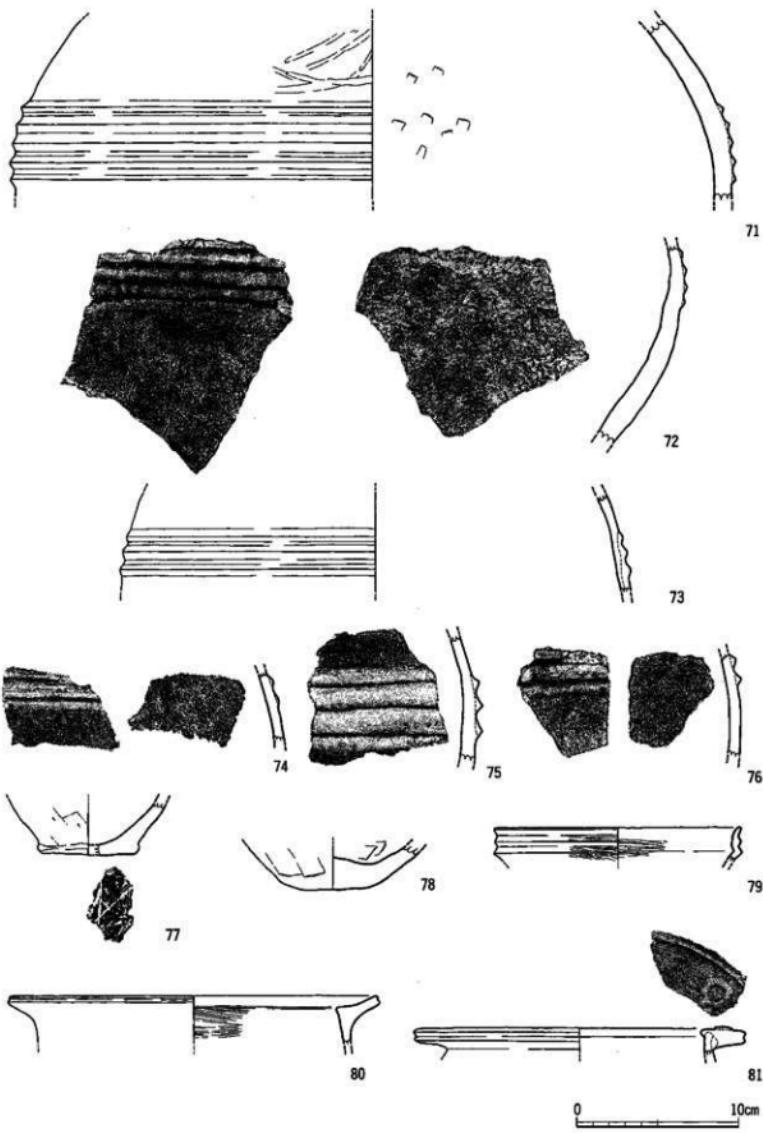
第5節 包含層出土遺物

71~78は弥生時代中期の山ノ口式土器の壺形土器である。71は大型のもので、三角突帯を五条有する胴部である。比較的厚い。72は胴部下半部で、比較的厚く、三角突帯が四条残存する。73は三角突帯を三条有する胴部である。74は三角突帯が二条残存する胴部である。75は三角突帯を三条有する胴部である。76は三角突帯が二条残存する胴部である。77は底部で調整はナデで、内外面には工具痕が残り、底部にはヘラで網目状の沈線を施す。78は平底の底部である。79は縄文時代晩期の黒川式の台付鉢形土器の口縁部と考えられる。口縁部に割り出しの突帯を一条巡らす。色調は、外面ともに明褐色である。調整は、口縁端部がナデで、その他は丁寧なヘラミガキである。

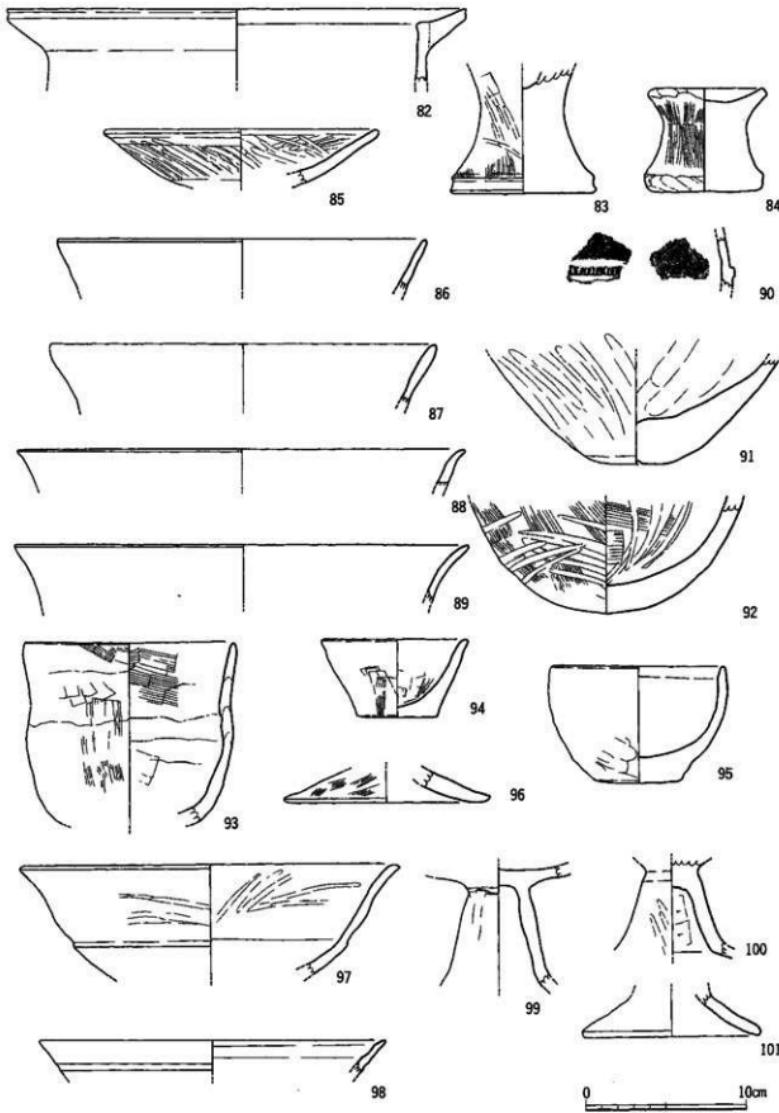
80~84は弥生時代中期の壺形土器である。80は口縁端部が凹線状に窪み、上面は真ん中が窪み湾曲する。81は口縁端部が凹線状に窪み、上面には円形の粘土を貼り付けている。82は口縁部形態が80とほぼ同様であるが、更に起きる。83は中実の脚台状を呈し、平底である。84は脚部の上部と下端を意図的に打ち欠いて、二次利用したものと考えられる。中実脚台で、平底である。

85~101は成川式土器の土器である。85は高環形土器で、口縁部が直線的に開く杯部である。86~89は壺形土器である。86は直線的に開く口縁部である。87は直線的に開く口縁部である。88はやや外反する口縁部である。89は湾曲しながら外に開く口縁部である。90~92は壺形土器である。90は刻目突帯を一条巡らす胴部である。91は厚い丸底である。92は丸底の底部で、調整はハケ目（原体幅0.6~0.7cm）の後粗いヘラミガキである。93は小型鉢形土器である。94は鉢形土器で、体部は口縁部にむかって直線的に開き、底部は平底である。95は鉢形土器で、口縁部は内碗気味に直立し、底部は平底である。96は蓋の可能性がある。97は高杯形土器である。大型で、口縁部は外反ぎみに開く杯部である。98は古代の須恵器杯である。直線的に外に開く口縁部である。99~101は高杯形土器である。100は高環形土器の脚部である。101は厚い底部である。102は平面が方形、断面は略三角形を呈する軽石製品。両側面及び上端を面取りしており、下端部は深く抉りこむように加工が施されている。また、図の正面及び両側面には左上がり斜位方向に加工の跡と思われる切れ込みが残る。103は平面概形が略方形を呈する軽石製品である。裏面側は新傷による損傷を受けているが、研磨加工はほぼ全面に認められ、部分的にシャープな稜線をなすほど丁寧に製作されている。104は大型の軽石製品である。明確な研磨痕は図正面の右側（右側面鏡の左側）に観察されるのみで、素材本来の形状に対する大きな変更は見られない。105は下方が幅広になる短冊形の軽石製品である。両側面には研磨加工が施され直線状をなすが、表面と裏面が研磨されているかどうかは不明瞭で判然としない。頭部は整形されているものと思われ、下端は欠損しているようである。106は比較的粗い押圧剝離で製作された凹基式の打製石鎌である。尖頭部および片脚を欠損する。石材はサヌカイト質安山岩と思われる。107は剥離面打面から剥出された横長剥片を素材とするスクレーバー（削器）である。刃部は両面加工で形成されている。二次加工は最初に主要剥離面側から背面側にかけての平坦剝離（押圧剝離）が施され、その後に背面から主要剥離面側への細かい調整剝離を施している。刃部には両面とも軽微な磨耗が認められ、部分的にポリッシュ（光沢）が観察される。石材は頁岩（珪質頁岩）と思われる。108は弥生時代の土製勾玉。頭部のみの残存で、穿孔は、一方に1つ、もう一方に2つあけられ、貫通している。孔から放射状に5条あるいは6条の刻線がある。色調は、明赤褐色・赤褐色で、胎上に墨母を含む。109はミニチュア土器である。体部は直線的に開き、底部は平底

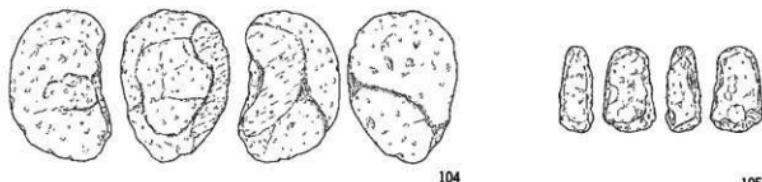
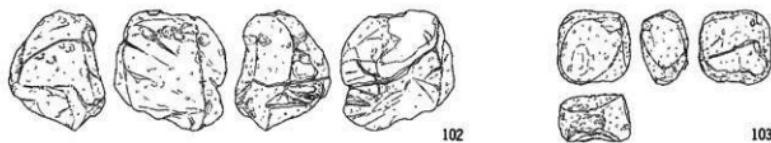
(若干上げ底)である。110は須恵器の転用硯と思われる。高台付き杯の高台を意図的に打ち欠いて硯に転用している。内面には硯としての使用痕がみられる。111は鉄製品。種類は不明。全長7.9cm、幅1.9cm、厚み0.2~0.3cm、重量 29.5g。112は青磁の香炉で肥前系である。17世紀後半から18世紀初頭。体部外面には縦に鎬の線文に入る。発色は、淡い青緑色。施釉部分は高台底面以外の全体に渡り、ふき取られている蛇の目高台の部分はオレンジ色を呈する。胴部下位から高台と、内面の底部付近に貫入がある。113は龍泉窯系の青磁碗の口縁部である。13世紀前後から前半の時期のものであろう。片切彫りで鎬をもたない蓮弁文を施す。貫入がわずかに入る。114は龍泉窯系青磁碗の体部である。13世紀前後から前半の時期にあたる。しっかりした片切彫りで鎬蓮弁文が描かれている。115は龍泉窯系青磁皿の口縁部である。14世紀後半から15世紀の時期に該当する。外面にヘラ文と思われる文様が一部残る。116は龍泉窯系青磁碗の底部で、高台内面が焼成時の灰黒色を呈する。117は龍泉窯系青磁碗(あるいは皿・杯の可能性もある)の底部である。14世紀後半以降のものである。見込みは圓線内に施された押印による草花文と思われる。高台内面は露胎である。118は龍泉窯系青磁碗の底部である。12世紀中頃から後半の時期のものである。疊付・高台は無釉である。119は龍泉窯系青磁碗の底部である。14世紀後半から15世紀の時期にあたる。120は白磁碗の口縁部である。11世紀後半から12世紀前半の時期のものである。内面に浮文の一部がみられる。121も白磁碗の口縁部である。11世紀後半から12世紀前半の時期のものである。122は白磁碗の口縁部である。11世紀後半から12世紀前半の時期のものである。口縁部には焼成時の焼きつきが見られる。同時期のものとしては器壁が薄い。123は白磁皿の口縁部である。口縁端部は口剥ぎで、釉は光沢がある。内面の体部上位に段を有し、一部釉が白濁しており化粧土の可能性がある。色調はクリーム色をおび、全体に貫入がある。124は白磁皿である。高台内は露胎。125は白磁碗の底部である。見込みには圓線が巡る。126は中国漳州窯系染付の碗である。16世紀から17世紀のもので、外面に唐草文を描く。呉須の発色は悪く黒青色である。焼成は不良である。127は中国の景德鎮系の染付碗である。16世紀のものである。外面に人物文を描く。呉須の発色は藍色である。128は中国漳州窯系染付の碗である。外面に芝垣文、見込みに花文を描く。高台内は露胎である。全面に貫入がある。129も中国漳州窯系染付の小碗である。16世紀から17世紀の時期のものである。底部から高台にかけてやや離れた二本の圓線がめぐる。130は18世紀前半の肥前系の染付の皿である。見込みにこんにゃく印判の五弁花を描く。外面の高台周辺に見られる4本の圓線は、元禄年間の前後に多いものである。131は中国産の碗もしくは皿であろう。16世紀から17世紀頃と考えられる。外外面に圓線が巡る。見込みに花文を描く。疊付から高台内にかけては無釉である。132は須恵器の壺の口縁部である。133は国産の磁器碗である。外面・内面とも口縁部の一部に鉄釉を施す。内面は、白磁のままである。134は東播系の須恵器系陶器の捏ね鉢である。135は中国産の白磁皿で、14世紀後半の可能性がある。見込みと高台内面は露胎である。136は薩摩焼の陶器の菱形土器で、17世紀から18世紀の時期にあたる。137は19世紀頃の薩摩焼の鉢である。褐釉で、口唇部は釉を搔き取っている。138も19世紀頃の薩摩焼の鉢形土器である。褐釉で、口唇部は釉を搔き取っている。139は陶器の土瓶の耳で18世紀から19世紀のものであろう。140は東播系の須恵器系陶器の捏ね鉢である。141は土師器の小皿である。底部外面がヘラ切り離しの後ナデを施している。142は土師器の皿である。底部外面はヘラ切り離しの後ナデを施す。143は土師器の皿である。底部外面はヘラ切り離しの後ナデである。



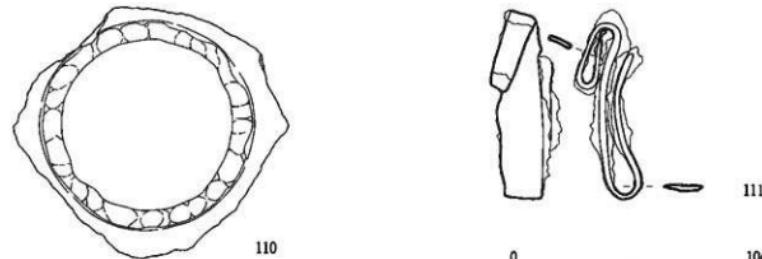
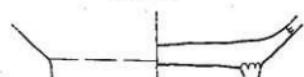
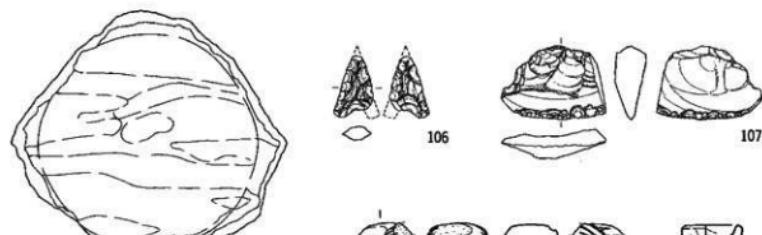
第46図 包含層出土遺物-1 (1/3)



第47図 包含層出土遺物-2 (1/3)

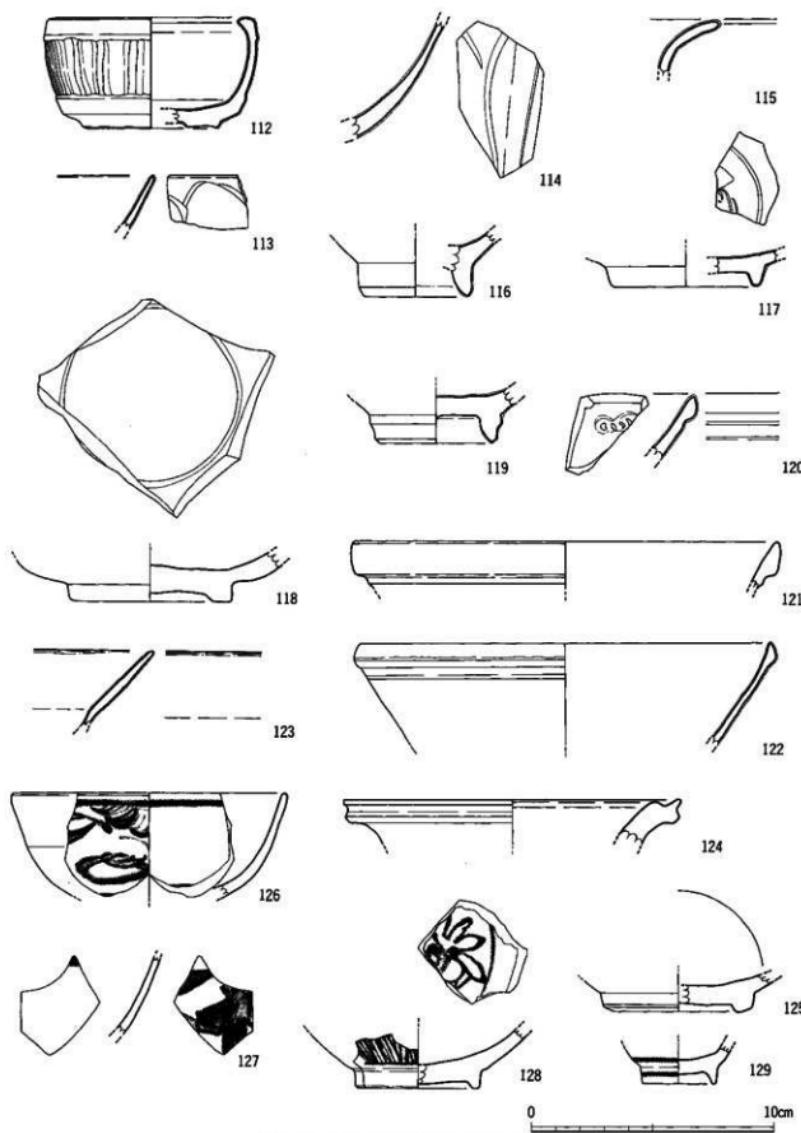


0 20cm

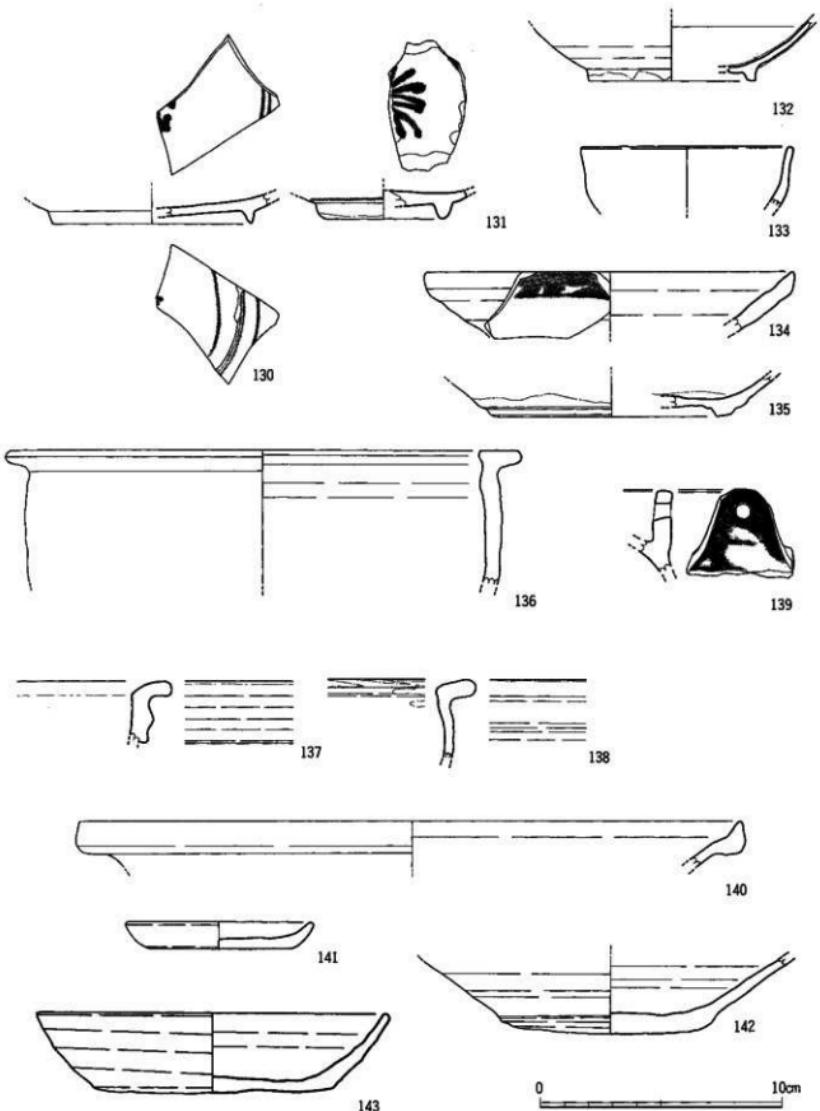


0 10cm

第48図 包含層出土遺物-3 (1/2, 1/4)



第49図 包含層出土遺物-4 (1/2)



第50図 包含層出土遺物-5 (1/2)

第13表 土器觀察表

レ ジ ト No.	種 別	器 種	出 土 地 點	口 徑	法 量(m)	底 土 高 度 径	胎 土 色	調 色	調 整	燒 成	特 徵	
1	衆生土器	壺	SH1	[23.4]	(2.8)	長石・石英・金雲母・ 鈣霞石・赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：黃褐色 内部：白色	内面：ヨコナデ・ヨコナデ	良		
2	衆生土器	小型壺	SH11	[7.4]	(1.2)	長石・石英・雲母・赤 褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：褐色 内部：白色	内面：ヨコナデ・ナデ	良	西瀬戸内系	
3	衆生土器	壺	SH11	(4.9)		長石・石英・金雲母	外面：褐色 内部：白色	外面：ナデ	内面：ナデ	良		
4	衆生土器	壺	SH1	(5.6)		長石・石英・金雲母	内面：褐色 外部：白色	内面：ナデ	外側：ヨコナデ	良	黑斑	
5	衆生土器	壺	SH1	(4.8)		長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナデ	内面：ヨコナデ	良	黑斑	
6	衆生土器	壺	SH1	[27.4]	(5.2)	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：褐色 内部：白色	内面：ヨコナデ・ナデ	良	黑斑	
7	衆生土器	壺	SH1	[25.5]	(4.5)	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナデ	内面：ヨコナデ	良	黑斑	
8	衆生土器	壺		(4.2)	[7.6]	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナゲ目・ナデ	内面：ナゲ目	良		
9	衆生土器	壺	SH1	(2.55)	[7.6]	長石・石英・雲母・赤 褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナゲ目	内面：工具ナデ	良		
12	衆生土器	壺	SH3	(6.7)		長石・石英・金雲母	褐色	外面：工具ナデ	内面：ヨコナデ	良		
13	衆生土器	壺	SH3	[19.8]	(4.6)	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	褐色	外面：ナデ	内面：ヨコナデ・ナデ	良	黑斑	
14	衆生土器	壺	SH3	[25.7]	(5.8)	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナデ	内面：ヨコナデ・ナデ	良	黑斑・焼付着	
15	弘生土器	壺	SH3	[24.6]	(8.6)	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナデ	内面：ヨコナデ・ナデ	良	黑斑・焼付着	
16	衆生土器	壺	SH3	[32.4]	(5.4)	長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナデ	内面：ヨコナデ・ナデ	良	黑斑・焼付着	
20	成川式土器	壺	SH5	(14.2)		長石・石英・雲母・角 閃石・赤褐色粒	外面：褐色 内部：白色	外面：ナゲ目	内面：ヨコナデ・工具ナデ後； 外側：ナゲ目	良	黒斑・焼付着・肩部にヘラ 記号	
21	成川式土器	鉢	SH5	[14.4]	6.75	[6.6]	長石・石英・雲母	明赤褐色 外側：褐色	内面：ヨコナデ・ミガキ ナデ・指紋压痕	内面：ヨコナデ・ミガキ・工具 ナデ	良	黑斑
22	成川式土器	鉢	SH5		(5.7)	長石・石英・雲母・角 閃石・赤褐色粒	内面：褐色 外側：褐色	内面：ナゲ目・明赤褐色 外側：褐色	内面：工具ナデ 外側：ナゲ目	良	黑斑	
23	成川式土器	鉢	SH5		(6.35)	長石・石英・雲母	内面：褐色 外側：褐色	内面：ナゲ目・赤褐色 外側：褐色	内面：ナゲ目	良	指痕	
24	成川式土器	鉢	SH5		(6.5)	長石・石英・雲母・赤 褐色粒	内面：褐色 外側：褐色	内面：明赤褐色 外側：褐色	内面：工具ナデ・指紋壓 痕	良		
25	成川式土器	高杯	SH5	[13.0]	(3.9)	長石・石英・雲母・赤 褐色粒	内面：褐色 外側：褐色	内面：ナゲ目	工具ナデ	良	黒斑	
26	成川式土器	高杯	SH5		(7.3)	[11.8]	長石・石英・雲母・赤 褐色粒	内面：褐色 外側：褐色	内面：ケズリ・ナゲ目 外側：ナゲ目へラミガキ	良		

レ ン ト ウ イ ン シ テ ル No.	種 別	形 態	出土遺物	法 式	寸 径	器 底	底 土	色 調	調 整	燒 成	特 徴
経	底(cm)										
27	斧生土器	端	SH 7		(36.0)		長石・石英・金雲母・ 黑曜石・赤褐色粒	内面：にふい黄色～黄褐色 外面：褐色	内面：不明 外面：ミガキ	良	黒斑
28	斧生土器	端	SH 7	[16.3]	(4.65)		長石・石英・金雲母・ 赤褐色粒	内面：褐色 外面：にふい褐色	工具ナデ	良	黒斑
29	斧生土器	端	SH 7	[22.5]	(7.65)		長石・石英・金雲母	内面：褐色 外面：一	内面：ヨコナデ・T・ツナデ 外面：ヨコナデ・ナデ	良	黒斑
33	鉄製品	鍔柄？	SH 2								数ヶ所に別體の付着
38	或川式土器	端	SH 2 (SH 1)	15.3	(37.9)	金雲母		内面：赤褐色 外面：赤褐色・明褐色・褐 内面：明褐色・褐色 外面：褐色・黃褐色・褐	内面：ヨコナデ・ナデ・指彫压 外面：板	良	黒斑
39	或川式土器	端	SH 2		(49.05)		長石・石英・雲母	内面：明褐色 外面：褐色	内面：工具ナデ 外面：工具ナデ・ナデ後ミガキ	良	黒斑
40	或川式土器	端	SH 2	13.55	(16.3)		長石・石英・雲母・赤 褐色粒	内面：明赤褐色・褐色 外面：明赤褐色・赤褐色	内面：ヨコナデ・ナデ・ハゲ目後ミガ 外面：ヨコナデ・ハゲ目後ミガ	良	黒斑
41	或川式土器	端	SH 2 (SH 1)	[18.0]	29.0	雲母		内面：一 外面：赤褐色・明黄褐色・ 黄褐色	内面：工具ナデ後ミガキ 外面：ヨコナデ・ナデ	良	黒斑・焼付着
42	或川式土器	端	SH 2		(20.85)		長石・石英・雲母・赤 褐色粒	内面：にふい黄色・金色 外面：褐色・明赤褐色・赤 褐色	内面：工具ナデ後ミガキ・一部 外面：ミガキ・工具ナデ後指捺 ミガキ？	良	黒斑
43	或川式土器	端	SH 2	28.15	(23.0)	雲母		内面：明赤褐色・明褐色 外面：明黄褐色	内面：ミガキナデ・工具ナデ後ミ ガキ 外面：ハゲ目後ミガキ	良	黒斑・焼付着
44	或川式土器	鉢	SH 2	[41.8]	(6.4)		長石・石英・雲母・角 閃石	内面：明褐色 外面：明褐色～明褐色	内面：ヨコナデ・ナデ 外面：ヨコナデ	良	黒斑
45	或川式土器	端	SH 2		(9.0)		長石・石英・雲母・角 閃石	内面：明褐色 外面：角・一部明褐色 内面：明褐色	内面：工具ナデ 外面：工具ナデ・一部ミガキ	良	焼付着
46	或川式土器	端	SH 2	[15.0]	(5.4)		長石・石英・雲母 褐色粒	内面：にふい黄色・明褐色 外面：褐色	内面：ミガキナデ後ナデ 外面：ミガキ	良	黒斑
47	或川式土器	端	SH 2	11.6	18.2		長石・石英・雲母・赤 褐色粒	内面：明赤褐色・明褐色 外面：明褐色	内面：工具ナデ後一部ミガキ・ 一部ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑
48	或川式土器	端	SH 2	[11.2]	(4.4)		長石・石英・雲母	内面：褐色 外面：ミガキ	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑
49	或川式土器	端	SH 2		(4.7)		雲母・赤褐色粒	内面：にふい褐色 外面：褐色	内面：ナデ（指彫压）・T・ツナデ 外側：ハゲ口・ナデミガキ	良	黒斑（浮乞）
50	或川式土器	端	SH 2 (SH 1)		(9.85)		長石・石英・雲母・角 閃石	内面：赤褐色・明褐色 外面：明褐色	内面：工具ナデ後一部ミガキ 外側：ナア？・ナデ	良	黒斑
51	或川式土器	端	SH 2		(4.2)		長石・石英・雲母	内面：にふい黄色・明褐色 外面：褐色	内面：ナア？・ナデ	良	黒斑

No.	種	期	器種	出土遺構	法 口 径	高 底	全 長(cm)	輪 土	色	調	繩	施成	特 徴
52	古墳時代	高杯	SH2	17.1	(7.1)	長石・石英・雲母・赤褐色 褐色	内面：明る褐色・褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色・褐色 外面：明る褐色？（透輝）	内面：ハケ日・ミガキ 外面：ハケ口・ミガキ	内面：ミガキ？（透輝） 外面：ミガキ	良	黒斑・墨付黄ハケ目原体 幅：1.3~1.4cm	
53	成川式土器	高杯	SH2	[14.8]	(3.6)	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色？（透輝） 外面：明る褐色	内面：ミガキ？（透輝） 外面：ミガキ	内面：ミガキ？（透輝） 外面：ミガキ	良		
54	成川式土器	高杯	SH2	[16.0]	(3.5)	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ後ミガキ 外面：ミガキナデ後ミガキ	内面：ミガキナデ後ミガキ 外面：ミガキナデ後ミガキ	良	黒斑	
55	成川式土器	高杯	SH2	[16.4]	(2.7)	長石・石英・雲母・均 褐色・赤褐色	内面：明る褐色・明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良		
56	成川式土器	高杯	SII2	[16.8]	(4.1)	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑	
57	成川式土器	高杯	SH2		(6.2)	[9.8]	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑	
58	成川式土器	高杯	SH2		(9.45)	[14.2]	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良		
59	成川式土器	高杯	SH2		(5.95)	[10.0]	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑	
60	成川式土器	高杯	SH2		(5.55)	[9.6]	長石・石英・雲母・赤 褐色・赤褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑	
61	成川式土器	高杯	SH2		(7.7)	長石・石英・雲母・赤 褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	墨付有		
62	成川式土器	高杯	SH2		(5.1)	[12.0]	長石・石英・雲母・角 褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑	
63	成川式土器	高杯	SH2		(6.65)	長石・石英・雲母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：つよい工具ナデ・ハケ目 外面：工具ナデ	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑	
64	成川式土器	高杯	SH2		(2.3)	[8.7]	長石・石英・雲母・赤 褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ナデ 外面：ナデ後ミガキ	良		
65	弥生土器	壺	SH2		(0.9)	長石・石英・雲母・赤 褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ナデ 外面：ナデ	良			
66	弥生土器	壺	SH2		(5.6)	[8.8]	長石・石英・雲母・赤 褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑	
67	古墳時代 の土器	壺	SH4	6.1	8.25	長石・石英・雲母・角 褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ・「貝日」ナデ 外面：ミガキナデ・「貝日」ナデ後ミガキ	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑	
70	古代～中世 の土器	壺			34.3	(19.6)	長石・石英・金富母・ 赤褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキナデ 外面：ミガキナデ	良	黒斑・墨付有底部火痕は穿 孔の可能性・ハケ目原体幅 約0.7cm・体部：約1.4cm	
71	弥生土器	壺			(11.1)	長石・石英	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑		
72	弥生土器	壺			(15.9)		長石・石英・金富母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑		
73	弥生土器	壺			(6.0)		長石・石英・金富母	内面：明る褐色 外面：明る褐色	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	黒斑		

レーアウト No.	種 別	器 様	出土遺物 No.	法 量(cm)	高 底 径	底 径	高 底 径	底 径	法 量(cm)	粘 土	色	調	鑑	成	特 徹
74	弥生土器	壺		(4.4)	長石・石英・金雲母	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ 外面：ヨコナナデ	良	黒堀				
75	弥生土器	壺		(7.75)	長石・石英・金雲母	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナナデ 外面：ヨコナナデ	良	黒堀				
76	弥生土器	壺		(6.5)	長石・石英・金雲母	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナナデ 外面：ヨコナナデ	良	黒堀				
77	弥生土器	壺	[5.8]	長石・石英・雲母・角 閃石	長石・石英・雲母・角 閃石	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ 外面：ヨコナナデ	良	底部にヘラ仕ぬ(網目)				
78	弥生土器	壺		(2.8)	長石・石英・雲母・角 閃石・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	工具ナデ	良					
79	縄文土器	台付鉢	[15.0]	(2.15)	長石・石英・角閃石	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良	曉期(黒川)				
80	弥生土器	壺	[22.6]	(3.0)	長石・石英・金雲母	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ヨコナナデ・工具ナデ 外面：ヨコナナデ	良	黒堀・一部に深付着				
81	弥生土器	壺	[20.0]	(1.7)	長石・石英・金雲母・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	ナデ	良	黒堀・一部に深付着				
82	弥生土器	壺	[28.8]	(4.5)	長石・石英・金雲母	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	ヨコナナデ・工具ナデ	良	赤褐色				
83	弥生土器	壺		(7.6)	[8.6]	長石・石英・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ 外面：ヨコナナデ	良	(指頭熱)	赤褐色		良	
84	弥生土器 (二次 利用)	壺		6.5	6.4	長石・石英・金雲母・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ 外面：ヨコナナデ	良	周縁部凹凸に打ち込み二次 利用	赤褐色		良	
85	或川式土器	縁环		[17.0]	(3.4)	長石・石英・雲母・赤 褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ミガキ 外面：ミガキ	良					
86	或川式土器	壺		[22.6]	(3.2)	長石・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ 外面：ヨコナナデ	良					
87	或川式土器	壺		[24.0]	(3.9)	長石・石英・雲母・角 閃石・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	ハケ目	良					
88	或川式土器	壺		[28.0]	(2.3)	長石・石英・雲母・赤 褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	工具ナデ	良					
89	或川式土器	壺		[28.6]	(3.7)	長石・石英・雲母・赤 褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ・ナナデ	良					
90	或川式土器	壺		(3.2)	長石・石英・雲母・赤 褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ヨコナナデ・ナナデ 外面：ヨコナナデ・ナナデ	良					
91	或川式土器	壺		(6.5)	長石・石英・雲母・角 閃石	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ・工具ナデ 外面：ヨコナナデ	良	黒堀				
92	或川式土器	壺		(6.75)	長石・石英・雲母・角 閃石	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	ハケ目ミニガキ	良	黒堀・ハケ目東側輪郭 : 0.6~ 0.7 cm				
93	或川式土器	壺		12.95	(11.3)	雲母・角閃石	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ・工具ナデ 外面：ヨコナナデ・工具ナデ	良	黒堀・根付着 : ハケ目 6~7本				
94	或川式土器	杯		[8.85]	4.9	5.1	長石・石英・赤褐色	外面：明褐色 内面：明褐色	内面：ナガナナデ・工具ナデ 外面：ヨコナナデ	良	黒堀				

レ ジ ナ ム ル	種 別	器 種	出 土 地	法 量(cm)	口 径	器 高	底 径	施 工	七 色	調 色	調 色	要 素	施 工	特 徴
95	成川式土器	盆		[10.6]	7.2	5.25	板石・石英・雲母・赤 褐色色粒	内面：明るい褐色・赤褐色 外面：明るい褐色・鮮紅色	ヨコナデ・旦旦ナデ	良	黒斑			
96	成川式土器	高杯		(1.95)	[12.2]	長石・石灰・雲母・角 閃石	内面：明褐色～褐色 外面：明褐色～褐色	ヨコナデ・ナデ	良	黒斑				
97	成川式土器	高杯		[23.1]	(6.85)	長石・石灰・雲母・角 閃石・赤褐色粒	内面：赤褐色 外面：明るい褐色～赤褐色	ヨコナデ・ミガキ	良					
98	須恵器	杯		[21.6]	(2.2)	雲母	黄灰褐色～灰黄色	ヨコナデ	良	古代				
99	成川式土器	高杯			(7.55)	長石・石灰・雲母・角 閃石・赤褐色粒	内面：にじみ褐色 外面：にじみ褐色	ヨコナデ・ナデ(滑溜抹)・工具	良	黒斑				
100	成川式土器	高杯			(5.75)	長石・石灰・雲母・角 閃石・赤褐色粒	内面：明褐色 外面：明褐色	ケズリ・工具ナデ	良					
101	成川式土器	高杯		(2.8)	[10.8]	長石・石灰・雲母・角 閃石	内面：褐色・明褐色 外面：明褐色	ヨコナデ	良					
108	土製品	土製 勺子				雲母	赤褐色	孔から放射状に5条あるいは6 条の突起	一方に1つ、もう一方に2 つの穿孔	良				
109	成川式土器	二 チエア 土器		[2.1]	1.95	1.8	長石・石灰・雲母	内面：明褐色 外面：明褐色	工具ナデ?	良	黒斑			
110	須恵器	瓶用瓶			(1.9)	長石・石灰・雲母	暗灰黄色	ヨコナデ	良	高台付瓶形田螺(高台を立 て四方に打ち穴)				
111	鉄製品													
132	須恵器	管		[13.8]	(1.9)									
134	須恵器	壺		[15.4]	(2.5)	長石・石灰	灰白色	ヨコナデ	良	東晉系				
140	須恵器	壺		[38.0]	(2.65)	長石・石灰	灰白色	ナデ	良	東晉系				
141	土師器	小皿		[7.6]	1.15	[5.9]	雲母・赤褐色粒	内面：にじみ・黄褐色 外面：にじみ・黄褐色	ヨコナデ・ナデ(切り離し)	良	黒斑			
142	土師器	皿			(3.3)	7.9	雲母・赤褐色粒	内面：褐色・にじみ・黄褐色 外面：似似褐色	ヨコナデ・ナデ(切り離し)	良				
143	土師器	杯		14.5	3.4	10.1	雲母・赤褐色粒	内面：褐色・明褐色 外面：明褐色	ヨコナデ(回転ナデ)・ナ デ(切り離し)ナデ	良	内回全体に無数の細かいキ ズ			

レーキ 名	種 別	器 種	法 量(cm)	法 量(cm)	法 量(cm)	法 量(cm)	法 量(cm)	内面文様	外面文様	施 工	年 代	備 考
白磁 碗	碗	碗	15.25	6.75	6.5	6.5	6.5	施主：クリーム 色釉：ミストグリーン 輪：クリーム色			11世紀後半 ～12世紀	質入、玉盤 口輪土質より出土
白磁 碗	碗	碗	16.6	7.05	7.0	7.0	7.0	施主：クリーム色 輪：桜草色～桜色			11世紀後半 ～12世紀	質入、玉盤口縫
青磁 蓋付	碗	[7.7]	4.55	[5.3]				施主：バーレルホワイト 輪：ミストグリーン			17世紀後半 ～18世紀初	質入、蛇の目高台 頭
青磁 碗	碗		(2.25)					施主：深青色 輪：オリーブドライ	透弁文	片切形	13世紀前後 ～前半	わずかに質入小片のみ、焼き 不燃灰
青磁 碗	碗		(4.7)					施主：深青色 輪：プロンズ	透弁文	片切形	13世紀前後 ～前半	龍泉窯系
青磁 (口縫部) 碗	碗		(2.15)					施主：灰汁色 輪：オリーブドライ	ヘラ文		14世紀後半 ～15世紀	質入
青磁 (底部) 碗	碗		(2.7)	[4.3]				施主：灰汁色 輪：ミストグリーン			14世紀後半 ～15世紀	龍泉窯系
青磁 (底部) 碗	碗		(1.2)	[5.6]				施主：灰汁色 輪：ミストグリーン			14世紀後半 ～15世紀	龍泉窯系
青磁 (底部) 碗	碗		(2.1)	[6.8]				施主：灰汁色 輪：フロスティグレイ			14世紀後半 ～15世紀	龍泉窯系
青磁 (底部) 碗?	碗		(2.35)	[4.7]				施主：オイスター 輪：わさび色～ろくしきょう	洋文		12世紀中頃 ～後半	質入、高台内黒色、見込みに斜 線入り、質入小片のみ、焼き不 燃灰
白磁 (口縫部) 碗	碗		(2.7)					施主：オイスター 輪：オイスター	洋文		11世紀後半 ～12世紀前半	質入、玉縫口縫
白磁 (口縫部) 碗	碗		[18.0]	(2.0)				施主：オイスター 輪：オイスター			11世紀後半 ～12世紀前半	玉縫口縫
白磁 (底部) 碗	碗		[17.0]	(4.25)				施主：オイスター 輪：サロー			11世紀後半 ～12世紀前半	質入、玉縫口縫
白磁 皿	皿		(3.2)					施主：クリーム色 輪：アイボリーホワイト			近世	質入小片のみ、焼き不燃灰
白磁 (底部) 碗	碗		(2.2)	[7.0]				施主：オイスター 輪：オイスター				
白磁 (底部) 碗	碗		(1.5)	[4.9]				施主：油色 輪：クリーム色				
磁器染付 碗	碗		[11.3]	(4.3)				施主：カクレ 輪：オイスター ミッドナイト	透弁文		16世紀 ～17世紀	焼成やや不良
磁器染付 碗	碗			(3.2)				施主：バーレルホワイト 輪：濃いオブジた透明 文様：うす脚背・靴色	人物文		16世紀	小片のみ、天地、焼き不燃灰
磁器染付 碗	碗		(2.5)	[5.0]				施主：バーレルホワイト 輪：ブルーグリーン 文様：わざわざき色・透明 文様：透明	芝姐文			質入
磁器染付 小碗	碗		(0.7)	2.95							16世紀 ～17世紀	澤州窯系

レ アクト No	種 類	器 種	法 径	器 高	法 量(cm)	色	調	外側文様	内面文様	長	法	生産地	年 代	備 考
130	磁器染付	皿		{1.3}	[8.3]	胎土：バーレルホワイト 釉：白釉 文様：模はなだ			五弁花			18世紀前半	こんなにやく印判	
131	磁器染付	盤(皿) (浅型)		(1.15)	[4.8]	胎土：クリーム色 釉：ベールベージュ			花文			16世紀 ～17世紀頃?		
133	磁器	碗	[8.6]	(2.5)		胎土：バーレルホワイト 釉：モスグリーン							因家	
135	白磁	皿 (浅型)		{1.6}	[9.2]	胎土：クリーム色 釉：アイボリーホワイト							中国産	
136	陶器	甕	[19.6]	(5.7)		胎土：エボニー 釉：ブロンド							蘭亨焼 ～18世紀	
137	陶器	鉢		{2.6}		胎土：茶ねずみ 釉：シダーブラウン							蘭亨焼 19世紀頃	
138	陶器	鉢		(3.25)		胎土：丹柄色 釉：シダーブラウン							蘭亨焼 19世紀頃	
139	陶器	土瓶耳		(3.4)		胎土：茶ねずみ 釉：シダーブラウン							蘭亨焼 ～19世紀	

第14表 石器計測表

レイアウト No.	器種	取上 No.	出土区	出土 遺構	法量				石材
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	
10	磨石・敲石			SH1	23.3	22.6	12.4	7300.0	細粒砂岩
11	砥石				27.7	11.7	9.4	3.3	細粒砂岩
17	軽石製品	133		SH3	9.2	6.8	2.2	29.4	軽石
18	軽石製品	139		SH3	6.8	7.5	9.0	71.0	軽石
19	磨石				9.4	9.9	5.0	660.0	軽石
30	軽石製品	611		SH7	8.1	4.0	2.7	21.4	軽石
31	軽石製品	626		SH7	9.4	8.1	3.1	39.2	軽石
32	軽石製品	628		SH7	9.5	6.5	4.6	54.2	軽石
34	磨製石器未製品	100		SH2	3.9	2.1	0.3	2.2	粘板岩
35	軽石製品	462		SH2	3.4	2.1	1.6	2.8	軽石
36	軽石製品	391		SH2	2.9	1.4	1.1	1.4	軽石
37	軽石製品	434		SH2	6.7	9.6	5.0	51.4	軽石
102	軽石製品	47	D7		10.0	9.4	8.0	176.8	軽石
103	軽石製品	76	1T		6.1	6.0	3.9	50.0	軽石
104	軽石製品	146	D12		12.6	9.1	8.5	186.2	軽石
105	軽石製品	21	E9		7.0	4.4	2.8	25.6	軽石
106	石鐵	106	D12		2.5	1.7	0.6	1.8	サヌカイト質安山岩
107	スクレーバー				3.0	4.4	1.2	11.0	珪質頁岩

第V章 長田遺跡の自然科学調査

科学分析については、以下の分析を行った。

第1節 土器胎土中の植物珪酸体分析

第2節 古墳時代焼失家屋の炭化材の樹種同定、同炭化材の放射性炭素年代測定

第3節 47の完形の壺形土器の内部に残存していた土壤の花粉分析

第4節 2号住居跡の床面土壤のウォーターフローテーションと炭化種子の同定

第1節～第3節については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第4節については札幌大学の高宮広土先生にお願いした。パリノ・サーヴェイ株式会社の報告書については、一部に手を入れている。

土器の胎土分析については、今まで本県での分析例が少なく、対比すべき参考例として、他地域の遺跡の同時代の遺物も分析した。弥生時代は稻作の時代といわれるが、本県においては粗痕土器は数例あるものの、炭化米等の直接的な検出も少ない。弥生時代も古墳時代もいずれも生業が明確でない。そこで、大隅半島の他の遺跡と稻作以外に依存していたと考えられている南島の試料も加え、土器型式が明確なものを見選び分析した。長田遺跡の弥生時代の土器は充実脚台の脚台部分と突帯のついた壺形土器の破片で山ノ口式土器である。古墳時代の試料は成川式の壺形土器の頸部突帯部分、中尾遺跡も成川式の壺形土器の頸部突帯部分である。塔原遺跡は壺形土器の幅広に肥厚した口縁部分で、沖縄県の仲原式土器に近いものである。ウフタIII遺跡は外耳のついた壺形土器である。

ウォーターフローテーションした土壤は、2号住居跡の床面土壤を、54ページのI～IXの場所からサンプリングしたものである。乾燥後に高宮先生に来鹿していただき、ウォーターフローテーションを実施し、その後採取した炭化物を持ち帰っていただきて、炭化種子等の同定を行なった。

第1節 土器胎土中の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料の詳細は、表1に示す。

表1 土器胎土の植物珪酸体分析試料

遺跡名	試料名	器種	年代	備考(調整・混入物など)
長田	遺物	甕脚台	弥生中期	内外面は横ナデ、雲母粒が多い
	遺物	甕	弥生中期	内外面は横ナデ、雲母粒が外面で少なく、内面で多い
	2号住居内	甕	古墳時代	内面はヘラナデ、外面は横ナデ
中尾	10号住居内	甕	古墳時代	内外面は横ナデ、外面にミガキ、ややスス付着
塔原	8号住居内	外耳土器	弥生時代	内外面は横ナデ、雲母粒やや見える
ウフタIII	貝層	甕	弥生前期	—

分析試料は、長田遺跡で出土した弥生土器片2点、古墳時代の成川式土器片1点、および対照試料とした周辺遺跡で出土した弥生土器2点と古墳時代の土器片1点の、合計6点である。

(2) 分析方法

胎土適量をアルミナ製乳鉢で粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析筛により水洗する。この試料から、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステイト、比重2.4)の順に物理・化学処理を行って、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

(3) 結果

a. 植物珪酸体分析

結果を表2に示す。

表2 土器胎土の植物珪酸体分析結果

種類	遺跡名 時 期 場 所	長 弥生中期		田 古墳 2号住 甕	中尾 遺跡 10号住 甕	塔原 弥生 8号住 外耳土器	ウフタIII 弥生前期 貝層 甕
		試料名	甕脚台	甕			
イネ科葉部短細胞珪酸体							
タケ亜科		6	5	239	40	1	3
ヨシ属		—	—	—	4	—	—
ウシクサ族ススキ属		1	1	3	1	—	—
不明キビ型		2	3	14	8	—	—
不明ヒゲシバ型		—	—	14	4	—	—
不明ダンチク型		1	4	24	15	—	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
タケ亜科		5	8	150	47	—	8
ヨシ属		—	—	4	3	—	—
ウシクサ族		1	2	6	17	—	—
不明		6	2	13	78	—	2
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		10	13	294	72	1	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体		12	12	173	145	0	10
総 計		22	25	467	217	1	14
樹木起源III		—	—	—	—	1	221

各試料からは植物珪酸体が検出されたが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また、いずれの試料でも、栽培植物に由来する植物珪酸体は全く認められない。

以下に、遺跡毎にその産状を述べる。

<長田遺跡>

弥生時代中期の甕形土器の脚台と甕形土器では、いずれもタケ亜科やウシクサ族などがわずかに認められるに過ぎない。

古墳時代の2号住居跡から出土した甕形土器では、タケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やウシクサ族などがわずかに認められる。

<中尾遺跡>

古墳時代の10号住居跡から出土した甕形土器では、タケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やウシクサ族などがわずかに認められる。

<塔原遺跡>

弥生時代の8号住居跡から出土した外耳土器では、タケ亜科やウシクサ族などがわずかに認められる。

また、樹木の葉部内に形成される樹木起源珪酸体の第IIIグループ（近藤・ピアスン、1981）が、わずかに検出される。第IIIグループは「Yの字」あるいは「くの字」状の形態で、大部分の樹木葉部に観察される。

<ウフタIII遺跡>

弥生時代前期の貝層から出土した甕形土器では、タケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。しかし、樹木起源珪酸体の第IIIグループ（近藤・ピアスン、1981）が数多く検出される。特に、九州地方や沖縄県の現表土や埋没腐植層では、イスノキに由来する第IIIグループが数多く見られる。また、褐色のバブル型火山ガラス片も、数多く認められる。

(4) 考察

今回調査した、長田遺跡や周辺遺跡で出土した弥生時代や古墳時代の土器胎土からは、栽培植物に由来する植物珪酸体が全く認められなかった。

実験的に材料土壤に稻作耕土を加えて土器を焼成した調査では、被熱後も胎土中のイネ属由米の植物珪酸体はほとんど残り、その産状は材料土壤の由米を反映する傾向が見られる（辻本・伊藤、1995）。

今回検出された植物珪酸体の保存状態が悪く、検出個数にも差が見られた。しかし、前述の調査例を考慮すれば、胎土中にある段階で被熱を受けて溶解したことや、分解・消失した可能性は考えにくい。むしろ、土器胎土中に栽培植物の痕跡である植物珪酸体が、本来包含されていなかった可能性がある。そのため、今回調査した土器胎土には、その製作過程で稻作地などの耕作土やイネ科作物の植物体が混入していないとみられ、今回の結果から各土器の時代時期における栽培植物などについて検討することは難しい。

なお弥生時代の土器胎土では、長田遺跡より出土した中期の甕形土器脚台や甕形土器と塔原遺跡の外耳土器胎土、ウフタIII遺跡より出土した前期の甕形土器では、タケ亜科などがわずかに認められる傾向が見られた。しかし、ウフタIII遺跡の甕形土器では、樹木起源珪酸体の第IIIグループや火山ガラス片が数多く検出された点で産状が異なっていた。土器が製作される過程では、素地となる粘土の粘性を調節するためにシルト・砂分が混入されることがあるが、ウフタIII遺跡の甕形土器でも周囲に分布した腐植火山灰層が混入されたのかもしれない。ただし、現段階では遺跡の立地や周辺の地質に関する情報を十分に把握していないため、想像の域を出ない。

また、長田遺跡と中尾遺跡で出土した古墳時代の甕形土器では、比較的乾燥した場所に生育するタケ亜科が目立ち、開けた場所に生育するススキ属、湿润な場所に生育するヨシ属が認められた。この点は、乾いた場所と湿润な場所に形成された土壤を混ぜて素地としたことや、様々な場所の堆積物が流入して形成された土壤（河川堆積物など）を用いたことが示唆される。これが、地域のあるいは時期的特徴かどうか、現段階で明確ではない。今後資料を蓄積していくたい。

今後、土器胎土の由来や特徴を調べるために、珪藻化石・海面骨針の有無や重鉱物組成の調査を加えることにより、遺跡内の土壤を含め周囲の地質との比較検討をより多角的に行えるものと期待される。

第2節 古墳時代焼失家屋の炭化材の樹種同定、同炭化材の放射性炭素年代測定

(1) 試料

分析試料は、古墳時代の住居跡から出土した炭化材1点である。

(2) 分析方法

a. 炭化材同定

木口（横断面）・杼目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

b. 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお、放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。

(3) 結果

a. 炭化材同定

炭化材は、落葉広葉樹のクリに同定される。解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) アナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

b. 放射性炭素年代測定

結果を表3に示す。

表3 住居跡出土材の放射性炭素年代測定結果

遺構	試料の質	年代値	誤差(±)	$\delta^{13}C$	測定番号
住居跡	炭化材	1590	60	-29.1	GaK-20456

注 (1) 年代値：1,950年を基点とした値。同位体補正がされている。

(2) 誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代。

(3) $\delta^{13}C$ ：試料炭素の $^{13}C / ^{12}C$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した値。

(4) 考察

住居跡から出土した炭化材は、クリであった。出土状況の詳細は不明であるが、住居跡内から出土していることから、住居構築材などの用途が考えられる。

クリは、強度や耐朽性に優れた材質を有し、住居構築材としては適材といえる。これまでに、クリが縄文時代以降の住居構築材に確認された例は、数多く報告されている（千野、1991；高橋・植木、1994）。とくに、東日本での出土例が多く、縄文時代の住居跡の中には出土したほとんど全点がクリであったとの報告もある（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。

本地域では、住居構築材の用材に関する資料が少ないが、今回の結果から本地域でもクリが利用されていたことが推定される。今後さらに資料を蓄積して、詳細を明らかにしたい。

また、炭化材の年代は4世紀後半頃の年代を示し、古墳時代とする考古学的見解と調和的な結果と言える。

第3節 47の完形の壺形土器の内部に残存していた土壤の花粉分析

(1) 試料

試料は、古墳時代の壺形土器〔47〕内埋土である。埋土は、上層と下層に区分される。試料は、各層より1点ずつ採取された。

分析には、下層1点を選択した。

(2) 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(3) 結果

花粉化石は、全く検出されない。

(4) 考察

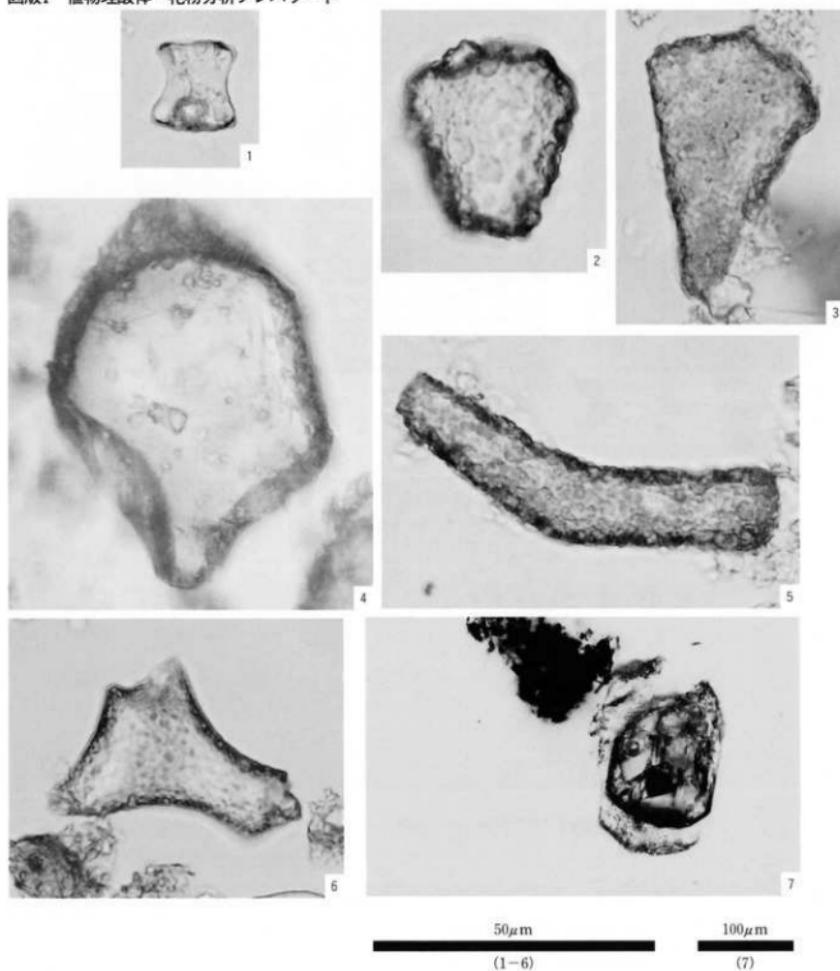
花粉化石は、好気的環境下における風化に弱い。そのため、壺形土器内埋土の下層に堆積した後の風化により、分解・消失したことが考えられる。したがって、今回の分析結果から、土器内容物や周辺環境に関する検討を行うことは難しい。

今後、内容物として想定される水や栽培植物、動物遺体の有無について、珪藻分析、植物珪酸体分析、リン分析など実施することで、さらに情報が得られることが期待される。その際には、同時期の堆積物も併せて分析試料とし、比較・検討することが望まれる。

引用文献

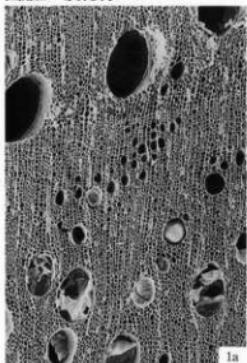
- 近藤謙三・ピアスン友子(1981)樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物
樹木葉の植物ケイ酸体について。帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.
近藤謙三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-64.
江本崇夫・伊藤良永(1995)市兵衛谷遺跡第II群の製作技術について—分析調査結果の解釈から
一、綾瀬市埋蔵文化財調査報告4「市兵衛谷遺跡・新道遺跡—綾瀬市における縄文早期遺跡の
研究—」, p.108-125, 綾瀬市教育委員会。

図版1 植物珪酸体・花粉分析プレパラート

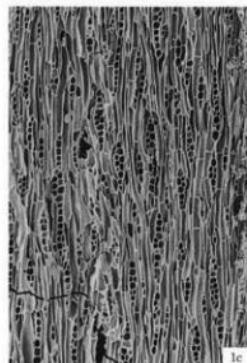


1. タケ亞科短細胞珪酸体（塔原遺跡；8号住）
2. タケ亞科機動細胞珪酸体（弥生時代遺物）
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体（弥生時代遺物）
4. ヨシ属機動細胞珪酸体（長田遺跡；2号住）
5. 樹木起源第IIIグループ（塔原遺跡；8号住）
6. 樹木起源第IIIグループ（ウフタIII遺跡；弥生時代貝層）
7. 花粉分析プレパラート内の状況写真（長田遺跡；壺形土器内土壤）

図版2 炭化材



1. クリ（古墳時代住居跡内炭化材）
a : 木口, b : 柱目, c : 板目



— 200μm : a
— 200μm : b, c

第4節 2号住居跡の床面土壌のウォーターフローテーションと炭化種子の同定

—長田遺跡出土の大型植物遺体—

札幌大学

高宮 広士

1) 遺跡調査の概要

- a : 遺跡の所在 鹿児島県曾於郡有明町
- b : 遺跡の名称 長田遺跡
- c : 調査の機関 有田町教育委員会 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- d : 調査担当者 出口 順一朗 堂込 秀人
- e : 発掘調査機関 有明町教育委員会
- f : 文化 古墳文化
- g : 遺跡の年代 5世紀 (放射性炭素年代測定結果: 1590 B.P.)

2) バックグラウンド

北海道や沖縄以外の地域では、古墳時代の生業基盤は稻作農耕であったと理解されているが、有明町を含め、南九州における古墳時代の生業および稻作のはじまりは、十分には理解されていないようである。南九州においては、縄文時代晩期末・突帯文土器期の遺跡である宮崎県都城市に所在する黒土遺跡からイネのプランツ・オバールが、土掘具と石庖丁と共に検出されている（宮崎県都城市教育委員会 1994）。さらに、この遺跡からは、稈痕を持つ土器や胎土にイネを利用した土器も確認されている（宮崎県都城市教育委員会1994）。発掘調査担当者は、これらのデータをもとに、少なくとも「（縄文晩期末後葉）に稻作が行われていたことは確実である（宮崎県都城市教育委員会 1994: 62）」という結論を述べている。また、鹿児島県鹿屋市に所在する榎崎B遺跡からも、縄文時代晩期中葉の土壌サンプルから、イネやヒエ、アワ、キビを含むキビ族のプランツ・オバールが検出され、藤原はこの遺跡の土壌サンプリング地点が「稻の生産地であった可能性が高い」と指摘している（藤原 1993: 259）。榎崎B遺跡の稻作の形態については明らかではないが、黒土遺跡における稻作は畑作系稻作であったであろうと解釈されている（宮崎県都城市教育委員会 1994: 55）。南九州における最古の水田跡と考えられている遺跡は、宮崎県都城市に所在する肱穴遺跡である。この遺跡からは、プランツ・オバールの分析結果により、弥生時代前期に水田が存在したことが示唆されている（柴畑・横山 2000: 6）。また、同県に所在する島内地下式横穴群（古墳時代）からは、イネや雑穀等の栽培植物の種子は検出されなかったが（堀田 1999），糞石からイネ科の花粉が検出され、この墳イネ等が食されていたと推測されている（金原・金原 1999: 194）。鹿児島県内では、垂水市に所在する宮下遺跡（古墳時代）より得られたプランツ・オバール分析結果は、この時期に「稻作が行われていたこと（を）分析的に検証（古環境研究所 2001: 117）」するものとなつた。これらのデータは、シラス台地をはじめとする火山性土壤が卓越する環境では、稻作、特に水田稻作、は向きであると考えられていた南九州（有明町郷土史編さん委員会 1980；柴畑・横山 2000）においても古い時期から稻作および水田稻作が行われていた可能性を示すものとなっている。

これらのデータは、有明町の近辺（宮崎県、鹿屋市、垂水市）では、縄文晩期から古墳時代にか

けて、稲作が行われていたことを示唆するものもある。では、古墳時代の有明町の生業はどのようなものであったであろうか。長田遺跡の所在する鹿児島県曾於郡有明町には、鹿児島県教育庁文化課による遺跡分布調査により、計93ヶ所の遺跡が知られている(有明町教育委員会 1985)。この調査によると古墳時代の遺跡は7ヶ所のみで、先史時代の遺跡の中では最も少ない。このリストには長田遺跡は含まれていない。また、有明町教育委員会(1985)によると、有明町辺りは、大隅半島では、地下式横穴古墳の東限であるらしい。上記の遺跡分布調査では、3遺跡で古墳が確認されている。この事実は、有明町における古墳時代の生業に関して示唆的である。例えば、有明町誌(有明町郷土史編さん委員会 1980)には、原田の円墳は、周囲215mおよび高さ8mで、「これ程の仕事をなし得る必要な食料もまた大きな量である(有明町郷土史編さん委員会 1980:53)」と記されており、この時代に、農耕が存在した可能性が示唆されている。さらに、弥生時代には、野井倉土橋遺跡から、「鹿児島県内には、現在一本しか出土していない立派な銅矛」が出土したことを報告し、「(このようなもの)を持つことができた豪族(有明町郷土史編さん委員会 1980:51)」が存在したことが推測されている。このようなデータも、弥生時代に農耕があった可能性を示唆するものである。

しかしながら、有明町からは、先史時代における農耕を積極的に支持するデータは知られていない。さらに、有明町には、日南層からなる山地が北東部にあるが、その他は「ほとんどがシラス台地(有明町教育委員会 1985:8)」であり、有明町史によると、水田稲作を営むには、この町の土壤は最適ではないようである(有明町郷土史編さん委員会 1980)。

今回、長田遺跡における生業を理解するために、フローテーション法により大型植物遺体の検出を試みた。今回の分析は、次の点で重要であると思われる。すなわち、有明町における古墳時代の生業を明かにすることである。古墳時代の遺跡でフローテーションを実施することは、鹿児島県内ではおそらく初めてであるので、大型植物遺体が回収されれば、有明町のみならず鹿児島を含む南九州におけるこの時代の生業を理解する第一歩になると思われる。

3) 扱った資料

フローテーションのための土壤のサンプリングは、発掘担当者の出口順一朗によってなされた。土壤サンプルは、焼失家屋である第2号住居跡の9か所から回収された(図33)計256リットルの土壤がフローテーション処理され、その結果、計1907.8グラムの浮遊物が回収された(表1)。第2号住居跡の炭化材が集中していた地点からのサンプリングが主だったので、回収された浮遊物のほとんどが炭化材であった。

4) 検出された大型植物遺体

計410(粒/片)の大型植物遺体が回収された(表1)。栽培植物2種および野生植物4種の少なくとも計6種の植物種が確認された。

イネ (*Oryza sativa L.*)

穎果

計110（粒／片）のイネ穎果が検出された。そのうち、25粒は計測可能であった（表2）。長さ、幅、および厚さの範囲は、それぞれ2.4～4.7mm, 1.4～2.7mm, 0.9～1.9mmであった。また、長さ、幅、および厚さの平均は、それぞれ4.16mm, 3.96mm, および2.03mmで、沖縄のグスク時代の遺跡出土のイネより大きい（Takamiya 1997）。

穎果？

イネの穎果のようであるが、保存状態が悪く、イネの穎果カテゴリーに含めるには、決定的な特徴を有していない大型植物遺体をこのカテゴリーに含めた。計46片が、このカテゴリーに属する。

小穂軸

イネの小穂軸が、1片炉穴から検出された。

アワ（*Setaria italica spp. italica*）

アワの穎果が1粒埋土IVから回収された。そのサイズは、1.5×1.0×0.9mmである。

穎果？

イネの穎果？と同様に、アワかと思えるが、保存状態により、決定的な特徴が欠落する大型植物遺体をこのカテゴリーとし、計3片をこのカテゴリーに分類した。

イネ科（Poaceae）

イネ科の種子が1粒埋土IVから回収された。そのサイズは、1.5×0.6×0.3mmである。

タデ科？（Polygonaceae）？

タデ科瘦果の特徴である3稜形の種子が、1粒埋土IIIから回収された。そのサイズは、1.5×1.0×0.9mmである。

不明

現段階では、同定の不可解な種子を不明種子とした。計2片検出されている。

同定不可能

保存状態が悪く、全く同定のできない大型植物遺体の破片をこのカテゴリーとした。計244片がこのカテゴリーに含まれた。

5) 考察

今回同定された大型植物遺体のなかでは、イネが最も多く、イネ穎果？および小穂軸を加えると、計157（粒／片）であった。同定された大型植物遺体が、総数164（粒／片）であるので、イネ穎果・

イネ穀果？・小穂軸のカテゴリーは、同定された大型植物遺体の約96%を占めることになる。イネ以外の栽培植物は、アワのみで、アワ？を含めても4（粒／片）のみであった。「数・量の多い植物種がある程度重要な食糧 (Crawford 1983: 143)」という古代民族植物学の仮説をもとにすると、長田遺跡の人々（少なくとも、2号住居跡の人々）にとって、イネは重要な食糧源であったようである。さらに、2号住居跡は、豪族等が利用した住居ではなく、また、長田遺跡も古墳時代の一般的な人々の遺跡であったと解釈されている（出口 2000、私信による）。そのため、古墳時代にはこの地域では、おそらくイネは一般的に消費されていたのではないであろうか。今後の調査結果によるが、上述した宮下遺跡（古墳時代）からのプラント・オパール分析もこの仮説を支持するようである。有明町誌（有明町郷土史編さん委員会 1980）によると、明治の頃は、イネのみでは十分ではなく、その不足分を補うために、アワを栽培し、その栽培面積は大きかったとのことである。今後のフローテーション法の導入により、古墳時代におけるアワの重要性も理解されることであろう。また、小畠（2000）によると、コムギが一般的に食されるようになったのは、8世紀以降であるという。今回の分析結果は、小畠の仮説を支持するようである。

次に、ミクロなレベルで2号住居跡のみについて述べたい。まず、同定された大型植物遺体の絶対数からいうと、埋土Vが最も多く、次いで埋土IVおよび埋土IIであった（表3）。イネも、絶対数からいえば同様な傾向にあるが、埋土I, III, VI, VII, およびIXからは、検出されていない。この分布は、埋土II, IV, V, およびVIIが、調理や食に関連するスペースで、イネが検出されなかった埋土のスペースは、これらの行為とは無関係なスペースであったからかもしれない。今後の住居跡からの土壤のサンプリングによっては、このような住居内の行動も理解することが出来るかもしれない。土壤サンプルないにおけるイネの分布密度は、0.6/Iであった（含、イネ穀果、穀果？、小穂軸）。イネの絶対数では、埋土Vが最も多かったが、分布密度でも、やはり埋土Vが最も高く、次に高かったのは炉穴であった。この結果は、これらの地点が調理に関連したからであろう（表3）。分布密度が、どの程度の意味を持つか今回の結果からは強くはいえないが、調理と関連のある炉穴およびその直上の埋土Vが最も高かったことや埋土IIとVIIの密度値にそれほど差がないことは、興味深い結果であると思われる。

また、パリノ・サーヴェイは、2号住居跡出土の土器片1点、長田遺跡出土の弥生時代の土器片2点、さらに周辺地域の弥生および古墳時代に属する遺跡（中尾遺跡、塔原遺跡、ウフタIII遺跡）出土の土器片のプラント・オパール分析を行っている（パリノ・サーヴェイ n. d.）。しかしながら、2号住居跡の土器片からも、他の土器片からもイネのプラント・オパールは、検出されなかった。その結果、「長田遺跡や他の遺跡で出土した弥生時代や古墳時代の土器胎土からは栽培植物に由来する植物珪酸体は全く検出されなかった…今回の結果から、土器が出土した遺跡での農耕について検討することは難しい（パリノ・サーヴェイ n. d. : 3）」と述べている。さらに、パリノ・サーヴェイは、2号住居跡出土の炭化材を分析し、それがクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）であったと報告している（パリノ・サーヴェイ n. d. : 4）。このプラント・オパールおよび炭化材の同定結果は、長田遺跡の人々がクリを食糧源としていたという解釈にも結びつく可能性もあり得るのではないかであろうか。大型植物遺体には、クリやその他の堅果類は1片も含まれていなかった。今回の大型植物遺体の分析結果は、プラント・オパールの分析結果と異り、おそらく長田遺跡の人々は

イネを主食糧源としていたように思われる。また、水田であったか畑であったかは、今回の分析で言及することは難しいが、おそらくイネは長田遺跡の近くで栽培されていたであろう。

この大型植物遺体とプラント・オパールの分析結果が、異なっていたという事実は、過去における農耕の有無あるいは植物食利用を理解する上で、大変重要なメッセージを提供するものと思われる。すなわち、先史時代における生業（植物食利用）を解明するためには、いくつかの独立したアプローチを併用する必要があるということである。今後は、少なくとも、プラント・オパール分析、花粉分析、および大型植物遺体分析を実施すべきであろう。個人的には、沖縄諸島における農耕の始まりを検証しているが、このテーマを理解するためには、南九州の情報が必要であり、今後このような調査が増えることを希望する次第である。

謝辞

このような機会を与えて下さった鹿児島国際大学上村俊雄教授、鹿児島女子短期大学大西智和助教授、鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込秀人氏および有明町教育委員会出口順一朗氏に心より感謝申し上げます。特に、堂込氏と出口氏には多岐にわたって、お世話になり、お二人のご協力無しには、今回の分析は不可能であったと思います。最後に、札幌大学文化学部卒業生の三谷和平君により、浮遊物の一部の分析がなされました。

参考文献

有明町教育委員会

1985 「熊元遺跡・山原遺跡」有明町教育委員会：有明町

有明町郷土史編さん委員会

1980 「有明町誌」有明町郷土史編さん委員会：有明町

小畠弘己

2000 「熊本大学構内遺跡における古代コムギの検出とその意義について」

『人類史研究第12回大会発表下巻集』人類史研究会（編）pp. 39-42 人類史研究会：鹿児島市

金原正子・金原正明

1999 「宮崎県えびの市島内地下式横穴群69号墓から検出された鷺石の寄生虫および花粉分析」『人類史研究』11: 191-194

古環境研究所

2001 「垂水市、新城宮下遺跡における植物硅酸体分析」「宮下遺跡・小房追前遺跡（慈王寺口遺跡・中牟田遺跡）」鹿児島県垂水市教育委員会（編）pp. 115-122 鹿児島県垂水市教育委員会：垂水市

パリノ・サー・ヴェイ株式会社

n. d. 「長田遺跡土壤分析業務委託報告」

藤原宏志

1993 「復崎B遺跡におけるプラント・オパール分析結果について（報告）」

『復崎B遺跡』鹿児島県埋蔵文化センター（編）p. 259 鹿児島県埋蔵文化センター：鹿児島市

堀田 滉

1999 「宮崎県えびの市島内地下式横穴墳群69号墓から出土した種子の鑑定結果」『人類史研究』11: 189-194

宮崎県都城市教育委員会

1994 「黒土遺跡」宮崎県都城市教育委員会：都城市

Crawford, Gary

1983 *Paleoethnobotany of the Kameda Peninsula Jomon*. Anthropological Papers 73. Michigan: Ann Arbor.

Takamiya, Hiroto

1997 *Subsistence Adaptation Processes in the Prehistory of Okinawa*. Ph. D. dissertation, UCLA.

表 1 長田遺跡出土の大形植物遺体

FL No.	土質(シルト質)	土質(シルト質)	土質(シルト質)	存続性(%)	4本継ぎ(片)	4本継ぎ(片)	アワ(粒)	アワ(粒)	イネ類(片)	イネ類(片)	タデ科?	不明(片)	不明(片)	計(粒/片)
1	埋土 V	13.5	138.73	12	7				2			2	22	41
2	埋土 V	10	265.77	53	9				1			2	57	123
3	埋土 V	18	69.53	26	19							6	16	162
4	砂穴	11	33.4	5					1			5	15	1.7
5	埋土 IV	13	202.04	2	7							1	4.1	1.5
6	埋土 IV	14	38.21									4	1	1.1
7	埋土 IV	28	55.2	1								1	2	3.7
8	埋土 II	14	15.81	5								9	14	2
9	埋土 VI	11	150.49	1								33	14	2.4
10	埋土 IV	15	91.07									9	9	2
11	埋土 IV	20.5	110.38	5	4							9	9	2
12	埋土 I	22.5	49.48									1	1	2
13	埋土 IV	22	23.22									0	0	2
14	埋土 III	18.5	116.95									1	5	2
15	埋土 IX	15	7.52									4	4	2.4
	計	256	1907.8	110	46	1	1	1	3	2	1	2	244	410

表 3 サンブル地点ごとの大型植物遺体出土数、植物遺体分布密度、イネ分布密度

土質(シルト質)	アワ(粒)	アワ(粒)	イネ類(片)	イネ類(片)	タデ科?	不明(片)	不明(片)	計(粒/片)						
埋土 I	22.5								1	1	0.04444444	0	4	3.4
埋土 II	14	5							9	14	1	0.39714286	5	4.1
埋土 III	18.5								4	5	0.2707027	8	4.1	2.6
埋土 IV	70	4	7		1	1		2	20	34	0.48571429	0.15714286	8	4.2
埋土 V	41.5	91	35		2	1			9	236	7.85542169	3.03614438	9	3.8
埋土 VI	11											11	4.3	2.7
埋土 VII	22											11	4.5	2.6
埋土 VIII	30.5	5	4									11	4.6	2.1
砂穴	11	5		1		1		3	2	1	0	0	12	1.09090909
計(粒/片)	256	110	46	1	1	3	2	1	2	244		410	1.6015625	0.6132312
													平均(粒)	4.16
													厚さ(cm)	3.96
													幅(cm)	2.032

第VI章 発掘調査のまとめ

遺構は、縄文時代の陥し穴が1基、弥生時代は竪穴住居跡が4基、掘立柱建物跡が2棟、棟持柱掘立柱建物跡が1棟、貯蔵穴1基が検出された。古墳時代は、竪穴住居跡が3基、掘立柱建物跡3棟、溝状遺構1条検出され、中世では土壙墓が2基、掘立柱建物跡が2棟、柵列が3条検出された。

弥生時代の竪穴住居跡は、1号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡のように、2本主柱の中心軸型で、鹿屋市王子遺跡に類例がある。中摩浩太郎氏¹⁾によると、これらは薩摩半島・大隅半島に分布しており、この住居跡でベット状の張出しをもつものは、大隅半島を中心に地域変容したものととらえられるという。

棟持柱のある掘立柱建物跡は、王子遺跡²⁾で6棟、鹿屋市前畠遺跡³⁾で2棟、国分市上野原遺跡⁴⁾で1棟検出されている。いずれも独立棟持柱をもつものがあり、王子遺跡では妻側柱筋にたつものもある。本遺跡の掘立柱建物跡は総柱で妻側柱筋に棟持柱がある。このうち前畠遺跡と上野原遺跡のものは、棟持柱の位置の柱痕が内傾しており、本遺跡の掘立柱建物跡と同じである。この建物跡から、3・5・7号竪穴住居跡に弱い窓みが続き、黒色を呈し道跡と認識できた(図版17)。また一間一間(梁間1間)の建物跡も検出例があり、5号掘立柱建物跡のように中央に土坑をもつものが王子遺跡でも検出されている。1号竪穴住居跡、3号竪穴住居跡、5号竪穴住居跡、7号竪穴住居跡、5号掘立柱建物跡、7号掘立柱建物跡と、棟持柱掘立柱建物跡などは、弥生時代中期の山ノ口式土器が出土していることから、弥生時代中期のほぼ同時期の遺構群と考えられる。

弥生時代の焼失家屋は串良町吉ヶ崎遺跡⁵⁾、鹿屋市前畠遺跡、高山町波見西遺跡⁶⁾などの調査で検出されている。吉ヶ崎遺跡は遺物の出土状況から失火の可能性が高く、波見西遺跡3号住居跡は住居引き払いに伴う放火の可能性が指摘されている。長田遺跡の古墳時代の焼失家屋と考えられる住居跡について、鹿児島市鹿児島大学校内釣田遺跡⁷⁾と指宿市敷領遺跡⁸⁾について3例目である。遺物が伴わないことから、住居引き払いに伴う放火の可能性がある。壁帶ピットをもつ住居跡が古墳時代から存在することから、同時期から壁立住居跡が建築されていた可能性が指摘されている⁹⁾。2号竪穴住居跡、4号竪穴住居跡、6号竪穴住居跡の土器に大きな型式差がないことから、中村直子氏¹⁰⁾のいうところの成川式土器の3期に該当し、5世紀の後半から6世紀初めの時期の住居跡群と考えられる。2号掘立柱建物跡、4号掘立柱建物跡、6号掘立柱建物跡などとあわせて遺構群を形成する。最も東側の溝状遺構も古墳時代の遺構である。

遺物については、弥生時代は中期の土器は山ノ口式土器を中心とする。その中で2は弥生土器の壺形土器の口縁部で、頸部がしまり、球形の胴部を持つ西瀬戸内の中期土器との関連を感じさせる。11は砾石として使われた可能性がある。3号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡からは軽石の加工品が出土している。108は土製勾玉である。古墳時代の成川式土器は5世紀末から6世紀初め(前半)の年代が与えられる。中世は、白磁の碗が、いずれも土壙墓から完形品で出土した。玉縁口縁で12世紀の年代が与えられる。また土壙墓の一つに土鍋を副葬したものがあり、関東の「鍋被り葬」と直接には関係しないと考えるが、今後の類例の増加を待ちたい。同時期の土鍋を使っては、藏骨器が方光寺跡から検出されている。

生業を復元する手立てとして、土器胎土のプラントオパール分析やウォーターフローテーション

を実施した。大隅半島は畠作が不適な地勢として認識され、畠作を中心に生業してきたと考えられてきた。これは大隅諸島・奄美諸島と共に通する状況であったが、それを具体的に示すデーターは今日まで明確に示されてこなかった。木製農具や石製土掘り具等の道具や、遺跡の立地などから想定されてきた。そこで、長田遺跡の試料を採取・分析する際に、前述した地域の他の遺跡の試料等の併せて検討することとした。

土器の胎土分析では栽培植物は検出されなかつたが、粘土の採取や製作場所を想定できる植物珪酸体が検出された。炭化材の樹種同定については、焼失家屋のある釣田遺跡では11点のサンプルから樹種同定し、カシ類、ツバキまたはサザンカ、ヤマハゼ、イスノキ、スギマタハヒノキ、マツの8種の樹種が同定された。また敷領遺跡では6点のサンプルを同定し、クリ、ニレ属、クヌキ科の3種、橋牟礼川遺跡ではシイ属の樹種が同定されている。本遺跡では、1点ではあるがクリ材が同定され、クリは縄文時代以来住居の構築材として多用されるものである。釣田遺跡や敷領遺跡のように試料数を増やすべきであった。

土器の胎土や壺形土器内部の土壤からのいぢれも栽培植物に由来する植物珪酸体は認められなかつた。しかしながら2号住居跡の床面の土壤のウォーターフローテーションの結果は高宮先生の報告にあるように米・アワが検出された。土器製作の場と米の生産・消費の場が異なっていることをも示唆している。なお、鹿児島県では、ウォーターフローテーションは鹿児島市加栗山遺跡で1976年に実施され、1981年に報告された千浦美智子による縄文時代早期の住居跡の土壤サンプルを用いて行われた。キハダ（薬用植物）等7点の種子が検出された。その後は、20年を経て笠利町用見崎遺跡で、6～8世紀の遺跡であるが、約250リットルの土壤のサンプルが分析され、植物遺体はすべて野生植物のものであった¹²⁾。最近本県では末吉町桐木遺跡、東市来町市ノ原遺跡、鹿屋市根木原遺跡などで、弥生時代～古墳時代の住居跡埋土のウォーターフローテーションが行われており、種子同定等はまだあるが簡易なものは中種子町三角山遺跡の縄文時代草創期の住居跡埋土や知名町住吉貝塚の弥生時代相当の住居跡などで実施している。これらの報告書刊行までは、まだ時間を要するが、重要な情報を取り出す手段として、今後も活用が望まれる。

谷が平野部に開く地点の台地上に形成された長田遺跡は、遺構がコンパクトにまとまっており、弥生時代中期と6世紀前後に形成された小集落遺跡を中心とする。今後の両時代の地域史の構築には多くのできない遺跡であろう。

引用・参考文献

- 1) 中澤浩太郎 1998 「南部九州弥生時代豊穴住居の分類」『人類史研究』10人類史研究会
- 2) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 3) 鹿児島県教育委員会 1990 「前原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)
- 4) 長野寛一・富田造郎 1988 「鹿児島県上野原遺跡」日本考古学年報39 (1986年度版)
- 5) 鹿児島県教育委員会 1983 「古ヶ崎遺跡」大隅半島地区埋蔵文化財分布調査概報!鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(25)
- 6) 高山村教育委員会 1999 「波見西遺跡」高山町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 7) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986 「鹿児島大学埋蔵文化財調査当年報告!」
- 8) 指宿市教育委員会 1998 「弥次ヶ湯団地事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第25号
- 9) 中澤浩太郎 1999 「南部九州古墳時代豊穴住居類型の変異似隔する一考察」『人類史研究』11人類史研究会
- 10) 中村直子 2002 「薩摩・大隅、古墳時代中・後期の土器器-その器と地域性-」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨』
- 11) 千浦美智子 1981 「微細遺物フローテーション・セパレーツ法」『加栗山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 12) 高宮広士 2002 「植物遺体からみた奄美・沖縄の農耕のはじまり」『6～7世紀の琉球列島における国家形成家庭解明に向けた実証的研究』平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書

図 版



遺跡遠景
(北側より撮影)



遺跡西側台地遠景
(東側より撮影)



平成11年度 本調査
重機による表土除去作業
(D-9区付近 西側より撮影)

図版 2



平成10年度 確認調査
作業風景（北西側より撮影）



平成10年度 確認調査
8トレンチ遺構検出状況
(南側より撮影)



平成10年度 確認調査
2トレンチ遺構検出状況
(北側より撮影)



平成10年度 確認調査
トレーンチ埋め戻し作業
(北側より撮影)



平成11年度 本調査
精査作業風景 (西側より撮影)



D・E・F-2・3・4区
天地返しによる擾乱状況
(南西側より撮影)



1号竪穴住居跡検出状況
(南側より撮影)



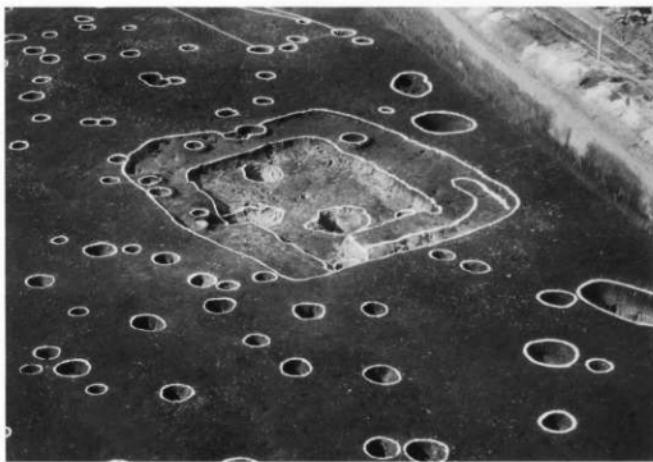
1号竪穴住居跡2/4半裁状況
(北東より撮影)



1号竪穴住居跡完掘状況
(北側より撮影)



調査風景【1号竪穴住居跡（左下）2号竪穴住居跡（中央やや上）】（西側より撮影）



1号竪穴住居跡完掘状況（南東側より撮影）

図版 6



2号竖穴住居跡検出状況
(南西側より撮影)



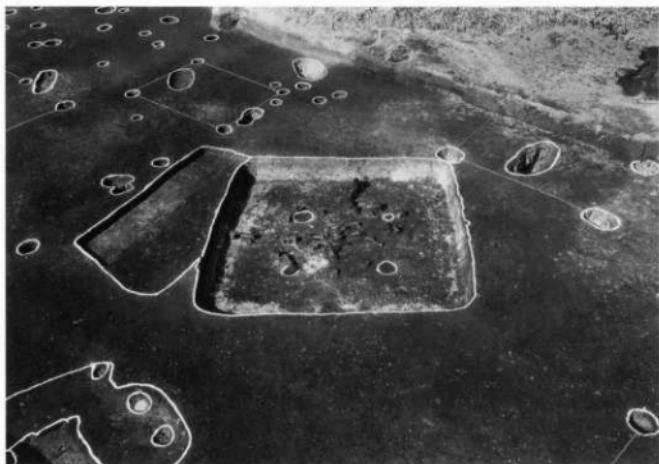
2号竖穴住居跡遺物出土状況
(東側より撮影)



2号竖穴住居跡炭化材検出状況
炭化材中心部近接写真
(西側より撮影)



2号竖穴住居跡完掘状況1（北西側より撮影）



2号竖穴住居跡完掘状況2（南東側より高所から撮影）



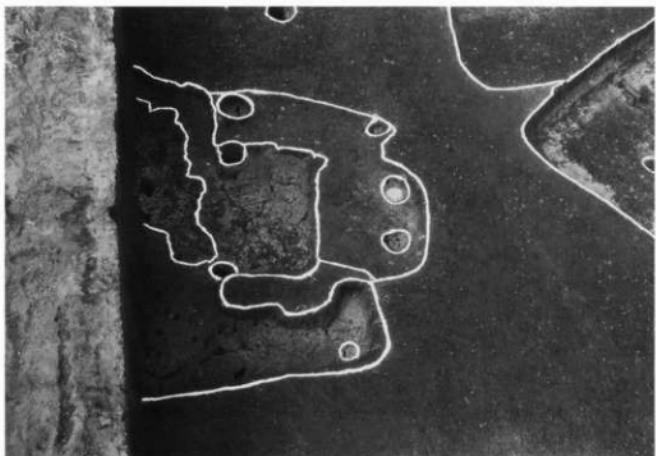
3号竪穴住居跡検出状況
(南南西側より撮影)



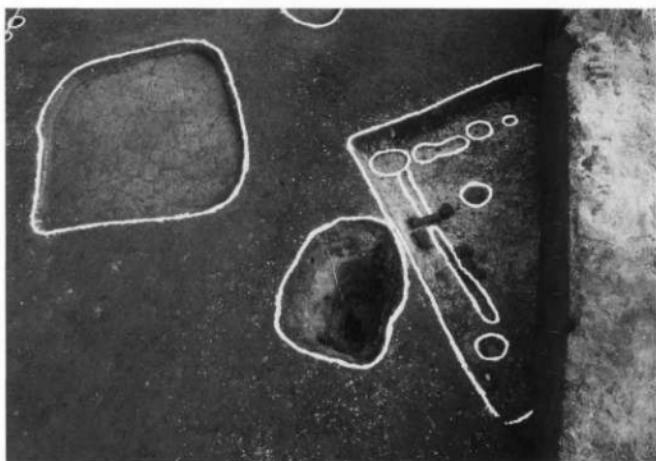
3号竪穴住居跡完掘状況1
(東側より撮影)



3号竪穴住居跡完掘状況2
(西側より撮影)



3号竪穴住居跡完掘状況（東側より高所から撮影）



4号竪穴住居跡完掘状況（西側より高所から撮影）



4号竪穴住居跡
遺構検出状況1
(南西側より撮影)



4号竪穴住居跡
遺構検出状況2
(南西側より撮影)



5・6号竪穴住居跡遺物出土状況1
(南東側より撮影)



5・6号竪穴住居跡遺物出土状況2
(南西側より撮影)



5・6号竪穴住居跡遺物出土状況3
(北側より撮影)



5・6号竪穴住居跡完掘状況及び張り床断面
(北側より撮影)



7号竪穴住居跡遺物出土状況
(南側より撮影)



7号竪穴住居跡完掘状況
(南側より撮影)



1号棟持柱建物及び1号溝跡検出状況
(西側より撮影)



1号棟持柱建物跡完掘状況
(西側より撮影)



1号棟持柱建物跡及び1号溝跡完掘状況
(西側より撮影)



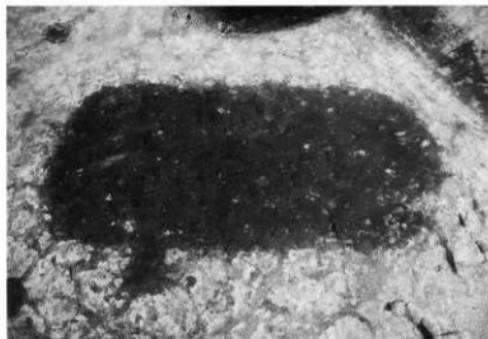
1号溝跡完掘状況
(北側より撮影)



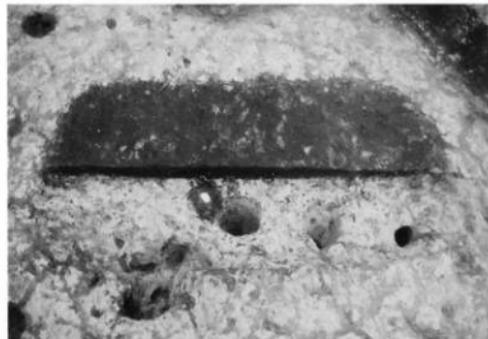
白磁碗及び土鍋出土状況1（南側より撮影）



白磁碗及び土鍋出土状況2（北西側より撮影）



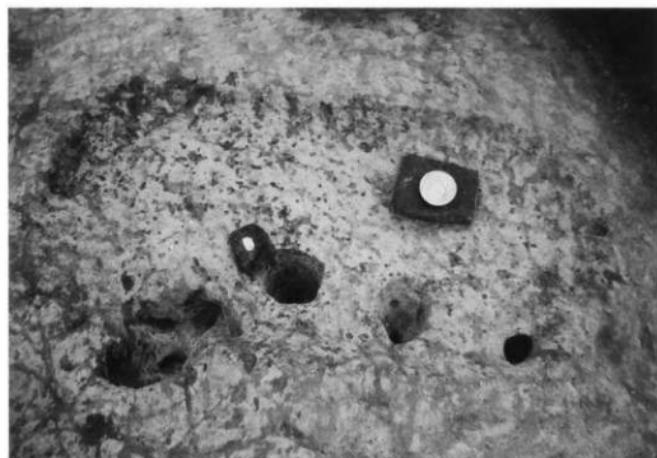
1号土壤墓検出状況
(北東側より撮影)



1号土壤墓半裁状況
(北東側より撮影)



1号土壤墓埋土掘り下げ作業
(東北東側より撮影)



1号土壤墓遺物出土状況（北東側より撮影）



D・E-6~13区遺構検出状況（南東側より高所から撮影）



B・C・D・E-11～15区遺構検出状況（南東側より高所から撮影）



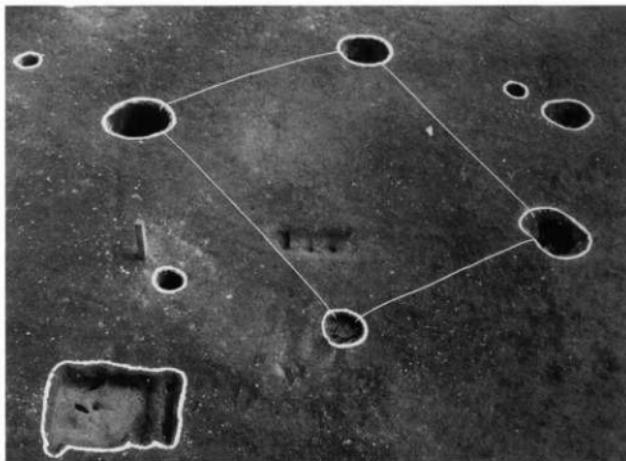
C・D-14・15区遺構検出状況（南側より高所から撮影）



B・C・D・E-11~15区遺構完掘状況（南東側より高所から撮影）



B・C・D-13~16区遺構完掘状況（南東側より高所から撮影）



8号掘立柱建物跡完掘状況（北西側より高所から撮影）



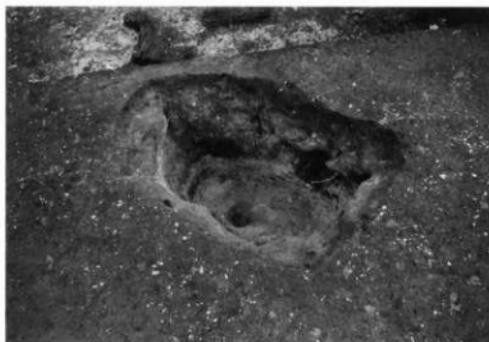
D・E-8~12区完掘状況（垂直方向）



C・D・E-11~13区完掘状況（垂直方向）



B・C・D-13~16区完掘状況（垂直方向）



1号土坑完掘状況
(北西側より撮影)



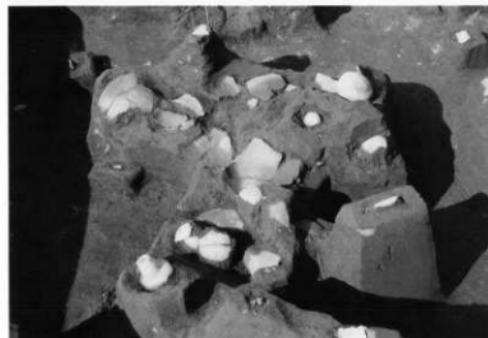
土坑完掘状況
(南東側より撮影)



4号竪穴住居跡土層断面状況
(北東側より撮影)



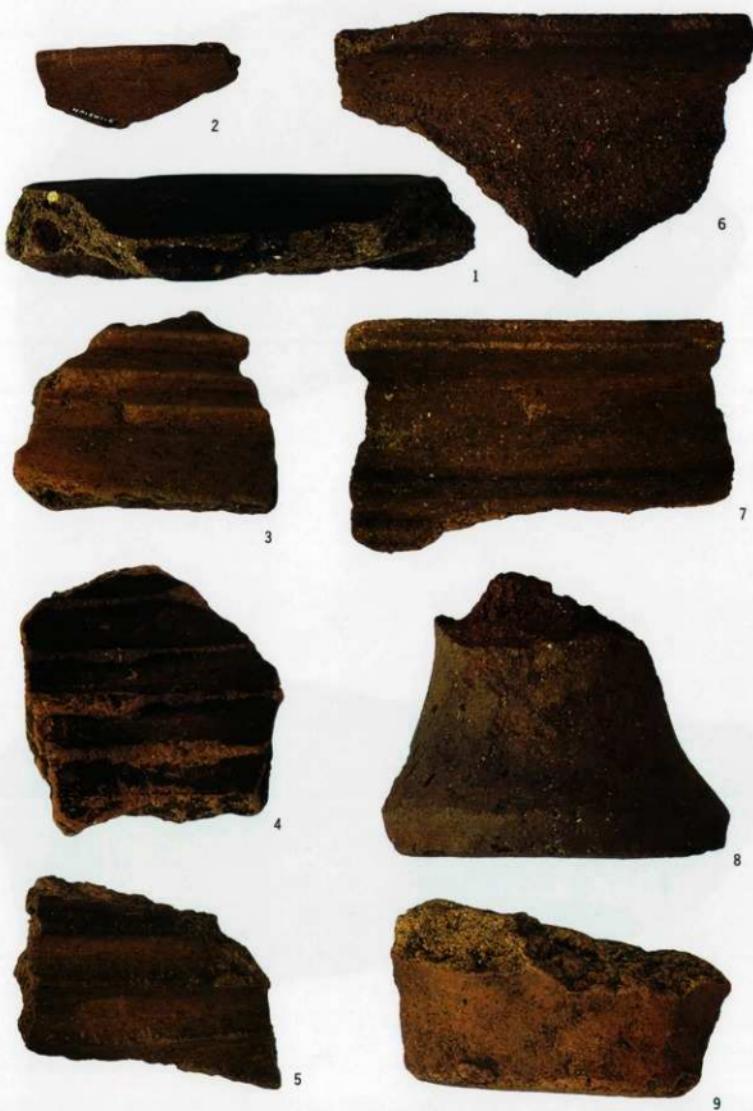
2号竖穴住居跡遺物出土状況
(南西側より撮影)



2号竖穴住居跡遺物出土状況2
(北西側より撮影)



4号竖穴住居跡内
埴形土器出土状況
(北東側より撮影)



1号竖穴住居跡出土遺物—1



10



11

1号竖穴住居跡出土遺物-2



12



16



13



17



14



18

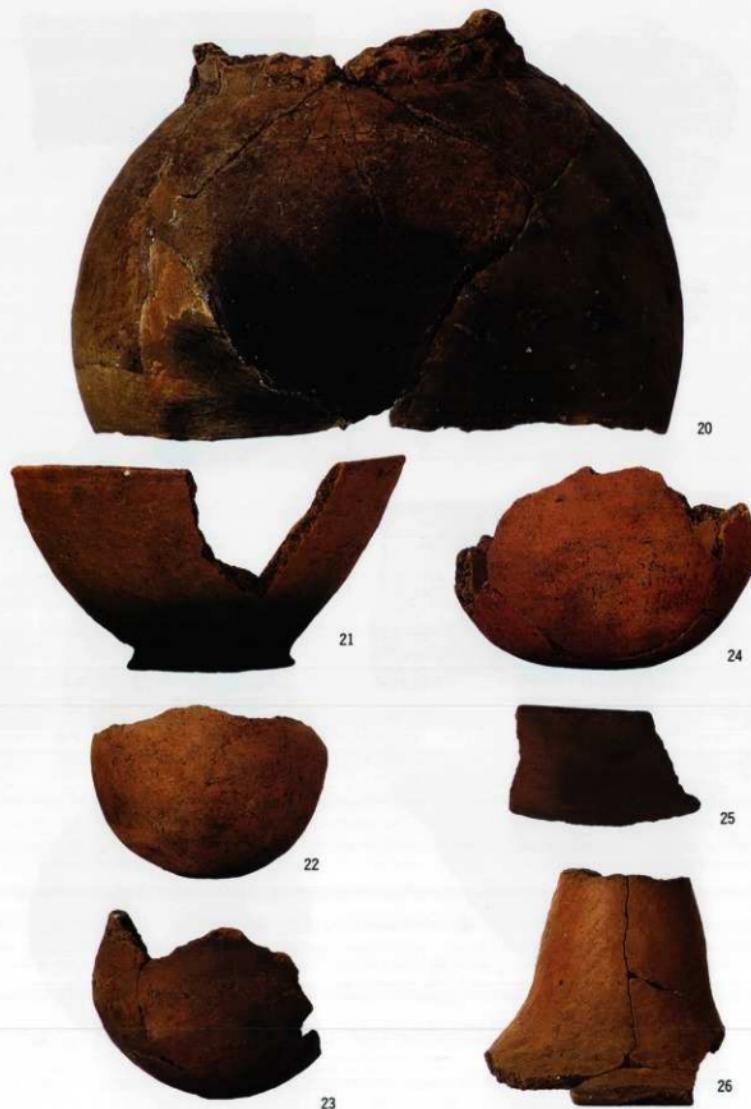


15



19

3号竖穴住居跡出土遺物



6号竖穴住居跡出土遺物



7号竖穴住居跡出土遺物



2号竪穴住居跡出土鉄器・石器



38



40



39



41

2号竪穴住居跡出土遺物-1

图版 30



2号竖穴住居跡出土遺物-2



2号竪穴住居跡出土遺物－3

图版 32



67



68



69



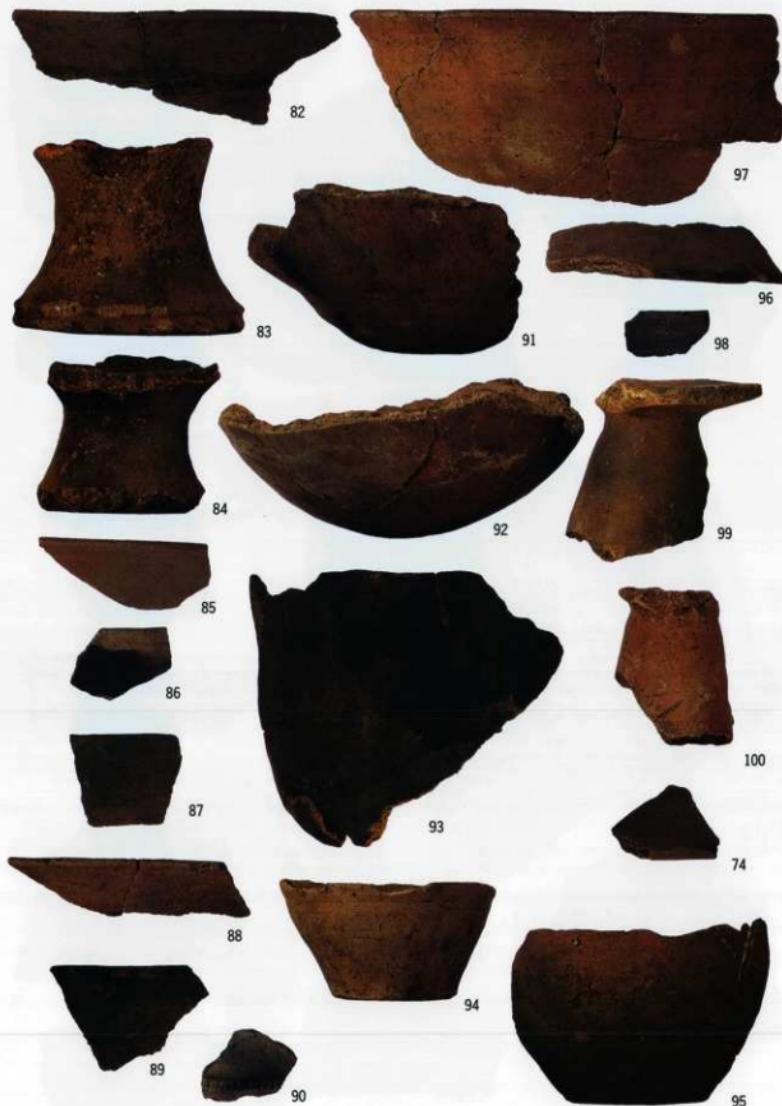
70

4号竖穴住居跡出土遺物 (67) 1号土壤墓白磁 (68) 2号土壤墓出土白磁 (69) 2号土壤墓出土遺物 (70)



包含層出土遺物-1

図版 34



包含層出土遺物-2

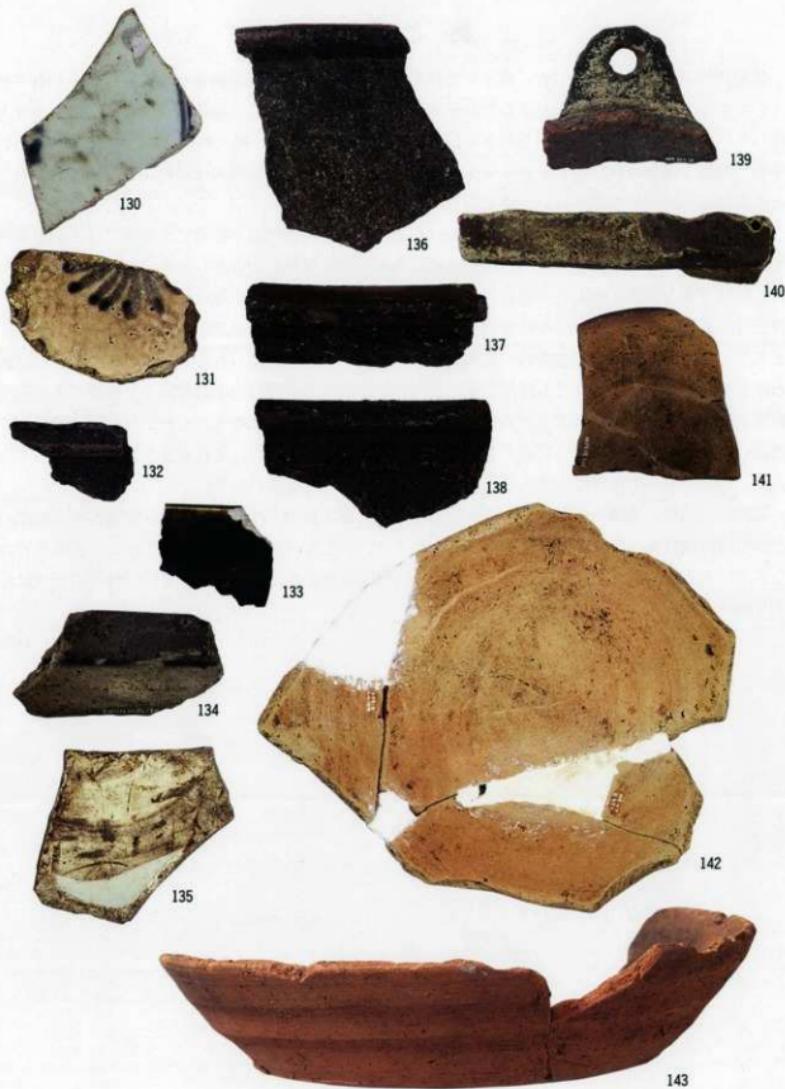


包含層出土遺物-3

図版 36



包含層出土遺物-4



包含層出土遺物-5

あとがき

長期研修講座を平成10年11月に修了して以来、初めて携わった発掘調査が今回報告書を刊行させていただく「長田遺跡」でありました。平成11年8月2日、初めての現場運営に直面して、右往左往していたことが今でも思い出されます。この長田遺跡の調査で、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の遺物・遺構が確認され、特に弥生時代・古墳時代に関しては竪穴住居跡が計7基確認され、その痕跡から当時の生活の匂いが感じられる遺跡がありました。

この遺跡の北側には町指定の原田古墳をはじめとする大塚古墳群が分布し、南側には大崎町教育委員会が平成12年度本調査を行った中世城跡である「金丸城跡」が存在します。また「三國名勝図會」には「妻万五社大明神社…假宿村にあり…初め當社は隣邑志布志原田村にあり、天文九年十一月三日、爰に遷宮せしとぞ…今に舊宮といふ」（「卷之五十九 日向國諸縣郡 大崎 神社」の章）とあり、古来より長田遺跡を含めた原田周辺は人の動きが顕著に見られるところであったようと思われます。このような現在でも確認することができる条件と、今回の本調査により確認できた調査結果が線と線で結ばれつつあると考えてしまうのは、調査員たる私のエゴなのかもしれません、地域の歴史を少しずつ紐解いていくことにより新しい発見が得られ、それもまた調査の楽しみでもあります。これから文化財の啓発・普及につながるものであると思います。

最後に、猛暑、多雨の中ご協力していただきました作業員の方々、整理作業に参加していただいた当町臨時職員及び県立埋蔵文化財センターの方々、そして発掘調査から報告書作成に至るまでたくさんのご支援・ご指導・ご教示いただきました県文化財課をはじめとする各関係機関の方々に心より感謝申し上げます。

(J. D)

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

長田遺跡

発行 2003年3月14日

編集 鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

〒899-7492

鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地

TEL 0994-74-1111

印刷 株式会社トライ社
鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6